



始



596

148

罪の士博ルーナボ

作スノラフ・ルートナア
譯 寛 備 崎 川

506-148



シルヴェ
スト
ール
博士の罪

アナトール、フランス作
川崎 備寛 譯

冬夏社藏版

大正
11. 6. 20
内交



シルヴェストル・ボナール博士の罪

アナトール・フランス作
川崎備寛譯

はしがき

此の小説はアナトール・フランスの出世作であり又彼の作品中最も魅力あるものゝ一つである。それは老境にある一考古學者ボナールの單なる物語に過ぎないが、此の老教授こそは當時三十六歳だつたアナトール・フランスが三十年ばかりの將來に身を投じて自己を描いたものに外ならないと一般に見做されて居る。深切で、皮肉で、諷刺的で、古典を愛し人道を愛する此の小説の主人公が如何に作者其人の性格を反映してゐるかは、讀む人に直ぐ感知される所であらう。

殊に此の小説は、アナトール・フランスの悪い傾向(例へば宗教とか道義とかに對する悪罵)の形跡の殆ど無いといふ點で、又彼の作品の多くが可成り人生に遠いと非難される中に独自の活きた美しい性格を描出して居るといふ點で、一般に彼の傑作とされて居る。此の譯本はラファイオ・ハーンの英譯に據つたことを附記して置く。

大正拾壹年初夏

鎌倉にて

川崎備寛

序

ラフカディオ・ハーン

卓絶した佛蘭西の批評家ジュール・ルメートルは言つて居る。「我々は、我々を悦ばす書物を愛しよう、そして學者の類別や流派に就て心を煩はすのを止さうでは無いか」と。此の寛大な勸告は、殊にアナトール・フランスの場合に當籤まるように思はれる。シルヴェストル・ボナール博士の『罪』の作者は、決して類別し得べきでは無い、——けれども、同じきデリカシーと、同じき同情の繊美さとを有つて、一層麗はしい情緒に觸れてゐる今一人の佛蘭西作家を擧げることには、恐らく困難なことであらう。

若しも我々が、リアリズムに依つて、人間性の凡ての研究に對して独自の價値を附與する所の「眞實」なるものを思惟するならば、我々はアナトール・フランスの中に、極めて美はしきリアリストを見る。——又若し我々がロマンティズムに依つて、眞實そのものを熟知の領域外に引上げ、且つそれを空想の情緒的領域へ惹入れようとする藝術家の無意識的傾向を理解するならば、アナトール・フランスは忽ちにしてロマンティストとなる。だが、それにも拘らず、彼は文學者とし

て全然只一人で立つて居る。若しも彼にして、作者達の何か特殊なグループに都合よく結付けられることが出来るとすれば、それは決して彼の様式が特別に巴里人の優美さを有つてゐる爲めでも無く、又況んや彼の文體が確固たる性質を帯びて居るためでも無い。まことに彼は、本質的に巴里のそれである。——彼の文學的訓育は、決して其他の如何なる零圍氣の中にも習得されることは不可能であつた。彼の情緒解剖の明るい美妙さ、彼の藝術的享樂主義、彼の感覺の生新さと鋭敏さ、斯う云つたものは凡て、彼の名の示す通り、全然フランス的である。然し乍ら彼は、些かも學校の傳統を趁うたことは無かつた。非個性的であると同時に同情的な彼の藝術の魅力こそは全然彼獨創のものである。けにも驚くべく巧みに、此の作者は、自己を検討することに成功して居ることよ！ シルヴェストル・ボナールの日記が一青年の手によつて書かれることが出来たと信ずることは、實際極めて難事である。けれども、快活な此の六十歳の老年者は、言ふまでも無く一青年の空想の産物に外ならない。

アナトール・フランス氏は一つの變轉期に屬して居る。——新らしき科學と新らしい哲學とが、未曾有の急速度を以て思想界を一變して了つた時代に。凡ゆる藝術は、多かれ少なかれ、新らしき思想の風潮に影響され、過度期の誇張された唯物主義を反映して居つた。此の反動は今正に起

りつゝある。——美しい心の創造的作品は、未來の藝術が須らくより高い情緒にのみ訴へる所のもので無ければならないといふことを、早くも指示して居る。物質的自然は夙に其の魅力を失ひ而して人間性は益々歡ばれ初めた。——即ち精神的向上に對する智識は、肉體的發達に對する理解の上に瞭然として續行してゐる。——かくて人類社會の水平線は、各々新智識の獲得を以て我々のために展開して居るのである。——宛も天空の圓が、高きに攀づる者に對して展開する如くに。生き永らふべき小説の作物とは、決して人間心を冒瀆した人々の創作物では無く、それはまことにアナトール・フランスの如く、彼等の時代の文學傾向の遙か上に人間心を向上せしめた人々の其れである。——決して人間性を疑はずして彼等の頁を完全に清淨に保つて居る者のそれである。アナトール・フランスの藝術には感覺的なものとは些しも無い、彼の研究は全然より高き情緒のものだからである。自稱「ナチュラリズム」の厭人的下劣が到底感ずることの出来ないといふことを證示した所のものを、彼は誠實に、單純に、且つ感動的に、我々のために描いて居る。——凡ての溫順と、愛情と、飽くこと無き叡智とを以て、老年の魅力を描いて居るのである。猫に對して自分の著者のことを語る所の、又自分が獲ることの出来なかつた少女の追憶に對して五十年の間眞を保持して來たところの、又は學者としての世界的尊敬を一身に擔うて居る所の、將

又彼自身の寛大な衝動に全く左右されて居る所の、此の愛すべき老翁——まことに彼は、最も憎悪すべきプレフェール嬢の言つてゐる通り「赤ん坊」であるかも知れない。さはれ彼の子供らしさは、只決して老ゆること無き、清淨にして單純な心の、快活な生新さに外ならないのだ。悪心の害意に對する彼の卒直な恐怖、少年の不躰に對する寛大、人生の價値と青春の愉樂とに對する彼の理解、彼の自己卑下と科學に對する愉快な悔恨、彼の絶對的無私と忿怒を高めることの出来ない彼の無能力、決して他を傷付けること無くして而も常に興味を與へる彼の美しい皮肉、斯うしたものは、多くの他の特性と相俟つて、彼をして現代佛蘭西文學中に描き出された最も力強い人物の一人たらしめて居る。彼を非眞實と想像することは全然不可能である。又實際、我々が彼に對する時、丁度我々が幾年かの不在の後、偶然舊友に邂逅して、其の顔と聲とは完全に熟知してゐるにも拘らず、名前だけは對手から再び聞くまで想ひ出せないと言つたやうな、さうした古い友暱に對するが如き氣がするのである。ルメートル氏はシルヴェストル・ボナールから憶測して、アナトール・フランスは老學者ではなくて比較的的青年者であつたと云ひ、且つ既婚者であつたと云つて居るが、我々は此の陳述を疑ふ正當の理由があるやうに思へるのである。——約言すれば、此書は決して自傳的のもので無いといふ主張を我々は拒否することが出来るのである。——此の

非難無かりせば、其の中の他の人物は、恰も學士會の會員のやうに、同じ其生命を以て我々のために生きて居る。極めて單純忠實なる老家事管理婦テレーズ、快活な友達ガブリー夫妻、名譽ある、そして武骨な、英雄的なヴィクトル叔父、十二分に愛くるしきジャーン、是等の人物は各々一三の役割に於て同情溢るゝものがある。

とは云へ、此の魅力的な物語が生命を有つてゐる所以のものは、決してアナトール・フランス氏が獨特の性格を創造する上に非凡な力量を有つて居るためでも無ければ、又巴里の文學的生活の一層深遠な或物を我々に反映する上に稀代の力を有つて居るためでも無い。蓋しそは、如何なる藝術よりも更に古くして而も一面に於て更に若々しき所の、何物よりも尊とき、人間の感情の中の麗はしき美そのものを取扱ふ上に於て、彼は遙かに超兆の技量を有すが故に外ならない。而して此の、感謝と、本然の深切心と、溫順な自己犠牲との、單純な物語によつて、寛大な涙の源泉に觸れる作者こそは、かの單なる動物的の美の夢想を我々のために作成する彫塑家よりも、將又、實在の外殼に過ぎないあの若々しい花の姿を、けにも豊麗に我々のために描く美術家よりも、眞に我々の愛に對して更に多くの資格がある！

目次

第一部

圓木……………1

第二部

クレマンティンの娘……………102

小仙女……………103

小さき聖ジョルヂ……………104



第一部

圓

木

(千八百四十九年、十二月廿四日)

私はスリッパを穿き、寛袍ガウンを着てゐた。私は涙を拭つた。土堤の上を吹いてゐる北風が其れと一緒になつて私の視力を朦朧とさせてゐたのであつた。眞赤な火は、書齋の煙突の中で躍つてゐた。羊齒シダの葉の形をした氷の結晶は窓硝子の面に芽を吹いて、セーヌ河をも其れに懸つてゐる橋々をも、さては又ヴァロアのルーヴル宮をも私の眼から隠さうとしてゐた。

私は安樂椅子とテーブルとを爐の傍へ引寄せて、火の傍へ充分自分の場所を取つた。ハミルカー(猫の名)が私のために態々あけて置いて呉れたのである。ハミルカーは薪架の前に寝そべつてゐた。兩足の間へ鼻を突込んで、褥クッションの上で身體を渦巻きのやうにしてゐた。彼の濃い奇麗な毛は規則的な呼吸に伴れて高くなつたり低くなつたりしてゐた。私が來たので、彼は半開の眼瞼の隙から瑪瑙の眼の一瞥を徐ろに私に投げたが、殆ど其れと同時に、『何だ、詰らない。自分の友達が來たゞけのことだ』と、斯う自分に考へて、又閉ぢて了つた。

『ハミルカー』、私は兩脚を伸ばした時彼に言つた、『ハミルカー、書籍の都の睡たけな帝王——』

お前は夜の守護神だ！ あの大戦の夜に、ヘリオポリスの悪神と闘つた聖猫のやうに、お前は、年寄りの學者が僅かに貯へと不撓の熱心とを犠牲にして手に入れた是等の書物を、咬まうとする忌々しい奴等から防いで呉れる。眠れ、ハミルカー、此の書齋の中で、土耳其の皇后のやうに靜かに。それがお前の武徳を護つて呉れる。何故と云ふに、實際お前といふものゝ中には、鞭租人の恐ろしい姿と、東洋の女の眠たけな美とが結合して居る。眠れ、ヒロイツクな、肉慾のハミルカー。二十日鼠共が、博學なポーランドイストの「アクタ・サンクトラム」の前で踊らうとして出て來る月の出の時間を待つて居る間。』(譯者註。——「聖徒の生涯」を著述するツェスイツト教徒をポーランドなるより斯くは云ふなり。又「アクタ・サンクトラム」は「聖徒の生涯」の意也。此の著作に従事したる最初の人はツォオン。

此の演説の發端はハルミカーを悦ばせた。彼は丁度、火の上の湯沸しの音樂のやうな喉音を立て、其れに和してゐた。けれども私の聲が一段と高くなつた時、耳を垂れて、前額の皺寄つた皮を擧め乍ら、私がそんなに熱烈な演説をするのは悪しき嗜好であるといふことを、ハルミカーは私に知らせた。

『此の老耄れの學者は』と、ハルミカーは明確に考へた、『全く無駄なことばかり言つて居る。それから見れば、家事管理婦は判斷の足らないことは一言も言はない——食事の報せら鞭の約束』

が、兎に角何方かを含んだ充分意味のあることを言ふ。あの女の言ふことなら誰にでも解る。だが此の老人と來たら、皆目意味をなさないことを幾らでも結び合はすのだ。』

ハミルカーは、斯う自分に考へた。

彼に勝手に冥想に耽らせて置いて、私は一冊の本を開けた、そして興味を以つて其れを讀みはじめた。それは寫本類の目錄であつたから。私は。カタログの其れよりも、より讀み易く、より魅力ある、より愉快的な讀み物を知らない。私の讀んで居つたのは——千八百二十四年、サー・トーマス・ラーレイの圖書係トムソン氏によつて編纂されたものであるか——實を云へば簡略に過ぎず居る點で非難さるべきものであり、且つ我々の時代の記録者達が、初めて古文學や古文書學に就ての著述の中へ取入れた所の、精確といふ特徴を具備してゐない。不備の點や、判すべきことが數限りも無く残つてゐるのである。恐らく是れは、私が其れを讀みつゝあつた時に、私よりも想像力の逞しい性質に於ては當然夢想と呼ぶべき精神状態にあるのを、自分で氣が付いた爲めなのだ。斯うして私は、自分の思想の流れの上へ、自分自身を流れるまゝに打捨て、置いたが、其時私の家事管理婦は、不機嫌な調子で、ココソツといふ人が私に話したいと言つて居る旨を傳へた。

果せる哉、誰かゞ彼女の後から書齋の中へ滑るやうに入つて來た。それは小男であつた——見かけは小供のやうな貧弱な小男で、薄つぺらなジャケットを着てゐた。男は幾度もペコ／＼と頭を下けて微笑し乍ら私に近づいて來た。だが彼は非常に蒼い顔色をしてゐた。まだ年も若いし活潑でもあるのに、何だか病身のやうに見えた。私は此の男を見るなり、傷付いた一匹の栗鼠を聯想した。彼は腋下に草色の蓋布箱を抱へてゐたが、其れを彼は椅子の上に置いた。やがて蓋布箱の四隅を外づして、彼は、小さな黄色い本のひと重ねを曝け出した。

『先生、』彼は稍あつて口を開いた、『私はあなた様にお見識りを得る名譽も有たない者でございます。私は書籍販賣者でございます、あなた様。私は此の市の主もな家々の代理をして居ります。そして御親切にあなた様の御信任をもちまして、私に名譽を與へて下さるだらうといふ願ひで、失禮をも願みず少し許り珍らしいものをお目かけに參つたのでございます。』

慈悲の神々！ 正しき神々！ さうした珍らしいものを此の矮人ココソツが私に見せて呉れようとは！ 彼が私に手渡した最初の一巻は、『ネールの塔の歴史』で、ブルゴネーのマーゲレットとキャプテン・ブリダンとの情史の附いて居るものであつた。

『それは歴史本でございます、』と、彼は笑顔を作り乍ら私に言つた——『實際の歴史の書物で

「さうします。」

『さうしたものだ、非常に退屈なものに違ひない。』と私は答へた。『少しも嘘を混へない歴史の書物といふものは、大體極めて退屈なものだからな。僕も眞正歴史を二つ三つ自分で書いて居るがね、若し君が不幸にして、其の中の一冊を戸毎に持廻らうものなら、結局其れを、君の其の草色の羅紗籠へ入れたまゝにして置かねばならぬと云つたやうな危険なことになると思ふね。まさか其れを君から買はうと云ふやうな、そんな馬鹿な料理番だつて一人もゐないだらうからね。』

『全く、はい。』小男は全く温順に答へた。

そして満面に微笑を湛へて、彼は『エロイズとアベイラードの戀愛』と云ふのを私に差出した。だが私は、此の年齢になつて、戀愛物語に少しも用事が無いと云ふことを彼に理解せしめた。

それでも尙ほ彼は微笑し乍ら、『社交遊戯法』を私に示した。——ビケットとかベシユーとか、或はエカルテ、フィスト(註、以上何れも骨牌遊びの一種)、ダイス(註、骰子遊び)、ドローツ(註、二十四個の駒にて遊ぶ一種の西洋碁)、チェス(註、三十二個の駒にて遊ぶ將碁)と云つたものゝ遊び方の本である。

『おゝ！』私は男に言つた、『君が若しくシユー遊びの規則を僕に想ひ出させようと思ふなら、

僕の舊友ビグナン君を連れ来て欲しいものだね。五つの學會が彼を壯嚴に墓地へ送るまでといふものは、僕と彼とが毎晩のやうに骨牌をやつたものだ。で無ければ、あのハミルカーの嚴肅な叡智を、詰らない人間の娛樂の標準まで引下けて貰ひたいね。あの通りクツションの上に寝そべつて居るが、何しろ彼が僕の、夜の唯一の友達だからな。』

小男の微笑は曖昧に不安さうになつた。

『此處に』と彼は言つた、『社會的娛樂、つまり洒落と滑稽とを新奇に集めたものがございます。是れには、赤い薇薔を白薇薔に變へる方法も附いて居りますが。』

私は既う久し前に薇薔と俱に散り果てた人間であること、又洒落に就ても、私は自分の科學的努力の方面に、知らず識らず没頭して居ることで満足して居るといふことを、彼に話した。矮人は最後の微笑を浮べて最後の書物を取出した。そして斯う私に言つた。

『此處に「Cher de Songes」——「夢の鍵」——と云ふのがございます。是れには、誰しもが見ることの出来る凡ての夢の説明が附いて居ります。黄金の夢とか、泥棒の夢とか、死んだ夢、塔の天邊から落ちる夢とか……まことに綿密周到なもので。』

私は口を緘してゐた。それから強ひい舌をもぐぐさせ乍ら、商用の訪問者に答へた。

『成る程、君。だがさうした夢や、其他一千の、嬉しい夢、悲しい夢が。『Dream of life』と云ふ本に、一冊に總括されて居るよ。君の其の黄色い本は、僅に其の鍵を與へて呉れるだらうかね？』

『はい、はい、あなた様。』矮人は答へた、『此の本は實に完全でございます、又お高くはありません——一フラン二十五サンチームでございます。』

私は家事管理婦を呼んだ——私の部屋には呼鈴が無いので——そして彼女に言つた。

『テレーズ、ココッツ君がお前の悦びさうな本を此處に持つて居るのだ——今お前に見せて貰つてやるがね——『Key of Dreams』と云ふので、ほんとにお前に買つてやりたいのだ。』

私の家事管理婦は答へた。

『先生、起きてゐて夢見る餘裕さへ無い者には、尙更眠つてゐる時に夢見る餘裕などございせん。あゝ神様のお蔭で、私の毎日は私の仕事のために、又私の仕事は私の日々のために丁度充分でございます。私は毎晩斯う言ふことが出来ます、「主よ、どうぞ私の取らうとしてゐる休息に祝福を與へ給はんことを」と。私は、立つてゐても寝てゐても、滅多に夢を見ることはございせん。又私は、私の従妹いとこのしたやうに、鳥の毛の掛布團と悪魔とを間違へるようなこともござい

ません。又其れに就ての私の考へを申上げることをお許し下さるなら、あなた様は今此處で早速幾冊も本をお作りになると思ひます。先生様は何千も何千も本を持つてお出ででございます。でも其れは只先生様の頭を變へるだけのことですよ。私は何うかと申しますと、只つた二冊有つてだけでございます——カトリック教の祈禱書と、「中流割烹書」と——でも此の二冊だけあれば私の必要と希望とに對しては全く充分でございます。』

斯う言ひ乍ら、私の家事管理婦は、小男に手を貸して、彼の商品を緑色の蓋布の申へ再び縛りあけてゐた。

矮人ココッツは微笑を止してゐた。彼の和らいた顔は苦しうな表情をしてゐたので、私はそんな不幸な人に擲な擲なふのを氣の毒に思つた。私は彼を呼戻した、そして私が『Histoire d'Estelle et de Nemorin』をチラと瞥見したと云ふことを彼に語つた。彼の書物の中に其れがあつたのである。そして私は、男の羊飼や女の羊飼と云ふものが非常に好きであること、又相當の値段で、此の二人の完全や戀人の物語を、是非買ひたく思つて居るといふことを、彼に語つた。

『あの本は、一フラン二十五サンチームでお賣り致します、あなた様』とココッツは答へた。其の顔は急に喜びに輝いた。『是れは歴史的のもので、屹度お氣に召すでせうと思ひます。あな

た様のお氣に召すものは、私がチャンと心得て居ります。あなた様が鑑識家でゐらつしやることは能く存じて居ります。明日は「法王の罪過」と云ふのを持參致しませう。其れは良い本です。色刷りの入つたアマチュール版を持つて参りませう。」

私は彼に、決してそんな事をして呉れないように懇願した。そして彼を都合よく送り出した。草色の蓋布籠と代理人とが廊下の蔭に姿をかくした時、私は管理婦を顧みて、何處からあの小男が落つこちて來たのかを訊いた。

『落つこちたとは、それは又お言葉でございますね。』彼女は答へた。『あの人は屋根から天降つたのでございます、先生様。そこにあの人がお神さんと一緒に暮して居るのでございますよ。』

『あの人に妻君があるのかい？』テレーズ。これは驚いた！ 女といふものは實に不思議な動物だね！ それも屹度非常に不幸な小女に違ひない。』

『實は、お神さんがどんな女だが私も存じません。』テレーズは答へた。けれども毎朝私は、あの女が、油の汚點のついた絹の着物を曳摺り乍ら階段を歩いてゐるのを見掛けます。あの女は人に對して柔和な眼を教しますよ。又、常識から割出しましても、一體、同情で此處へ容れて貰つてゐるといふのに、あんな眼をしたり、あんな着物を着たりするのは、女にふさわしいことではございませうか？ 皆様があの方夫婦の者を、屋根の修繕中屋根部屋へ住まはせてやつて居るのでございます。亭主が病氣だし、お神さんが可笑しな状態に居るといふことの爲めにね。門番の申しますのでは、お神さんは今朝陣痛が起つて、もう分娩したさうでございます。赤ん坊のために二人は大變困つたに違ひありませんよ！』

『テレーズ、』私は答へた。『あの夫婦には無論子供なんか必要が無いのだ。だが自然は彼等に命じて今一人此の世界に産み出させたのは、自然は彼等を良に陥れたのだ。人間といふものは大自らの企みを打毀すために非常な用心をしなければならぬ。あの夫婦の者は氣の毒だ、決して咎めてはならない！ 絹の着物にしても然うだ、若い女といふものは皆絹の着物を好むものだ。イーヴの娘達（女のこと）は裝飾を尊ぶ。お前自身でも同じだよ、テレーズ——そんなに眞面で、物が分つてゐても——萬しお前が食卓のお給仕するのに眞白のエプロンが無かつたら、大騒ぎを起すぢやないか！ 所で、あの夫婦は屋根部屋に居つて、必要な物は皆有つてゐるのかね？』

『何うして有つて居るものですか、先生様。』管理婦は答へて、『只今あなたのお會ひになつた、あの亭主と云ふのは、これまでは寶石の行商人だったのでございます——兎も角さう私は門番から聞きましたが——何故時計屋を止したか、誰も其れは知らないのです。先刻御覽にな

つた通り、今では曆を賣つて居りますが、それは決して實直な生計を立て、行く方法ではございません。又私は、曆の行商人に神様の祝福が減多に來ないと思ひますよ。これは内所の話ですけど、お神さんは全くやくざ者のやうに、私には見えませよ。六絃琴を弾くことが私の柄に合つてゐるやうに、まあせい／＼赤ん坊を育てる位があの子の柄でせうね。あの夫婦が何處から來たかと云ふことは誰一人知らないらしいのです。でも、何處か氣樂な田舎から「不幸」な馬車に乗つて來たものに違ひないと、私は信じて居りますよ。』

『何處から來たにしても、テレーズ、あの夫婦は不合せだよ。それにあの屋根部屋は寒いからな。』

『仰有る通りです！——屋根は五六ヶ所も毀れてゐまして、雨が瀧のやうに流れ込みますよ。あの人達は、道具類も着物も一つも有つて居りません。指物師とか織物屋とかは、自分の宗派のクリスチャンにだけ餘計に仕事してやるわけでも無いでせうにね！』

『實に氣の毒なことだ。テレーズ。殊にクリスチャンの女は、此處に居る此の異教徒のハミルカーよりも遙かに良く恵まれて居ることは無論だ！——一體あの妻君はどんなことを云ふかね、』
『私はあの人達と話すようなことは減多にございませぬ。又お神さんが何を言つてゐるのか、何

を歌つてゐるのか、一向分りませぬ。でもあの女は一日中歌つて居りますよ。私が表へ出掛け時にも歸る時も、いつでも何か歌つて居るのが階段で聞えますよ。』

『成る程！ ぢやココツツ家の相續人は、村の謎にある卵のやうに、「Ma mère me fit en chantant」(註、母は私)と言ふことが出来るだらう。同じやうなことがヘンリ四世の場合にも起つたのだ。ジャン・ド・アルバートが今にも分娩しさうな氣持になつた時、昔のペアーネイスの頌歌を歌ひ出したといふのだ。』

Notre-Dame du bout du pont,

Venez à mon aide en cette heure !

Priez le Dieu du ciel

Qu'il me délivre vite,

Qu'il me donne un garçon !

橋のたもとのマリア様、

此時私を助けに來て下さい、

天の神様にお願ひします。

私を早く安産させて下さいませうに。

男の子をお與へ下さいませうに。

とね。

『小さい不仕合せ者を、此の世界へ送り出すといふことは、確かに不合理だ。だが、其れが毎日行はれて居る、ねえテレーズ。地球上の凡ゆる哲學者だつて、此の馬鹿けた慣習を根本から造り代へることは到底出来ないだらう。何と言つても、讚めた話さ！ 所で、今日賣るスープは餘分に用意したかい？ テレーズ。』

『はい致しました、先生様。もう泡を掬ひに行く時刻でございますよ。』

『それは良い！ だがね、テレーズ、鍋の中の旨さうな所を一鉢取つて、屋根部屋の隣人に持つて行つて上げるといふ、ココツツのお神さんにね、忘れるんぢやないよ。』

私が言葉を附加へた時、私の管理婦は將に部屋を出て行きかけて居つた。丁度間に合つた。

『テレーズ、お前何かの仕事に取かゝる前に、お前の友達の間番の所へ行つてね、物置から良い薪を一束取つて、其れをあのココツツ一家の屋根部屋へ持つて行くように言つて呉れ。それから、何よりも先づ、一番上等の圓木を選つて立てるように、吩咐けて呉れ——本當のクリスマス

の圓木をね。それから、あの小兒だが、若しも再た此處へやつて来るようだつたら、本人は無論のこと、黄色い本を一冊だつて此處へ寄越さないようにして呉れ。』

老學者の純然たる主我主義を以て、凡ゆる細かい豫防策を取つてから、私は元の如くカタログに立歸つた。

何たる驚愕、何たる感動、何たる不安を以て、私は其處に次のやうな記述を發見したことであらう。今でさへ私は、手の慄えを感じないでは其れを書き寫すことが出来ない。

『LA LÉGENDE DORÉE DE TAQÛES DE GENES (Taqûes de Voragine; — traduction française, petit in-4.

尙此の稿本は十四紀の編纂にかゝり、汎ねくシヤツク・ド・ゾアラチンの名著の完譯を収録せるのみならず、(一)聖フロレオル、聖フェリユーチオン、聖セルマン、聖ヴァインシエント、及び聖ドロクトヴユースの各傳記、(二)「オークツールの聖セルマン師の奇蹟的埋葬」の詩一篇を加へたり。此の反譯並びに諸々の傳記及び詩は僧徒アレキサンダーの手に成りたるもの也。

『此の稿本は贗皮紙の上に書かれたり。それは金銀等をもつて粉飾したる文字を數夥多含み、且つ、稍や不完全なる保存の状態に於て、美しくもされたる二枚の小挿畫を含む。——一は聖母マリヤのエル

サレム入京を示し、他はプロセルピンの戴冠式を描きたるもの也。」

何といふ発見だらう！ 汗は私の額に浸み出し、一材のヴェールが眼の前に来るやうな気がした。私は身慄ひした。顔がほてつた。物を言ふことが出来なくて、急に、有らん限りの聲を上げて叫びたい衝動を感じた。

何といふ寶物だらう！ 自分は四十年以上も基督教佛蘭西の歴史に就て、特別な研究を續けて来た。就中、サン・ゼルマーン・ド・プレの、あの壯麗な僧院の歴史に就て。そして其後、あの我々の國家を創建した所の「皇帝たる僧侶」達を出版して來てゐた。今、與へられた叙述が責むべき不完全を有つて居るにも拘らず、此の、クラーク・アレキサンダーの稿本は、あの大僧院から來たものに相違無いと云ふことは、私に明かなことであつた。萬事は此の事實を立證して居る。譯者によつて附記されて居る傳説の凡ては、チルデベルト皇帝の手に成る大寺院の敬虔な創建と密接な關係を有つて居る。次に、聖ドロクトヴユース傳は殊に重要であつた。これは私の愛すを僧院の最初の僧院長の傳記であつたから。又佛蘭西語の詩句で書いてある、聖ゼルマーン埋葬の詩は、基督教佛蘭西の臍(中心の意)であつた所の壯麗な會堂の本堂の中へ、現實に私を惹入れた。

此書「聖徒傳集」は、其れ自身に於て廣大華嚴な著作である。聖ドミニック教團の執事ジャ

ック・ド・ヴォラヂンと、ジエネの大僧正とが、十三世紀に於て、カトリックの聖者の有ゆる傳記を蒐集した、そして當時の凡ゆる僧院や城塞から「是れこそは『Golden Legend』(十三世紀に集みられたる聖徒傳集を斯)である」といふ叫びが起つた程、それほど豊富な聚集を成した。『Légende Dorée』(殊に羅馬の聖徒達の傳記に富んでゐた。又伊太利の僧侶の手によつて出版されたものであるために此書は聖ピーターの域領に關する事實の取扱方に於て最良の眞價を示して居る。丁度冷たい霧を通して見るやうに、ヴォラヂンは、西歐の偉大なる聖者達にのみ通曉することが出来たのである。同じ理由によつて、アクイタニヤやサクソンの良い傳記書の譯者は、何れも、彼の叙述の中へ自國の聖徒達を附加へることに周到の注意を拂つた。

私は『聖徒傳集』の多數の稿本を讀み且つ校合した。私は其等のことが總て、私の博學な同僚ポーリン・パリスによつて、彼の王立文庫の稿本の美麗なカタログの中に記述されて居るのを知つて居る。其等の中で特に私の注意を惹いたものがあつた。一つは十四世紀の其れで、ジャン・ペレ一の反譯を含み、他は其れよりも世紀が若くて、ジャック・ビグネーの譯文を含んでゐる。何れもコルバートの蒐集集から來て居るものであつて、司書バリューズによつて、あの立派なコルバートイン文庫の書架に加へられたものであつた。私は此のバリューズの名を、脱帽しないでは呼ぶ

ことは出来ないのである。何故ならあの博學な巨匠の夥多あるる世紀に於てさへ、バリュエズは其の偉大さに依つて驚嘆されてゐたからである。私は又、ビゴアのコレクションなる一つの珍しい寫本をも知つて居る。此の著述「ストラスブルクのゴート人」は、尊敬すべき祖先の手で著手され、七十四冊の印刷本があつて、一四七一年に初まり一四七五年に完成されたといふことを私は知つて居る。だが是等の稿本の中にも、印刷本の中にも、聖フワレオル、聖フェリユーチオン、聖ゼルマン、聖ヴィンシエント、及び聖ドロクトヴユースの各傳記を収録して居るものは一つも無い。クラーク・アレキサンダーの名を冠して居るものは一つも無い。要するにサン・セルマー・ド・プレの僧院から來たものが一つも無いのである。トムソン氏の書いた稿本と比較する時は是等のものは只、黄金に對する藥屑に過ぎないものである。私は此の文獻の存在に對する疑ふ餘地無き記述を、私の眼で見、私の指頭で觸れた記憶がある。だが一體其の文獻は——果して何うなつてしまふたのか？ サイ・トーマス・ラーレイはコモの湖の岸邊で此世を去つた。其處へ彼は彼の文學的實物の一部分を持つて行つたのだ。あの貴族的蒐集家の死後、其等の書物は何處へ行つたのか？ 何處へ一體、クラーク・アレキサンダーの寫本が行つて了つたのか？

『又何故に』と私は自分自身に訊いた。『何故に私は、それを一度も所有したことも無く——又

見たことさへ無いのに、其の尊い書物の存在することを知るようになったか？ 若し、在ることが知れたなら、私は、燃えるような亞弗利加の中心へでも、氷ばかりの北極の地へでも、捜しに行くことを辭しないのだ。だが其れの在所を私は知らない。何處かの珍書蒐集狂によつて、三重に鍵のかゝつた鐵の函の中に保管されて居るか何うか、それも私には分らない。何處かの無學者の天井裏で、だん／＼黴が生へてゐるのか何うか、それも私は知らない。恐らく其れのボロ／＼になつた紙が、何處かの家事管理婦の鹽壺を覆ふために用ひられてゐたかも知れないと考へて私は身を慄はした。』

(千八百五十年、八月三十日)

嚴しい暑さは、私に、ゆつくり歩るべく餘儀なくした。私は此の土堤の壁に近接して行つた。生濇い日蔭の中で、古書、彫刻、或は骨董品を賣る店々が、私の眼を惹き、私の好事癖をそゝつた。其等の中を搔搜したり、時間をつぶしたりしつゝ、ブライアド派の一詩人によつて力強く書かれた幾つかの詩を面白く感じた。私はワットーの手に成つた優雅な假面を吟味した。私は、二

本の手のある劍と、鋼鐵の頭兜と、頬兜との重さを、眼で感じた。何といふ分厚い兜であらう！何といふ重さうな胸當であらう！——王だ！ 巨人の装具なのか？ 否——昆蟲の背甲だ。當時と正反對だ、我々の強さは内部にある、武装した精神は弱い肉體の中に潜んで居る。

……此處に古代婦人のバステルの肖像畫がある——顔は、影のやうに朦朧として居るが、微笑して居る。片方の手は、透かし編みの毛糸の手袋を穿いて居る、そして頸にリボン巻いた一匹の狎を彼女の滑がな膝の上に支へて居る。此の畫面は一種の魅力的な憂鬱で私を充たす。我が胸の中に半ば消えかゝつたバステルの肖像畫を有つてゐない者は勝手に私を嘲笑するかい！ 厩舎を嗅ぐ附ける馬のやうに、私は吾家の近づいた時足を早めた。其處に其れがある——大きな人間の窠が。其の中で私は、幾分か辛い智識の蜜を滴らす目的で一つの蜜房を有つて居る。私は遅い努力を以て階段を攀ぢ上る。今二三歩で自分のドアに達するであらう。だが婦人の裝束姿が絹摺れの音をさせ乍ら降りて来る。私は其れを見るといふよりも寧ろ靈感する。私は佇立する、そして自體を欄干にピタリと附けて餘地を作る。降り 来る婦人は頭に何物も被つてゐない。彼女は若い。彼女は歌つて居る。彼女の眼と齒とは影の中に閃めく。何故なら彼女は唇と眼とで同

時に笑ふからである。慥かに彼女は隣人である、極めて懇意な隣人である。彼女は可愛らしい赤ん坊を、小さな男の子を腕に抱いて居る——女神の子のやうに全く裸體である。赤ん坊は小さな銀の鎖に附けた徽章を頸に下けて居る。偶と見ると赤ん坊が自分の拇指を吸ひ乍ら、此の古い宇宙の上に初めて見開いた大きな眼で私を見て居る。同時に母親は、狡猾さうな神秘的な風に私を見る。彼女は佇立する——私は少く顔の赤らみを感じる——彼女は其の小さき者を私に差出す。赤ん坊は拳と腕との間に可憐な皺を有つて居る、頸のぐるりにも可愛らしい皺が一つある、そして頭の先きから足の端まで、身體中に、最も愛らしい皺が、薔薇色の肉の中に笑つて居る。母親は誇らしげに赤ん坊を私に見せる。

『先生様、』と彼女は言ふ、『此の子供は非常に可愛らしいと思ひになりませんか——私の赤ん坊は？』

斯う言つて彼女は片方の小さい手を取り、其れを赤ん坊の唇へ持つてゆく、そして今度は其の石竹色の可愛らしい指を私の方へ出して言ふ、

『坊や、此の紳士に接吻をお授け。』

やがて彼女は其の小さい者を抱きかゝへて猫の速さで逃げるやうに行く、そして廊下へ消へて

了ふ。物の臭ひから察するに、廊下は何處か臺所へ通じて居るに違ひない。

私は自分の棲家へ飛込む。

『テレーズ、今先き階段の所で、帽子も被らない、可愛い、赤ん坊を抱いた若い母親に會つたが、あれは誰だら、ね？』

するとテレーズは、それがココツツ夫人だつたと答へる。

私は、さも遠い幻影を掴まうとするかのやうに、天井を凝視する。やがてテレーズは、去年私の處へ曆を賣りに來た小男の本屋のこと、其の間に其男のお神さんが分娩して居つたといふことを、私に思ひ起させる。

『して、ココツツ自身は？』と私は訊いた。

私が二度とあの男を見る譯には行かないといふ返事である。哀れな小男は地面の中に寝かされて了つてゐたのである。私の知らぬ間に、又實際極めて少數の人のみが知つてゐたのである。ココツツの神さんの幸福な分娩の後ほんの暫くしてからのことであつたのである。私は、彼の妻が自分を慰めることが出來て居つたといふことを知つた。私も亦同じく自ら安堵した。

『だが、テレーズ、』私は訊いた、『ココツツのお神さんは、入用なものは見て自分の屋根部屋の

中に有つて居るのかね？』

『先生様があの女に就て御心配なさるのなら』と私の管理婦は答へた、『それは大馬鹿と申すものでございますよ。屋根の修繕が出來上つた時、皆さんがあの女に、屋根部屋を立退くように注意を與へたのですよ。でも矢張り彼處に居るのでございます——家主さんや、差配さんや、門衛や、代官様が、幾ら言つても駄目なんでしょう。あの女が屹度皆さんの心を迷はして了つたのでせうね。氣の向いた時は立退くでせう、先生様。でもあの女は自分の馬車の中へ立退く積りでますよ。あゝ其れを申し上げますなら！』

テレーズは稍暫く思ひに耽つた、それからこんなことを言つた、

『美しい顔は天の呪ひでございます。』

『ちや、其の呪ひを赦されて居ることでは俺は天に謝さなければならぬ。所で、さあ！此の帽子とステッキとを形付けて呉れ。少しモレリーの本を読んで自分を慰めねばならぬ。俺の此の古い狐鼻を信することが出来るなら、どうやら飯の時に美味い料理の雛鶏にありつけさうだね。あの尊い鶏を世話してやるがいゝ、そしてお前の隣人を慰めてやるのだ。そしたらお前もお前の主人も、其の酬りとして彼等から慰められるのだ。』

斯う話しかけ乍ら私は、王者の如き系圖の、貴い分派を辿るべく着手した。

(千八百五十一年、五月七日)

私は聖者達の理想に従つて冬を過ぎして来た。そして今、ケーイ・メラケー(波止場の名)の燕共は次々に歸つて来て、丁度私の許を去つた時のやうに私を見出す。小さく暮らす者は變ることも少ない。又、自分の歳月を古書籍の上に費ひ果たすことは殆ど生活とは云ひ難い。

だが私は今日、生活から滴る所のあの漠然たる憂鬱が、以前よりも少し許り餘計に、深く自分に滲み込んで居るよう感じる。私の智識の組織が(私は大膽に其れを自分自身に告白する積りは無い!)クラーク・アレキサンダーの稿本の存在が初めて私に知れたあの尊い瞬間以來。づつと攪亂されたまゝ残つて居るのである。單に幾折りかの羊皮紙の本のために私の休息を失つて来たといふことは不思議であるが、是れは疑ひも無き事實なのである。何等の要求を有たない哀れな男は最大の富を所有する。彼は彼自身を所有する。何物かを望む富者は單に憐むべき奴隷に過ぎない。私は正しくさうした奴隷である。最も愉快な楽しみ——優雅な落付いた人々との會話と

か、他所で友達と食事するとか——さう言つたものは、私の欲しがつて居る所の、又私が其の存在を知つた瞬間から欲しいと思ひつゞけて来た所のあの稿本のことを、私に忘れさすには足りない。私は晝でも夜でも其れの欲求を感じる。凡ての悦び、凡ての悲しみの中にも其物の欲求を感じる。仕事中にも眠つて居る時にも其物の欲求を私は感ずる。

私は幼児としての私の欲求を思ひ出す、私は自分の幼年時代の色々な強い欲求を、實に能く理解することが出来るではないか!

私は、自分が八歳の頃に、いつもセーヌの河岸の見窄しい小店の窓に陳列されて居つた或る人形のことを、驚くべくまざくと、再び見ることが出来る。どうして其の人形が私を惹付けるやうになつたかといふことは、私には分らない。私は自分が男の子であることを非常に誇りにしてゐた。私は小さい娘共を輕蔑した。そして強い白い髯が自分の顎に逆立つ日の來るのを無性に願つた(それが嗚呼、現在來て居るのだ!)。私は軍人の眞似をして遊んだ。又私は自分の搖馬の馬糞を取るといふ口實を設けて、いつも植木の間を荒し廻つたので、氣の毒な母は自分の窓臺に顔を出して居るのを常としてゐた。凡て男らしい遊びであつた。斯う私は敢て言ふ! にも拘らず私は、人形を欲しいといふ欲望にさいなまれた。ヘルキユールスのやうな人物も、時にはさうし

た弱さを有つて居る。私が戀ひ慕ふた此の人形は果して美しかつたらうか？ 否。私は今彼女を見る事が出来る。彼女は兩の頬に紅い斑點を有つて居つた。そして柔い短かい腕と、恐ろしく堅い手と、廣かつた長い脚とを有つてゐた。彼女の花模様の下袴は、二本のピンで腰に留められてあつた。今でも私は此の二本のピンの黒い頭を思ひ浮べることが出来る。其れは極めて俗惡な——田舎臭い人形であつた。其の當時私は、まだ最初のズボン^{ズボン}をさへ穿^はかない前のほんの子供ではあつたが、其の人形が美とスタイルとに缺けてゐたこと——つまり平凡な野卑なものであつたといふことを完全に意識して居つた。にも拘らず私は彼女を愛した。私は正しく其の爲めに愛したのだ。私は彼女だけを愛した。彼女を私は欲した。兵隊や太鼓は、私の眼には何物でも無くなつて了つた。私は搖馬の口へヘリオトロブやヴェロニカの若葉を入れてやるのを止した。其の人形が私にとつては全世界であつた。私は野蠻人に相當した謀をめぐらして、セーヌの河岸の小店の傍へ私を連れて行くように、保母のヴィルジニーにせがんだ。私は、保母が私の腕を取つて私を曳き戻すまで、其の窓に鼻を押付けて居るのを常とした。『シルヴェストル様、遅くなりましたよ、お母様がお叱りになりますよ。』其の時分のシルヴェストル君は、叱られたり鞭打たれたりすることは殆どしなかつた。だが保母は、軽い羽のやうに彼を持上げた。そしてシルヴェストル

君は力に屈服した。後年に至つて、年と共に彼は衰へた。そして時々恐怖に襲はれることがあつたが、當時の彼は始終何物をも恐れなかつた。

私は不幸であつた。只何となく、然し不可抗の羞恥に妨げられて、私は自分の戀の對象に就て母に話すことは出来なかつた。私の凡ゆる苦悶は其處から生じた。永い間其の人形は、間斷無く心象に現はれたり、ちつと私をみつめたり、私の方へ兩腕を擴けたりして、忽ち彼女の外觀を神祕な玄妖なものにする所の一種の生命を私の空想の中にもたらした。そして其のために一層魅力ある熱望の對象となつた。

遂々、或日——其日を決して私は忘れまいと思ふ——保母は私を、私の叔父のヴィクトル大尉の所へ連れて行つた。彼は私を朝飯に招いて呉れたのである。私は叔父を此上無く尊敬して居つた。これは叔父が、いつも私の母の食事の時一種のシャボン・ア・レイル(幼鷄と蒜との料理)を自分自身の手で拵へて、後で其れをチコリーのサラダの中へ入れるの常としたと理由もあるが、彼がワーテルローで佛軍の最後の砲丸を發射したといふ理由も大いにあるのである。私は其れを非常に美しいことと思つた。又私の叔父ヴィクトルは、彼の飾紐のある上衣で非常な敬意を以て私を靈感せしめた。又それよりも以上に、彼が入つて來ると其の瞬間から家全體を顛倒せしめるといふ彼の態

度にも依つた。今でさへ私は、どう云ふ風にして彼がそんなことを成し得たかを言ふことは出来ない、けれども若し叔父が二十人の會合へ入つて行つたならば早速彼以外に誰の姿も見えず誰の聲も聞えなくなつて了ふといふことを、私は斷言することが出来る。卓絶した私の父は、ヴィクトル叔父に對す、私の崇拜を決して分たうとはしない——私は然う信する理由がある——彼はいつもパイプで打つたり、深切心から背中に拳骨を食はしたりしてゐた、そして彼の無力を責めたものである。私の母は、常に大尉に對して、妹としての我儘を示してはゐたけれども、時としてはブランデーの嗜みを今少し控へるようにと忠言してゐた。だが私は是等の嫌惡や咎責には何等の役割を有たなかつた、そして叔父ヴィクトルは最も純粹な渴仰を以て私を鼓舞した。だから私が彼の住んでゐた小さな下宿屋ルー・グエネゴードへ這入つて行くのにも、一種の得意を感じて居つた。爐の直ぐ傍の小ざいテーブルに並べられた朝食の凡ては、豚肉と菓子、只これだけから成つてゐた。

大尉は私に菓子や純良葡萄酒を頬張らせた。彼は自分の犠牲になつた數限りなき不平を私に話した。就中彼はブルボン一家の不平をこぼした。彼が、ブルボン一家とは誰のことを指すのか私に打明けようとしなかつたけれども、私は、此のブルボンと云ふのが、ワートルローに店を開い

てゐた馬仲買人だつたことを、何ういふ譯からか察知することが出来た。葡萄酒を注ぐための外決して談話を途切れさせたことの無い大尉は、野卑な人間、醜陋な人間、或は「やくざ者」と云ふものを幾人となく散々に罵倒した。「やくざ者」に就ては私は何も知らなかつたが、心の底から其れを輕蔑してゐた。デザート(食後の菓子、果物等を云ふ。又其の時間。)の時私は、叔父がこんなことを言つたのを覺えて居る、つまり私の父は容易に人から鼻先で左右される人間だと云ふのである。だが確かに私は、大尉の言ふことを理解することか出来なかつた。私は耳がブン／＼唸るのを覺えた。又、テーブルが踊つてゐるようにも見えた。

叔父は飾紐のある上衣を引掛け、縁廣の帽子を被つた。それから私達は街へ下りて行つたが、何だか妙に街が一變したやうに思つた。非常に永い間私は此の街へ來たことが無かつたやうに見えた。だが、私達がセーヌ河岸へ來た時、私の人形の觀念が突嗟に私の胸に歸つて來て、驚くべき方法に於て私を刺激した。私の頭は燃えてゐるやうであつた。私は絶體絶命の策を決心した。私達は窓の前を通ほつて居つた。彼女は其處に居る、硝子の向側に——紅い頬をして、花模様の下に袴を着けて、長い脚をして。

『叔父さん、私は一大努力を以て言つた、『あの人形を僕に買つて頂戴！』』

私は待った。

『男の子が人形を欲しいつて——馬鹿！』叔父は雷のやうな聲で叫んだ。『自分で恥を掻きたいのか？ それにお前の欲しいといふのは、あの古いマッゲぢや無いか！ フン、仲々讚めた野郎だ！ 若しお前がそんな好みを以て生長するなら、決して人生の悦びなんか有てないだらう。又お前の友達だつて、お前を大馬鹿と云ふだらう。劔とか鐵砲とかを買つて呉れろと云ふのなら、俺の年金の最後の銀貨を出してでも買つてやる。だが人形を買へなんて——それこそ大馬鹿だ！——お前の面汚しだ！ 此世に居れるものか！ ねえ、若しお前があんな衣裳をした人形を持つて遊んでゐる所を俺が見るようなことがあつたら、俺はもうお前を自分の甥とは認めないから！』斯うした言葉を聞いて居る内に、私は非常な心臓の苦しみを感じたので、自尊心——惡魔的な自尊心——より外に私を叫ぶことから防ぐものが無いと思つた。

叔父は急に冷靜になつて、再びブルボン一家に就ての考へに立歸つた。けれども私は彼の憤怒の打撃に尙ほ痛みを感じて、言ふべからざる屈辱を味はつた。私の決心は突嗟に成された。私は再び自分の顔へ泥を塗らないことを自分に誓つた——私は斷然、そして永久に、あの赤い頬の人形を見棄てたのであつた。

その日私は、生れて初めて、犠牲といふものゝ嚴肅な快感を味つた。

大尉よ。たとひあなたは一生涯、異教徒のやうに誓ひを立て、教會吏のやうに煙草を喫み、鐘撞男のやうに酒を飲んだといふことが眞實であるにしても、それでもあなたの記憶は尊敬すべきものであります——こは單に、あなたが勇敢な軍人だつた爲めばかりではありません。同時にあなたは、ベテイコートを着たあなたの小さい甥にヒロイズムの感情を示したからです！ 傲慢と懶惰とはあなたをして殆ど耐え難からしめました。おゝ我が叔父ヴィクトル！——だが偉大な心臓はあなたの上着の飾紐の下で、いつも脈膊つて居つたのです。あなたはいつも、釧の穴へ薔薇を挿してゐたやうに、私は今記憶します。あの薔薇——店の安賣子があなたのために摘取つて呉れた（私は今然う信じる理由を有つてゐます）薔薇——あの大きな、爛熳と咲いた、そして凡ての風に其の花弁を散らしてゐた薔薇こそは、あなたの花やかな青春のシンボルだつたのです。あなたはアブサンも煙草も輕蔑しませんでした、でもあなたは人生を輕蔑して居りました。雅美とかコンモンセンスとかは、あなたから教へられませんでした、然し大尉よ、あなたは私に、私がまだ保姆に鼻を拭いて貰つてゐた時分に、私の決して忘れないだらう所の名譽と自己犠牲との教訓を教へて呉れました。

あなたは久しい以前からモント・バルナツスの寺院に眠つてゐます、斯うした墓碑銘の記された扁板岩の下に。

CI-GIT

ARISTIDE VICTOR MAILDENT,

CAPITAINE D'INFANTERIE,

CHEVALIER DE LA LEGION D'HONNEUR.*

* 名譽聯隊の勇士、陸軍大尉アリスチデ・ヴィクトル・マルデン此所に眠る。

けれども大尉、此の墓碑銘は決してあなたが、あなたの枯骨の上に——戰場や歡樂の會所で永く酷使した枯骨の上に据へるようにとあなた自身が考案したものではありません。あなた紙面の中に次のやうな立派な辛々しい碑銘が見出されました、そして其れはあなたの最後の意志であるにも拘らず、其れをあなたの墓の上に置かうとするものは一人も無かつたのです、——

CI-GIT

UN BRIGAND DE LA LOIRE.*

* 惰懶なる悪人此所に眠る。

『テレーズ、明日はイモータル（むぎわらぎく）の花環を拵へて、「懶惰な悪人の墓」の上へ供へようぢや無いか』……

がが、テレーズは此處にゐない。又實際、私は恍惚境の絶頂に居るのを見ては、何うして彼女は私に近付くことが出来よう？ 彼處のあの並木道の果てに、其の圓屋根の下にヴィクトル叔父の戦友達の名を刻んだ Arc de Triomphe（凱旋門）が、巨大な門を蒼穹に向つて開いて居る。兩側の並木は各々の芽葉を春の太陽の方へ伸ばして居るが、まだ凡てが蒼くして慄へて居る。私の傍をあとへくと幾臺もの馬車がブーコーニユの森を指して轉けて行く。私は無意識にブラ／＼と此の當世風な並木道へ入つて逍遙した。私は全く呆然と一軒の假小屋の前に佇ちどまつたが、店先にはジンジャーパン（生薑入菓子）と飲料水の壘が並べられてあつた。一人の見窄しい、檻褸ぼろをまとふた男の子供は、鞞かぶとの切れた肌を曝し乍ら、大きく見聞いた眼で、到底自分如きものがありつけ相も無い其等の贅澤な珍味をみつめ入つて居る。羞耻心の無い無邪氣さを有つて彼は自分の湯仰物を暗示して居る。丸い見据えた眼は、丈の高い、一種のジンジャーパンの男を靜視しつゝあ

る。其れは陸軍大將で、叔父のヴィクトルに少し許り似て居る。私は其れを取上げて金を擲つた。そして赤貧の少年に其れを差出したが、少年は其れを受取るために手を伸さうとは何うしてもしない——大人びた智慧のために、彼は其の好運を信ずることが出来ないからである。能く犬などのする様に、『私にそんな戯談をなさるのは残酷ぢやありませんか！』と云ふやうな顔付をして、私を見上るのである。

『さあ、馬鹿小僧、』私はいつもの習慣である亂暴な調子で彼に言つた、『此れを取れ——是れを、そして食べる。不名譽な氣持無しに自分の嗜好を満たすがいい、俺はお前の年齢の時分はもつと不幸だつたのだ』……所でヴィクトル叔父さん、あなたは——あなたの男性的な風采が、此のジンチャーブレッドの大將によつて私に甦つて來ました。そのあなたの立派な影が現はれて、私の新しい人形を忘れさせます。私達は永久に幼児として残る、そしていつも新しい人形を追ふて走つて居ります。

(同じ日)

最も奇異な風に、あのココツツの家族が、クラーク・アレキサンダーと共に私の胸に結び付いて來た。

『テレーズ、』私は斯う呼びかけて安樂椅子に身を投けた、『どうだね、ココツツの赤ん坊は丈夫かね。既う齒が生えたらうかね——あの其れから俺のスリツバを持つて來て呉れ。』

『今頃は既う生えたでございますね。先生様、』テレーズは答へた、『でも一向あの人達の姿が此頃見えないのでございますよ。春の晴れた第一日に、母親は赤ん坊を連れたまゝ何處へか行つて了つたのでございます。道具類や衣物なんかも皆んな残したまゝで、香油シヤイブの空瓶が三十八も屋根部屋にあつたさうでございますよ。これは何よりの證據でございますよ！ 此の頃あの子の處へ一人の訪問者がございましたが、今はもうあの子は尼寺に居ないさうでございます。門番の姪はあの女がブルヴァール(並木大道)を馬車で乗り廻してゐる所を見たさうでございます。私があなたに始終申上げた通り、あの女の身の果ては碌なことは無からうと思つて居りました。』

『テレーズ、』私は答へた、『あの若い女は、まだ良くも悪しくも身を果てたわけでは無いのだ。又、あの門番とは餘り餘計な話をしない様に氣を付けるがいい。ココツツの妻君は其の子供を大變可愛がつてゐたように俺は思ふ——尤も只俺は階段で、ほんの一寸の間あの子に會つただけだ。』

が。あの女は、少くとも母の愛のために賞讃さるべきだ。』

『先生様、でもあんな風にやつて居る以上、屹度赤ん坊は何も不足したことはないでせう。世間の何方を見ましても、あれ程大事に育てられた、あれ程可愛がられた、あれ程甘やかされた赤ん坊といふものは迎も見つきりませんよ。神様のお祭りの時には、屹度あの女は、赤ん坊に奇麗なお涎掛をさせて、朝から晩まで、あの赤ん坊を笑はせようとして歌つて聞かせて居りましたものね。』

『テレーズ、ある詩人は言つて居る、「嬰兒に向つて笑ひしこと無き母親の子は、神々の食卓に就く價無く、又女神達の臥床に赴く價も無し」とね。』

(千八百五十二年、七月八日)

サン・ゼルマン・デ・ブレにある聖母禮拜堂が修復されて居るといふ事を聞いたので、古い墓碑銘を發見したいといふ希望を抱いて、私は其の教會へ入つて行つた。多分勞働者の努力によつて其れが發掘されるだらうと思つたのである。私は失望しなかつた。造營係の人は、今正に壁に凭せ

かけた一つの石を、深切にも私に見せて呉れた。私は其の石の上に彫りつけられてある碑銘を見るために跪づいた。稍あつて私は、心臓を踊らせ乍ら、半ば高い聲で、古色蒼然たる一隅の影の中で次の如き言葉を讀んだ、――

此の教會堂の僧侶アレキサンドル此處に眠る

彼は聖ヴァンセントとアマンとの願

及びヘロデに殺戮されし小兒等の足を銀になさしめ

その生存中常に清廉の士にして勇敢なりき

彼の魂のために祈る

私は、其の墓碑に被さつて居る塵を、ハンカチでそつと拭つた。私は其れに接吻することが出来た。

『これは彼だ！アレキサンダーだ？』と私は叫んだ。すると圓天井の上か其らの名前が、さながら破れる如く鑑聲を以て私の上へ降りかゝつて來た。教區吏の靜かな嚴肅が、私をして私の恍惚を恥じしめた、私はその人が自分の方へ進んで來るのを見た。で私は、二個の聖水撒器の間に避けたが、又二匹の「教會猫」が私の通路を塞がうとしてゐる様であつた。

何は兎もあれ、其れは紛ふ方なく我がアレキサンダーであつた！ 一點の疑惑を挿む餘地は無い。「Golden Legend」の譯者、ゼルマン、ヴァインセント、フワレオル、フワリューション、及びドロクトヴユース等の諸聖徒の傳記の著書は、正しく私の想像して居つた通り、サン・ゼルマン・デ・ブレーの僧侶であつたのだ。だが何といふ善良な僧侶であらう、又——敬虔にして寛大な！ 彼は、銀の顔と、銀の頭と、銀の足とを作らせた。そして其の確かな貴い遺物は、永久腐蝕しない覆布で被はれて居る筈である！ だが私は彼の製作を永久に知ることが出来ないのだらうか？ 將又此の新發見が、只私の悲嘆を増すように運命づけられて居るのであらうか？

(千八百五十九年、八月二十日)

"I, that please some, try all; both joy and terror

Of good and bad; that make and unfold error——

Now take upon me, in the name of Time

To use my wings, Impute it not a crime

To me or my swift passage, that I slide
Over years."

(大意) 吾れ、或者を悦ばせ、凡てを試む。善と惡との歎びと恐れを。過ちを作り又示す吾れ——「時」の名に於て吾が上に置き、吾が翼を用ひん哉。吾れに向つて罪を責むる勿れ、將た我が速かなる何程に對して。吾れは歲月の上を滑るもの也。

斯く言ふのは誰だ？ そは私の知り盡して居る一人の老人である。「時」である。

シエーキスピニアは、『冬物語』の第三幕目を終つた後で、小さきベルデイタが智慧と美貌とに生長するために、時を残さうとして筆を絶つて居る。そして再び幕を上げる時に、彼は、猜み深いレオンテスの頭を押しつけてゐた、永い歲月の見聞に對して、總勘定を試みるために、古代の大鎌擔人を舞臺に喚出して居る。

脚本に於けるシエーキスピニアのやうに、私は、自分の此の日記の中に、忘却の永い中絶を残して了つた。そして詩人の作風に眞似て、私は、此の九十年間の間隙を「時」そのものをして説明させる。實際、私が此の日記に最初の一行を書きつけて以來、九十年の歲月は過ぎて了つた。そして再びペンを取上げた今、嗚呼！ 私は「今や麗はしく成人した」ベルデイタのことを書く

悦びを有たないのだ。青春と美とは、忠實なる詩人の友である。だが其等の魅力的な幻像は、片時たりとも残りの我々を訪ねることは無いのだ。我々は、如何にして彼等を自分の傍に引留めていゝのかを知らない。若しも或るベルデイタの美しい影が、何か想像しがたい氣紛れを通して、私の腦裏を貫いて通らうとするやうなことがあつたら、彼女は恐らく、犬の耳のやうに隅の折れた羊皮紙の本の堆積に突當つて、恐ろしく怪俄をするであらう。詩人は幸福なる哉！——彼等の白髪は、決して、ヘレンや、フランチェスカや、ジュリエットや、ジュリヤや、ドロシヤなどの飛翔してゐる影を脅かして逃がすことは無いのだ！ だがシルヴエストル・ボナールの鼻のみは、戀愛の女主人公の群を、凡て飛び立たしめるのである。

とは云へ私は、他の人々と同じく美を感じたことがある。私は、大自然が生氣ある形に對して貸し與へた所の不可思議な魅力を知つて居る。そして此の生きて居る土塊は、愛人と詩人とを作る所の歡びの慄きを私に與へた。それに私は未だ曾て、如何にして戀人を作るべきかも、又如何にして詩人を作るべきかも知らない。今、私の思ひ出の中に——あゝ凡ては古ぼけた詰らない文獻に妨げられて居る——私は、何處かの屋根部屋に置き忘れて來た小畫像のやうに、バイオレット色の眼をした美はしく輝いた荒々しい顔を、再び認識することが出来る……あゝ我が友ボナ

ール、お前は何かといふ馬鹿者になりつゝあるのだらう！ フロレンスの書肆が今朝お前の處へ送つて寄越したあのカタログを讀むがいゝ！ 其れは寫本類のカタログだ。彼は又、伊太利やシリートの蒐集者によつて永く保存されてゐた數冊の有名なものゝ叙述を君に約束して居る。そこには更に能くお前に適はしい或物がある、又目下のお前の顔つきに適はしい或物も。

私は讀む。私は叫ぶ！ 年齢の近接と共に一種の、私を恐怖せしむる壯重な態度を取つて居るハミルカーは、責むるがやうに私を見上げる。さながらも私に向つて、此の世に休息が有るか何うかを訊ねて居る様に見える。彼は、彼と同じ程の老いてゐる私の傍で其れを享樂することが出來ないからである。

私の歡喜の突嗟な歡びの中に、私は一人の知友を欲する。私は一幸福人の凡ゆる言葉の流出を以つて、無神論者のハミルカーに話しかけて。

『否々、ハミルカー！』私は彼に言つた、『此の世界に休息なんてものは無いよ。又お前の願つて居る靜穩といふものは人生の義務とは兩立しないものなのだ。それに又お前は、自分で老いて居ると言ふぢやないか！ 俺が此のカタログの中で讀上げることを聽け、それから、果して安眠すべき時であるか何うかを俺に話すがいゝ。』

『LA LEGENDE COREE D'ETIENNES DE VORAGINE』——

traduction française due quaterzieme siecl, par le Clerc Alexandre.

——此の秀美なる稿本、錦上更に花を添ふるに驚くべき精巧なる二枚の小画像を以てす、こは保存の完全なる状態に置かれたるものにして、——一は聖母のエルサレム入京を示したるもの、他はプロセルピンの戴冠式を描出せるものなり。

——此の「聖徒傳集」の歸結は、フワレオ、フェリユーシオン、セルマン、及びドロクト、ワユース各聖徒の傳記(XXVIIj pp.)及び聖セルマン・ドークツール師の奇蹟的埋葬にあり(Xij pp.)。

——此の稀代の稿本は、サー・トーマス・ラーレイ蒐集の一部を成すものにして、今、ギルゼンチのシグノール・ミカエル・アンセロ・ポリツツイの私書庫にあり。』

『どうだ聞いたかい？ ハミルカー。クラーク・アレキサンダーの此の寫本は、シシリーにあるのだ。ミカエル・アンゼロの屋敷にあるのだ。あゝ天よ、彼が多くの學者達の友人であることを嘉納したまへ！ 自分は彼に手紙を書くことにしよう！』

早速私は書いた。私は、シグノール・ポリツツイ氏に、クラーク・アレキサンダーの其の稿本を檢閲させて呉れる様に懇求し、且つ私がどんな理由からそんな大願を抱く價值ありと思惟するかを述べた。それと同時に私は、自分の所有して居る所の、興味に乏しからざる數冊の未刊の書を

彼に譲り渡したいと提議した。私は彼に折返へし即答を與へられんことを希望し、且つ署名の下に榮譽の稱號を書付けた。

『先生様！ 先生様！ 何處をそんなに走り廻つてお出でとす？』テレーズは全く愕いて斯う叫び乍ら、私の帽を手にとって、一時に四段づゝ階段を駆け下りつゝ私を追かけて來た。

『手紙を出しに行くのだ、テレーズ。』

『あゝ神様！ 帽子も被らないで、狂人のやうに往來へ出て行らつしやるツて法はございませうか！』

『わしは氣狂だ、分つて居るよ、テレーズ。だが狂人で無いものはあらうか？ さあ、早く帽子を呉れ！』

『して、手套は如何でせう、先生様！ 蝙蝠傘も！』

私は階段の下まで行つた、しかもまだ彼女の抗議と悲哀の聲が聞えてゐた。

(千八百五十九年、十月十日)

私は、抑制しきれない苛々した氣持を以て、シグノール・ポリツツイの回答を待つて。私は靜止して居ることも出来なかつた。私は突嗟の神經病的な態度をするやうになつて——書物を明けたかと思ふと、又それを荒々しく閉ぢたりした。

或日、私は肱で偶と一冊の書物を落とした——それはモレリーの一卷であつた。自分で顔を洗つてゐたハミルカーは、突然手を休めて、前足を耳の上に當てながら、腹立たしげに私を見上げた。是れは果して、私の屋根の下で彼が豫期しなければならぬ騒々しい生活だつたか？ 我々が幸福な生活を送らうとお互の間に暗黙の了解が出来てゐたではないか？ 私は約束を破つたのだつた。

『我が哀れなる親しき友よ、』私は答へた、『俺は熱烈な感情の犠牲だ。此の感情は俺を搔亂し、俺を征服する。此の情熱は平和と靜穩の敵であることを、俺は知つて居る。だが是れが無かつたら、此の世界に美術も製作も無くなるだらう。凡ての人は肥料の堆積の上で、裸體のまゝ眠るだらうし、お前だつて、ハミルカー、此の書籍の都の中の絹の褥の上で一日中安眠するようなことも出来なくなるわけだよ。』

私は、熱情の理論に就て、それ以上ハミルカーに絮説しなかつた。蓋し私の家事管理婦が一通

の手紙を私の處へ持つて來たのである。其れにはネーブルスの消印が捺してあつて、文言は次の如くであつた。

『最も高名ある貴下——貴下の鋭利なる御洞察を脱がれることの出来ない所の「Golden Legend」の、無類の寫本を、私が所有して居ることは確かであります。然し乍ら、凡ての重大な理由が、壓制的且つ暴虐に、此の稿本を只の一日たりとも、只の一分間たりとも、私の所有外へ持出すことを許しません。ギルセンチなる私の茅屋に於て、貴下に其れの御檢閲を乞ひ得ることは、私の悦びであり誇りでございます。引いては貴下の御光來によつて此の茅屋は更に色と光りとを増すことになるのでございます。貴下の御來訪に對する最も切なる期待を以て、致て私は自署します。

學士會員足下

貴下の謙讓な、敬虔なる下僕、

ミカエル・アンゼロ・ポリツツイ

シシリイのギルセンチなる、葡萄商人にして考古學者なる——

うん、然うだ！ 私はシシリイへ行かう。

Extrema hunc, Arethusa, mihi concede laborem

(アレシユエーザよ、最後の勞を我れに與へよ)

(千八百五十九年、十月二十五日)

決心は付いたし、準備も成つた。只残つて居ることは、家事管理婦に告げることである。私は、自分が出立することを、彼女に告げるべく決心したのは、可成り時経てからであつたと告白しなければならぬ。私は彼女の諫止と、嘲笑と、咎責と、涙とを、恐れた。あれは善良で深切な女だ。私は自分に言つた、『彼女は私を慕ふて居る。私の出立を拒まうとするだらう。又彼女が何物かの上に心を据へた時、身振りや泣叫びが、彼女には何等の努力が要らないといふことは、神様が御存じだ。先づ第一に彼女は、門番や、刷毛屋や、夜具作りや、それから果物屋の七人の息子を呼びに行くだらう。其等の人は私の周圍に輪を作つて跪づくだらう。彼等は泣き初めるだらう。それから彼等が餘りに險悪に見えるために、終に私は屈服すべく餘儀なくされ、再び彼等の顔を見ることの苦痛を無くする策を講ずるであらう。』

これは恐ろしい空想であり、苦しい夢想であつた。斯うした恐怖が私の想像の前に整列した。さうだ。此の恐怖、詩人の所謂「豊かなる恐怖」——これは私の胸裏に多くの異形を生みつけた。

何故ならば——私が此の私書の中に告白するであらう様に——私は我が家事管理婦を恐れて居るからである。彼女は私が虚弱であることを知つて居る、私には其れが能く分つて居る。そして此の事實こそは、私が彼女と争ふ時、私の勇氣が凡て驅逐されるに充分なものである。争論は屢々の出来事である、而も私は常に屈服する。

だが兎も角も、私は自分の出立のことをテレーズに告げなければならなかつた。彼女は一抱への薪を持つて、少しばかり火を拵へるために書齋へ入つて来た——「ちよつくら、お火を」と彼女は言つた。朝なく、寒空である。火の燃えて居る、口の所へ頭を入れて、彼女が爐の所へ蹲んで居る間、私は眼の一角から彼女を覗めた。其の時私は、何として話しかける勇、を見出したか自分でも分らない、だが私は大した躊躇も無しに其れを敢行した。私は起ち上つた、そして室内を彼方此方と歩き廻り乍ら、臆病者特有の威張つた態度を以て、粗忽な口調で言つた。

『時にね、テレーズ、俺はシシリーへ行かうと思ふんだが。』

斯う言つて私は、非常な懸念を抱き乍ら、その結果を待つた。テレーズは返事しなかつた。彼女の頭と廣い帽子とは、依然として爐に埋もれたまゝであつた、そして、私が綿密に注視して居つた彼女の肉體の中には、些の微動を示すものも無かつた。彼女は薪の下の何か新聞を掻き立て

、火を吹き起した。これが凡てであつた！

最後に私は、再び彼女の顔を見た。——それは落付き拂つてゐた——私を苛立たせる程落付き拂つてゐた。『屹度此の年寄つた下婢は』と私は自分で考へた、『心臓を有つてゐないのだ。』「あゝ！」とも言はないで、私を旅立たせるのだ。老いたる主人の不在といふことが實際彼女に些かの影響しか及ぼさないといふことは有り得るだらうか？』

『さあ、ではお越しなされ、先生様、』彼女は遂に答へた。『たゞ、六時までにお歸りなさります様に！ 今日、どなた様にもお上げしない御馳走がございますから。』

(ネーブルスにて、千八百五十九年、十一月十日。)

“Co tra calle vive, magna, e lave a facia.” (飲んで食つて顔を洗つて三錢、)

我が友よ、私は知つた——三錢の金で、食ひ、飲み、且つ顔を洗ふことが出来るといふことを。それは君があの小卓の上で私に見せた西瓜の何分の一かに相當する金だ。だが西歐の先入主が、此の簡素な悦びを自由に公然と享樂することを許さない。それに何うして私はあんな西瓜に舌鼓

を打つことが出来よう？ 私は只此の群集の中を歩き續けるだけでもやつとの事だ。ボルトの街の中は、何と輝かしい、そして噪しい夜であらう？ 店々に盛上げられた果物の山は、色とりどりの提灯に照らされて居る。外氣の中で焚かれて居る石炭の竈の上では、水が沸騰して蒸氣を立て、シチュー料理はフライ鍋の中で歌を歌つて居る。魚のフライや烙り肉の匂ひは、私の鼻を擦つて嚏させる。此の瞬間に私は、ハンカチがフロツク・コートのポケットから落ちたのに氣がつく。私は、想像し得る限りの最も快活な、最も饒舌な、最も活氣あり、最も敏活な群集によつて凡ゆる方向へ押されたり、突上げられたり、振向かせられたりする。と、突然一人の若い婦人は、私とその美しい髪を讚美してゐるにも拘らず、別に悪意無くして私を、其の強い弾力性の肩の一と突きで以て、少くとも三步後ろへ私を押しやる。私は蹠踏めき乍ら、マカロニーを食つてゐる人の腕の中へ轉けかゝる、と其の人は微笑を以て私を受留めて呉れる。

私はネーブルスに居る。何うして私は、散々になつた亂雑な二三の小荷物と俱に此處に着くことが出来たか、それは私は知らない、何故なら私は最早私自身で無いから。私は間斷無き恐怖の狀態に於て旅行を續けて來た。私は、日光に眩惑された桌のやうに、暫し此の輝いた市の中で、既往を顧みねばならなかつたやうな氣がする。今宵は殊更厭はしい！ 一般風俗の片影を見よう

と思つて、今私の居る此のポルトの街へ来たのである。私の周囲には、興奮した群集が、食べもの屋の店先に群れを成して押付けて居る。そして私は其の生きた大浪の間を捨小舟のやうに漂ふのである、而し其れは君を溺れしめる間でさへ尙ほ依然として懣める。何故なら此のネーブルスの人々は、其の極めて快活な中にも、云ひ難き静けさと淑やかさを有つてゐるからである。私は暴々しく衝き當られることは無い。私は只揺れ廻るだけだ。で私は、私をかういふ風に彼方此方と揺り廻すことに依つて、是等の善良な人達は、立つたまゝで私を眠らさうと宥めてゐるやうに思つた。私は、街の鋪石道を辿りつゝも是等の運搬夫や、漁夫達を讚美せずには居られない。彼等は、喋つたり、歌つたり、煙草を吹かしたり、手眞似身振りをしたり、喧嘩したり、或は又次の瞬間には驚くべき気分轉換を以て、お互に抱き合つたりし乍ら、私の傍を動いて居る。それと同時に彼等は、凡ての彼等の感覺を通して、生活して居るのだ。又、其れを知らない哲學者達である故に、彼等の慾望の度合を人生の短かいことに則つて保つて居るのだ。私は、或る最も最層にされて居る居酒屋に近づく、そして入口の上に次の四行詩がネーブルスの方言で書かれてあるのを見る。

(大意)——友達よ、ランプに油の残れぬ限り、楽しく食ひ且つ飲まん哉。誰か知る、我等再びあの世に

て相會ふべしとは？ 誰か知る、あの世に居酒屋のあるべしとは？

ホーレースは、是れと同じ様な忠告を、いつも其友達に與へてゐた。ボスチューマス、君は其の忠告を受容れた。リユーコンノエ、君も其れを聞いた——未來の秘密を知りたがつてゐた意地悪るい美貌のお前も、其の未來は今過去である。我々は其のことを能く知つて居る。さうした小さなことに心を苦しめるなんて、お前も餘つ程馬鹿であつた。又お前の友がお前に向つて、思慮深く生きよ、希臘の葡萄酒を濾すように——「Sapias, vini liquoris」と忠告したのは、全く彼の好意をお前に示したのだ。斯うしてさへ、空に一點の雲も無い美しい土地の風光は、靜かな歡びの追求を急立てる。だが其所には、一種の崇高な不満によつて惱まされてゐる多くの靈がある。其等が最も尊い。リユーコンノエ、お前はさうしたものであつたのだ。そして私は、齡幾何も無い此の年になつて、その昔お前の美が謳はれた其の市を訪ねて、お前の哀しみ多い記憶に深い尊敬を以て敬禮する。基督教の年代に現はれた所の、お前自身に系統を曳いて居る其等の靈は、聖徒達の靈だつたのだ。そしてその「聖徒傳集」は、彼等の行つた奇蹟で充たされて居る。お前の友のホーレースは餘り尊とい後裔を残してゐない、私、其の直系の一人をあの居酒屋の詩人の風豊の中に見るが、彼は今、彼の表象である所の享樂主義者の箴言に随つて、多くのコップに酒を酌

めて居る。

さはれ人生は知友フラツカスによつて決定する、そして彼の哲學は、凡ゆる事件の過程に其れを適應せしむる唯一のものなのだ。そこには、あの葡萄の葉に蔽はれた四つ目細工に倚りかゝつて、星を仰ぎ乍ら氷を食つてゐる一人の仲間が居る。彼は、私が多大の困難と疲勞とを拂つて見付け出さうとして居るあの古い寫本を、身を屈めて摘み上げようとさへしない。實に人間といふものは、古い稿本を熟讀するよりも寧ろ氷を食ふように作られて居る。

私は依然として酔つ拂ひや歌ひ手等の間を踰越つきつとけた。其所には美しい戀人道が互ひに片方の腕を相手の腰の上に當て、美しい果物を嚙つて居つた。人間は先天的に惡であるに違ひない。何故なら凡ての此の不可思議な歡喜は、私の中に、最も極端な失意の感を喚起すだけだから、あの群がる群集は、生活の單純な動作の中に、さうした素朴の歡びを現はした。そのために一著述家としての私の古い慣習から生じた狐疑は、恐怖に似た或物の中に目覺めて力を揮つた。尙其上私は、私の周圍に喋々してゐる凡ての景風の一語をも理解する能力の無いために、甚しく落膽した自分自身を發見した。それは言語學者にとつては一つの屈辱な經驗であつた。斯くて私は、全く氣が減入つて來るのを感じ初めてゐるが、恰もその時私の直ぐ後ろで誰かゞ斯う言つ

て居るのを耳にした。そして計らずも吃驚した。

『ねえドミトリ、あの老人は確かに佛蘭西人ですよ。ほんとにお氣の毒なほど周章へて居るやうですわね。話しかけて見ませうかしら？ ……ほんとに氣立ての良さうな風ね、あんなに丸い背中をして——ね、貴方はさうお思ひになりませんか？ ドミトリ。』

其れは女の聲で、フランス語で話された。暫しの間私は、自分が老人扱ひにされし居るのを聞いて不快に思はずには居られなかつた。まだ六十二歳の男ちや無いか？ つい此の間もアルスの橋の上で、私の同僚ペーロー・ド・アヴリナクが、私の若々しい様子に就てお世辭を言つて呉れたばかりなのだ。で私は、私の背中のことを言ふために、勝手な解釋を下したあの若い饒舌家よりも、彼れの方が、人の年齢に就ての遙かに立派な權威者であると思はずにはゐられない。私の背中が丸いと、あの女は言ふ。嗚呼！ 噫！ 私は其の効果に就て、多少の疑心無きを得ないでゐた。だが今では其れを夢にも信じようとは思つてゐないのだ。何故なら其れは、頭の淺薄な若い女の意見なのだから。確かに私は、それを言つた人を見るために頭を扭ぢ向けはしなかつた、けれども、信するに其れは美しい女だつたに違ひない。何故に？ それは彼女が、氣の移り易い人のやうに、甘やかされた子供のやうに口を利くからである。醜い女は美しい女と同じく先天的に氣

まぐれであるかも知れない、けれども彼等は愛されたことも甘やかされたことも無いために、又彼等に對しては何等の斟酌も爲されないために、直ぐ彼等は、其の氣まぐれを抑制するか、或は其れを隠蔽すかの何れかを餘儀無くさせられるのを感じる。之に反して美しい女といふものは、自分の欲するだけ氣まぐれになり得るのである。私の近所に居るのは明かに後者の一人である……だが能く／＼考へて見ると、畢竟するに彼女は、自分自身の方法に於て、口に出して言つた以上に悪いことは何もしなかつたのは明かである、私に就て深切な考へを表白したまでのことである。それに對して私は感謝の意を表すべき筈なのだ。

斯うした反省——一番最後の決定的なものをも含めて——は、ほんの一秒も經たぬ内に私の心を通り過ぎた。で、若し私が、さうしたことを話すだけの餘裕を充分に有つてゐるならば、其れは只私が悪しき著述家であるがため、さうした失敗は大抵の言語學者の陥る特徴である。そこで私は、一秒と經たない内に、其の聲が止んだ後で、初めて後ろを振返つた、そして美しい小柄の女——快活な、色の淺黒い女を見た。

『奥さん、』私は叩頭して言つた、『どうか私の唐突な無遠慮をお許し下さい。私は、今先きあなたの仰有つたことを聞流すことが出来なかつたのです。哀れな老人に對して奉任することをあな

たはお好きでゐらつしやると思ひます。そして此の望みは、奥さん、もう既に達せられたのです——フランス音の些細な響は、私があなたに感謝しなければならぬ程の喜びを與へたのですから。』

私は今一度叩頭して其場を立去らうとして身を交はした。然し私の足は西瓜の皮の上で立つたそして若しも其の若い婦人が手を伸ばして私を捉へて呉れなかつたら、今少しの所でパーセノビアの土に四つ這ひになるところであつた。

凡ての事情の中に力がある——たとひ其れが最も小さい事情であつても——それに對する抵抗は無駄である。私は美しい未知の人の手に身を委ねてゐた。

『遅くなりましたわ』彼女は言つた、『あなたは御自分の御宿へ歸りたいと思ひになりませんか？ あなたの御宿は私達の宿と極く近くな筈ですわ——同じ宿で無いからには。』

『奥さん』私は答へた、『もう幾時だか私には分りませんが、私は誰かに時計を盗まれたものですから。でも仰有る通り、そろ／＼引返す時刻でせうね。で私は、さうした御深切な同國人の方々の中へ私の宿も取替へることを。大變嬉しいと思ひます。』

斯う言ひつゝ、私は今一度此の若い婦人に叩頭した。又その連れの人にも會釋したが、それは

温順しい打沈んだ顔をした。物靜かな、見上げるばかりの人だつた。

其の人達と一緒に少しばかり歩いた時、私は、色々の他の事と一緒に、私の此の新らしい知己はトレボフ公爵夫妻であつたこと、又彼等は、以前から蒐集しつゝある所の燐寸の箱を發見する目的で世界一周をやつて居るものであることを知つた。

私達は、狭い迂曲した vicinello (小路) を辿りながら進んで行つたが、其處は只、マドンナの壁龕の中に燃えてゐる唯一つの燈明に照らされて居るだけであつた。空氣の清淨と透明とは、其の暗黒に對して神の如き柔かさを與へてゐた、そのために、人は何等の困難を感じずに、さうした澄んだ夜の下を歩むことが出来た。然し、やがて私達は「小街」の中を通り初めた、ネーブルスの語法では sottopoggio の中を、而も其れは多くのアーチ形の廊下や遠く突出した露臺の下を通じてゐるために、空からの光線は少しも私達に届かなかつた。私の若い案内者は、私達に、近路として此の道をとらせたのであつた、彼女は私達に確言した。だが私は思ふのに、彼女は此のネーブルスを我家のやうに思つてゐることや、又此の市を隅から隅まで知つて居るといふことを私に示さうといふ單なる理由によつて、さうしたものだつたのだ。事實彼女は、夜になつてからあの地下の路次や跳び降りる階段やの迷宮の中に冒險を試るために、隅から隅まで能く知り盡し

ておく必要があつたのである。若しも、導かれるまゝに我身を委ねることに於て、絶對の忍従を示した人がありとすれば、その人こそは私自身であつた。ダンテがビアトリスの足跡を趁ふた時と雖も、私がトレボフ公爵夫人の足跡を趁ひ乍ら感じた程の確信を以てしたことは無いのだ。夫人は私の談話を悦ぶようになつた、で彼女は、其の翌日彼女と一緒に馬車を驅つて、ボシリッポの岩窟とヴァーヂルの墳墓とを訪ねるように、私を誘つた。彼女は、以前何處かで私に會つたことがあると主張した。しかし其れはストックホルムでであつたか、カントンでであつたか想出すことは出来なかつた。ストックホルムでは、私は非常に有名な地質學の教授であつた。カントンでは一食料品商で、町重と深切とで評判であつた。只彼女が以前何處かで私の背中を見たことがあつたことだけは、確かな事實だつた。

『御免なさい、』と彼女は附加へた、『私達は、良人と私とで、マッチ箱を蒐めることゝ、國を變へて意屈を紛らすためとで、始終旅行して居るものですから、私達が只、意屈の變化で満足して居る方が、づつと意味があると思ひますわ。でも私達は、旅行に就ての凡ての準備や整理をしてつたのです。計畫萬端は前以て立てゝありまして、もう何一つ面倒を見ないでもいゝ様になつて居るのです、ですから或る特別な場所に滞在することは、私達にとつては大變面倒に違ひない

のですよ。私がこんなことを皆申上げるのですもの、たとひ私の記憶が少し計り混亂して来ましても、決してあなたは眼を丸くなさるに及びませんわ。でも私、今晚、遠くからあなたの顔顔を初めて拜見した瞬間から、私前にあなたにお目にかゝつたような気がしたのです——實際私は存じてゐましたのです。所でまあ一体、あなたに御目にかゝつたのは何處でだつたのでせうね？ではあなたは、地質學者でも食料品商でもないのをごさいますね？」

『いえ、奥さん、』私は答へた、『私はそのどちらでもありません。のみならず、あなたがさうお考へになる理由がおりなのですから、どうも残念です。私といふ人間は、あなたの興味に對して、實際、何の値打も無いものです。私は自分の生涯を、讀書に費しました、又一度も旅行したことがございせん。そのことは、私があなたの憐愍をそゝりましたやうに、あんなに狼狽して居つたことからも、能くお分りになるでせう。私は學士會の會員なのです。』

『學士會の會員でゐらつしやいますか！ まあお立派な方ですこと！ 私のアルバムへ何か書いて頂けませんでせうか？ 貴方は支那語を御存じでゐらつしやいますか？ 支那語かベルシャ語でアルバムへ何かほんといふに書いて頂きたいと思ひますわ。私、友達のフェルグソン嬢に、貴方を御紹介致しますわ。あの方は世界中の有名な方に残らず會ふために各地を旅行なさいますが、

どんなにあの方はお悦びなさるでせう！……ね、ドシトリ、貴方お聞きになつたでせう？——此の紳士の方は、學士會の會員で、全生涯を讀書に費されたのですつて。』
公爵は首肯した。

『閣下、』私は公爵を我々の會話に惹入れようとして言つた、『成る程書物の中から何かを學び得るといふことは事實です。然し其れよりも遙かに多くのことは、旅行によつて學ぶことが出来ます。私はあなた方のやうに世界一週が出来なかつたのを残念に思ひます。私は同じ家に三十年も住んで居りました、殆ど外出することもありませんでした。』

『三十年も同じ家にお住みになつたのですつて！』トレボフ夫人は叫んだ『そんなおことが有り得るでせうか？』

『全くです、奥さん、』私は答へた。『然しあなたは、其の家が、セーヌ河の岸に、而も世界中の最も美しい最も有名な部分に建つてゐるといふことを御了解になる必要がございます。私の窓からは、チュイレリー官にルールヴル宮、ポントニユーフ、ノートルダム塔、裁判所の小塔、サンチャベルの尖塔と云つたやうなものが、全部見えるのです。是等の石は皆私に話しかけます。セント・ルイスとか、ヴァロアとか、ヘンリ四世、ルイ十四世などの、在りし昔の話を私に話してく

れます、私は其等のものを見て理解し、其等のものを見て愛して居るのです。其れは只世界の隅に過ぎません、けれども、奥さん、これより立派な場所が何處にございませう？」

此の瞬間に私達は、大辻へ来て居ることに気がついた——Laraは夜の柔かい暑さの中に浸つてゐた。トレボフ夫人は不安さうな風に私を見た。彼女の釣上つた眉は、彼女の額の黒い縮髪に觸れさうになつてゐた。

『では、あなたは何處どこにお住ひですか？』

彼女は無様に訊いた。

『マラクエー河岸でございます、奥さん、そして私の名前はボンナールと申します、餘り廣く知られてゐる名ではございませんが、私は只、友人達が此の名前を忘れさへせねば満足なのです。』

此の表現は、決して重大なことでも無いにも拘らず、トレボフ夫人の上に驚くべき影響を及ぼした。即座に彼女は私にクルリと背を向けて、彼女の良人の手を捉つた。

『さあ、ドシトリ！』彼女は叫んだ、『少し早く歩きませう。わたし恐ろしく疲れて居りますので、貴方は些ともお急ぎなさいのでせう。こんなことでは迎も家へ歸れませぬわ。……あ

なたは、あのう、あなたは彼方へるらつしやい！』

彼女は、暗いVicodoの方角に向つて荒々しい身振りをして、反對の方角へ良人を押しやつた、そして顔も向けずに私に呼びかけた。

『左様なら、貴方！ 明日も、明後日も、もうボシリツホー行きは止ませう。私大變頭痛が致しますの！……ドミトリ、貴方には本當に我慢が出来ませぬわ！ もつと早く歩ないのでせうか？』

私は稍暫し茫然として佇み乍ら、自分が果してトレボフ夫人を怒らすやうなことを爲たか何うかを、無益にも考へようとしてゐた。その上にも私は道を迷つて了つた、そして夜通し蹣跚たんとつくやうに宣告されたやうな氣がした、私は自分の道を訊ねるためには、是非共誰かを見付けねばならないのだ。だが私を理解出来るやうな人は、只の一人でも見出すことは、到底不可能の氣がした。絶望の極私は、目的めくも無く一つの街へ入つて行つた——それは街と云ふよりも、寧ろ人殺しの場所のやうな、身慄ひするやうな小路であつた。實際その證據には、私が其の中へ入つて行つて二分間と経たない内に、私は二人の男が双物を以て争つてゐるのを見た程だから。二人は、武器で争つてゐるよりも一層猛烈に、彼等の舌で互ひに争つて居つた。私は、悪い癖として、彼等

は何か癡情沙汰でお互に血の雨を降らして居るものと断定した。私は素早く横小路へ外れたが、此の二人の良い奴等は依然として自分の事件に忙しく立働いてゐるために、私のことなど考へる暇も無いやうであつた。私は絶望し乍ら一哩計り、うろついた。そして迷々、すつかり力抜けがして、石のベシチに腰を下ろし、心の中でトレポフ夫人の變な氣まぐれを呪ふてゐた。

『如何です、シグノール様？ サン・カルロからお歸りですね？ 有名なお唄女の歌をお聴きでしたか？ あの女達のやうな唄が聞けるのは全く此のネーブルスだけですよ。』

私は見上げた、そして其處に、私のホテルの主人を認めた。私は自分の部屋の窓の直ぐ下で、ホテルの壁に背を凭せかけて腰を下ろして居たのだつた。

(モンテ・アレグロにて、千八百五十九年十一月三十日)

私達の一行——私と、案内者と、騾馬と——は、シアツカからギルゼンチへ行く途中、モンテ・アレグロの荒涼たる村の居酒屋で休憩して居つた。其處の住民はマラリア熱に罹つて日光の中で絶間なく慄えて居る。然し彼等は希臘人である。彼等の快活さは凡ての境遇を超越してゐる。二

三人が居酒屋に集まつて居るが、皆か妙に微笑を湛へて居るのである。彼等をして凡ゆる人生の苦しみを忘れさせようとするには、一つの面白い話があれば充分であるが、悲しい哉私は、どういふ風に其れを彼等に話していかを知らないのだ。彼等は皆聰明な顔をして居る、女達は又、日に焦けて艶氣が無くなつて居るけれども、澤山の飾りの付いた長い黒の外套を着て居る。

私の眼の前には古い廢墟がある——海風に白くなつてゐて、草一本生えてゐない程荒れ果てゝ居る。寂寥々たる荒野の憂愁は此の焦土の上を蔽ひ、裂けたる表面は、辛うじて二三の凋びた合歡木と、仙人掌と、棕梠とを生じてゐる。二十ヤード彼方には、谿筋に沿うて、さながら撒散した骨の長い縁のやうに、多くの石が白く光つて居つた。あれが川床であると私は教へられた。

私はシシリーに十五日間ばかり滞在した。バレルモの灣へ來ると——此の灣はベングリノとカタルフワノとの二つの大きな裸の岩塊の間に開いて、ゴールデン・コンチに沿うて内に展がつて居るので——此の眺望は、私をして今少し此の島を旅行すべく決心させた程の崇高さを以て私を感激せしめた。それは誠に歴史上の記憶によつて更に高貴を加へ、山々の外線によつて甚じく美しく描き出されて、希臘美術の本質を示顯して居るものであつた。ゴシック西歐に生ひ立ち、今は早や白髪の老巡禮ではあるが、——私は此のクラシクな土地に敢て冒險を試ることにした。

そこで一人、案内者を備うて、バレルモからトラバニーへ、トラバニーからセリノンテへ、セリノンテからシアツカへと、私は行つた——クラーク・アレキサンダーの寫本を發見する續りで、私は今朝ギルゼンチへ向けて出立したのであつた。私が見た色々の美しいものは、今尙私の胸に生き／＼としてゐる、で私は其れを書き誌すことが、決して無用な努力であると思ふ。何故に、ノートを集めることによつて私の愉快な旅行を打毀す必要があらう？ 眞に戀する戀人は決して自分の幸福を書附けることはしない。現在の憂愁と過去の詩とによつて一切の我れを忘れ、私の胸は美しき形相の棲家となり、私の眼は山水の澄んだ調和した線で満たされた。その私がモンテ・アレグロの居酒屋に休み乍ら、濃い強い酒のコップを啜つて居つた時であつた、私は二人の人が此の部屋へ入つて來たのを見た。一瞬間の躊躇の後、私は其れが、トレボフ公爵夫妻であることを見てとつた。

此の度は私は公爵夫人を明りの中で見た——而も何といふ明りであらう！ シミリーの燈火を知つて居る人あらば、ソフォクレスの『おゝ聖なる火よ！……榮ある日の眼よ！』といふ言葉を能く理解することが出来る。生麻布の裝束に縁廣の麥藁帽を被つたトレボフ夫人は、二十八歳位の非常に美しい婦人として私の前に現はれた。彼女の眼は幼兒の眼のやうに冴えて居つた、が

微かに落込んだその額は充分な年齢を現はして居つた。彼女は全く魅力的な婦人であることを、私は敢て告白しなければならぬ。彼女は柔和で變化が多い。彼女の物ごしは水そのものゝやうである——だが、あゝ神よ！ 私は航海者では無い。私は彼女の態度の中に一種の不氣嫌な調子が閃めくのを見たが、どうも其れは、彼女が途中で盜賊に出喰さなかつたといふ事實に原因してゐるらしいのを、彼女が出鱈目に喋つて居る言葉から私は推定した。

『さうした事は只私達にだけあるのですわね！』と、彼女はがっかりした身振りをして叫んだ。彼女は氷水を一杯注文した。店の主人は、丁度希臘の花瓶に描いてある葬式の供物の光景を私に想出させるやうな態度で、其れを彼女に差出した。

私は、ネーブルスの廣小路であんな風に唐突に私を置き去りにした婦人に對して、今の場合自分を披露するのに急ぐ必要は無いと思つて居つた。所が彼女は、私が一隅に居るのを直ぐと見てとつて了つた。彼女の遊面は、我々の此の思ひがけぬ邂逅が彼女にとつて不快なものであつたことを實にはつきりと表はした。

やがて氷水を啜つて了つた後で——彼女の氣まぐれが急に變つたゝめか、私の獨りほつちが彼女の同情を惹いたゝめか、何れとも私には分らなかつたが——彼女は一直線に私の方へ歩いて來

た。

『今日は、ボナール先生、』彼女は言った、『ご機嫌は如何でらつしやいますか？　こんな恐ろしい國で再たお目にかゝれるとは、ほんとに不思議な機會ですわねえ。』

『此の國は恐いことはありませんよ、奥さん。』私は答へた、『此國の美は非常に偉大で、又非常に崇高なものですから、幾世紀の間のパーバリズムも其れを消すことは出来ないで居るのです、其の尊とい面影を全然残さないように破壊することが出来ないで居るのです。あの谷間を御覽なさい、古代のセレスの壯嚴さが依然として其の上を蔽ふて居ります。又あの靈妙な韻律を以てアレスサとマナルスの調べを作つた希臘の女神は、今尙あの裸の山々や渴いた泉で歌つて居るではありませんか。さうです、奥さん、吾々の地球が最早人間が棲息しなくなり、月のやうに空間にその蒼白い死骸を横へるよになつても、セリモンテの廢壇の立つて居るあの地面は、依然として宇宙の死の中に美の面影を保つてせう。其の時、あゝ其の時には、少くとも斯うした寂寥の尊とさを貶さうとするやうな無駄口も聞くことが無からうと思ひます。』

私の斯うした言葉は、それを聞いた美しい小さな空つほの頭の理解力を超えたものであると云ふことは、私には能く分つてゐた。けれども若し私自身のやうに、一生を讀書に使ひ果たしたと

いふ老寄の馬鹿者がありとすれば、その人は到底色々の場合に適應した言葉を使ふ方法を知らないであらう。而已ならず私は、典雅に就ての一つの教訓を、トレボフ夫人に與へたいと思つたのであつた。彼女は非常に柔順に其れを受容れた、そして能く會得したといふ様子であつたので、私は出来るだけ優しい口調で、急いで附加へた。

『かうして偶然あなた方に再びお目にかゝることが出来たといふことが、幸福であるか不幸であるかといふことは、私の此處に居ることがあなた方に不快で無いといふことを確かめた上で無ければ決しかねることです。いつかあなたが、ネーブルスで、突然私の同道を面倒がられたことがございますが、あの時の不幸を私は只、自分の生來の不愉快な態度に歸して居るのです。――何しろあの時は、生れて初めて、あなた方にお目にかゝる光榮を有つたのですから。』

此の言葉は、言ふべからざる悦びを彼女に與へたらしかつた。彼女は最も慇懃な、最も困苦しい様子をして、私に微笑した、そして手を差伸し乍ら極めて眞面目に言つた。私は其手に唇を觸れた。

『ボナール先生、どうぞ御辭退なさらないで私共の馬車にお乗り下さいませし、途中で昔の話を私にして下さいませし、どんなに私嬉しいか知れませんわ。』

『ねえお前、』公爵は叫んだ『お前、自分の氣の向いたことをすればいいんだが、あのお前の馬車は恐ろしく狭苦しいんだからね。それに又、そのためにポナール先生か腰痛なんかお起こしなさらないだらうかね。』

トレポフ夫人は、さうした杞憂が彼女にとつて何等の權威も無いといふやうな風に、只彼女の頭を振つた、そしてから帽子を脱いだ。彼女の黒い縮毛の暗黒は眼の上に落ちかゝつて、天鵝絨のやうな影の中に其の眼を浸した。彼は稍暫し身動きもしなかつた。彼女の顔は不思議な幻想の表情を示してゐた。その時突然彼女は、丁度居酒屋の主人がバスケットに入れて持つて來たオレンヂの所へ驅付けた、そして一つづつそれを着物の襪へ投げ込み初めた。

『これは途中で食べると美味いでせう』彼女は言つた『私達は、あなたの行らつしやると同じ所へ行くのですわ——ギルゼンチへ。そのことで色々とおあなたに申上げねばなりませんわ。御承知の通り、良人はマッチ箱を集めて居りますの。マルセーユで三百もマッチ箱を買ひましたけれど、ギルゼンチロにはその工場があるといふことを聞きましたの。聞いた様子では、それは大變小さい工場ですつて。そして其處で出来るのは——大變醜くて——決して町の外へもその近傍へも賣出さないさうでございますの。だもんですから、私達は丁度そのギルゼンチへ、マッチ箱を買

ひに行くところなんです。ドミトリは、それは色々のもゝ蒐集家でございますね、でも只今の所である人の興味を惹くのは、マッチ箱の蒐集でございますの。既う是迄に、五千二百四十通りも手に入れて居りましたね、その中には、見付け出すのに随分面倒のかゝつたものもございますのよ。例へは、ネーブルスでは、以前はマッチの箱にマーチーニとガリバルディーの肖像が貼つてあつたといふことや、警官が、その印刷された製版を没収した上に製版者を監獄へ打込んだことがあるといふやうな話を、私達は聞いて居りましたが、まあ、永い間鶉の目鷹の眼で捜し廻つた揚句、遂に其れを一つだけ見付けましたの、それが二スウ(約四錢)所ではなしに百フランクといふ言ひ値なんですてね。でも實際はその値段では高過ぎはしないのですよ、所が其れを買つたゝめに告發されましたね、共謀者だといふので引張られて行くことになりましたのよ。荷物は全部捜索されましたが、上手に隠して置いたものですから、遂々其の箱は發見されずに了ひました。でも私の寶石類が見付けられましたね、それが全部持つて行かれたなり、今にそのまゝになつて居るのですよ。此の事件は全く評判になりましたね、私達は今にも逮捕されさうになつて居りましたが、皇帝陛下が其のことを不興がられました、私達を釋放するやうにと命令をお下しになりましたの。其の時までは、マッチ箱を集めるなどいふことは、極く馬鹿けたことと思つて居り

ましたが、其れを集めることから、時には自由を束縛されたり、生命を亡くするやうな危険だつて有り兼ねないといふことを知つてからは、急に其れに對する趣味を感じるやうになつて了ひました。今ではもう私、此のことに全く鳥頂天なんです。來年の夏になつたら、此の仕事を完成するために瑞典へ行くつもりなんですのよ……ねえ、さうでせう、ドミトリ？」

私は——私はそれを告白しなければならぬだらうか？——その勇敢な蒐集に對して、滿腔の同情を感じた。無論私は、トレボフ夫妻が、シシリで昔の大理石や、繪の描いてある花瓶やを集めて居るのだといふことを、幾分か氣づつてゐたのは言ふまでも無かつた。私は、彼等がシラキユースの廢墟や、エリツタスの詩的な傳説の中に興味を見出してゐるのを知つて愉快な氣がした。だが兎も角も彼等は、何かの蒐集をやつて居るのであつた——彼等は大きな團體に屬してゐた——で私は自分自身を嘲笑しないでは彼等を嘲笑することが到底出来なかつた。而已ならずトレボフ夫人が、皮肉と熱心とを變な風に織り交ぜ乍ら自分の蒐集のことを話したので、私は其の考へが非常に良いものであると思はずにはゐられなかつた。

私達は其の居酒屋を出立する支度にかゝつた時、二三人の人が、各々黒い外套の下に短銃を潜ませて、二階から降りて來るのを見て取つた。それが私には、全然山賊のやうに思へたので、そ

の人々の行つて了つた後で、私は彼等に就ての私の考へをトレボフ氏に話した。氏は非常に冷靜に、あれは紛ふ方無き山賊だと自分も思つたと答へた。案内者は私達に對して。是非共憲兵の護衛を乞ふやうにと嘆願した、けれどもトレボフ夫人は、そんな風なことは決してしないやうに私は懇願した。彼女は、我々が『彼女の旅行を打毀』してはならないと宣言した。

やがて彼女は、その説き伏せるやうな眼を私の方へ向けて訊ねた。

「ねえ、ボナール先生、人生には感情以外に、有つ價值のあるものは一つも無いやうに思ひますが、先生は然うお信じになりませんか？」

『いや、全くです、奥さん。』私は答へた、『しかし、さうすると、センサーション其のものの本質を考慮に加へねばなりませんよ。高尚な記憶とか、壯大な景色とか云ふものは、確かに我々の中に、人生の最も美しいものを創造します、けれども危険の恐怖から生まれる單なる結果といふものは、人間を、出来るだけ其れから遁れるやうに注意せしめる感情だと私は思ひますね。例へばです、夜中に山の上を旅行してゐる時、突然短銃の■を額に押しつけられるやうなことがあると、奥さん、あなたは其れを非常に愉快なこととお思ひになるでせうか？』

『いえ／＼！』夫人は答へた、『喜劇オベラは短銃を全く滑稽なものにしてしまひました、又滑稽

な武器から離れて、危険の中に自分自身を発見するといふことは、どんな若い女の人にとつても大きな不仕合せに違ひの、ませんわ。でも其れが刃物の場合だと全然別でせう——極く冷たい、ピカ／＼光つたナイフの刃といふものは、どんな人の胸にもぞつとするやうな寒けを通すものでせうからね。』

かう言つた時彼女は身慄ひした。そして眼を閉ぢて、頭を後ろへ凭せかけた。やがて彼女は再び口を開いた、

『あなたのやうな方は、ほんとに幸福ですわねえ！ どんなものにも、興味が有てるのですもの！』

彼女は、良人に向つて斜めな視線を投げた。良人は宿の主人と話の最中であつた。今度は彼女は私の方へ凭れかゝつた、そして非常に低い聲で呟いた、

『御存じの通り、ドミトリも私も、二人乍ら倦怠に悩まされて居るのですよ！ 私達にはまだマツチ箱と云ふものがございませうけれどもね、お終ひにはマツチ箱にさへ倦むに違ひないのでわ。それに私達の蒐集も、その内完成するのですものね。さうしたら私達、何をすゝてせう？』

『おゝ、奥さん、』私は、此の美しい人の精神的不幸に感激して叫んだ、『あなたが只、お子供

さんがおありでしたら、何を爲さうといふこともお分りになりますよ。さうなれば人生の目的といふこともお分りになるでせうし、又あなたのお考へだつて、早速、もつと眞剣な、すつと愉快なものになるでせうね。』

『でも私には、男の子供が一人ございませうよ、』彼女は答へた、『大きくつて、もう十一歳なのでございませう。子供も私達外のものと同じにアンニユイに悩まされて居るのでございませう。えゝ、私のジョーヂもアンニユイを有つて居るのでございませうよ、凡てのことに倦いて居りませうね。ほんとに不幸でございませうの。』

彼女は再び良人の方を眺めた。良人は窓の外の道に居つた驛馬に、馬具を着ける指圖をしつゝ馬の腹帯や革紐を吟味して居つた。暫くすると彼女は私に向つて、此の十年間にマラクエースの河岸が甚しく變つて了つたか何うかを訊いた。彼女は其の隣り町を訪問したことが一度も無い、それが餘り遠いからだと言つた。

『モンテ・アレグロから餘り遠いと仰有るんですか！』私は敢て聞き返した。

『いえ、さうぢや無いんです！』彼女は答へた、『私の住まつて居りますシャンブ・ニリーシス通りからは、随分遠いものですから。』

そして彼女は、さながら獨語のやうに、「餘り遠い！ 餘り遠い！」と、私にはその意味が分らないやうな、夢見るやうな調子で、幾度も呟いだ。突差に彼女は再た微笑を湛へた、そして私に言葉をかけた。

『私、あなたが好きよ、ボナール先生！——ほんとに、ほんとにあなたが好きですわ！』
驛馬には馬具を着けられた。若い婦人は、膝から轉け落ちた二三個のオレンヂを、慌てゝ拾ひ上げた。やがて身を起して、私を見たと思ふと、突然大きな聲で笑ひ出した。

『あゝ！』彼女は叫んだ、『あなたがあの泥棒達と格闘して居る所を、私ほんとに見たいと思ひますわ！ 泥棒達に向つて大變なことを仰有るでせうね！……濟みませんが私の帽を持つて頂戴、それから此の蝙蝠も私の代りに握つて 頂戴、ね、ボナール先生。』

私は彼女の言ひなりにし乍ら、胸の内と思つた、「何て妙な小人だらう！ 大自然がこんな氣まぐれな小さい女に赤ん坊を授け給ふたといふことは、只許し難い無分別な一瞬間に起り得たことゝ云ふより外は無い！』

(同じ日、ギルゼンチにて)

彼女の態度は私を驚かした。私は彼女を、彼女のレチカの中で、爲すかまゝにさせて置いた。又私は自分のレチカの中で出来るだけ居心地の良い位置を取つた。是等の馬車は輪が無く、二匹の驛馬に——前に一匹、後ろに一匹——曳かれるのであつた。此の昇籠とも云ふべき二輪馬車は古代傳來のものである。私は十四世紀の佛蘭西文献の中で、是れと同種のものゝ繪畫を時々見たことがあつたが、まさかさうした馬車が、將來自分の御するものとならうとは其當時夢にも思つたことが無かつた。我々は何事につけても、決して信じ過ぎてはならない。

三時間の間、驛馬は鈴の音を立て乍ら焦つた地面を蹄で打つてゐた。全く亞弗利加的な、赤裸の、怪物のやうな自然の風物は、私達の傍を右左に縦列を作つて靜かに進んで行つた。途中で私達は、動物に息をつがせるために一と休みした。

トレボフ夫人は路上で私の方へ近づいた、そして私の腕を捉へて、一行から少し隔つた所へ私を引張つて行つた。暫くすると、非常に突然、私が今までに聞いたことの無い調子の聲で、私に話掛けた。

『私を惡い女と御考へでせうね。でも私、どんなに良い母親か、ジョージは能く知つて居

りますわ。』

私達は暫く無言のまゝ並んで歩いた。彼女は見上げた時、私は彼女が泣いて居るのを見た。

『奥さん、』私は彼女に言つた、『永い五つ月もの間火のやうな熱さに焦がされて裂けて居るあの土を御覧なさい。小さい白百合が其の中から頭を出して居るぢやありませんか。』

かう言ひ乍ら私は、弱々しい莖を杖で指した。その尖には二重の花弁が綻びてゐた。

『あなたの胸が』と私は言つた、『どんなに乾きまつてゐても、是れと同じように白百合を抱きしめて居られるのです。私は、あなたか決してあなたの仰有つたやうな——悪い女で無いと思つて居りますのも、全くそのためなのです。』

『さうですわ、さうですわ、さうですわ！ 私悪い女ですわ！』彼女は子供のやうな執拗さを以て叫んだ、『でも私、こんな風にしてあなたの様な良い方の前へ出るのか耻づかしくて仕様がありませんわ——ほんとに、ほんとに良い方の前へ。』

『あなたは、そんな事は些とも御存じないのです。』私は夫人に言つた。

『私知つてますわ！ あなたのことはすつかり存して居りますわ、ボナール先生！』彼女は莞爾して叫んだ。

斯う言つて彼女は、跳ぶやうにして彼女のレチカの中へ引返した。

（ギルゼンチにて、一八五九年十一月三十日）

翌日私はゲリヤ旅館に眼を醒した。ゲリヤは昔のアグリゼンタムの、金持の市民であつた。彼はその義侠的精神と富とで等しく尊敬を受けて居つた、そして多数の公共旅館を自分の生れた市へ寄附した人であつた。ゲリヤの死んでから三ヶ年になるが、今や文明人の間には、最早無料の旅宿といふものは一つも無い。だが、ゲリヤといふ名前が既に旅館の名前になつて、而も、疲勞した揚句私が其處に心地よき一夜の眠りを貪る とが出来たわけであつた。

今日のギルゼンチは、昔のアグリゼンタムの城廓の遺跡へ、その高い、狭苦しい、固い街を引上げ、一つの陰鬱なスペイン風の大伽藍に俯瞰されてゐるのである。私は自分の窓から、海を向いた小山の中途に、所々毀れてゐる白い寺院が立並んでゐるのを見ることが出来る。其等の廢墟ばかりは、幾らか冷氣を有つて居るが、其他は凡て乾燥して居る。水と生命とはアグリゼンタムを見棄てゝ了つたのだ。水は凡ての生物を生かすものだ、河と泉とから遠く隔つては何物も生き

ることの出来ない程必要なものなのだ。だがギルゼンチの港は、市から三キロメートルの距離に在る、而も大きな通商をやつて居る。『又此の寂しい市に、』と私は獨語した、『此の嶮岨な岩の上の市に、クラーク・アレキサンダーの稿本が有る筈なのだ!』

私は、シグノール・ミカエル・アンゼロ・ポリツツイの家へ行く道を訊いて、その方へ進んで行つた。

行つて見ると、シグノール・ポリツツイは、頭の先から足の先まで白い装束をして、フライ鍋の中でソーセージを忙しさに料理してゐる最中だつた。私をひと目見るなり、彼はフライ鍋の柄を放して、兩腕を高く差上げ、金切聲で歡喜の叫びを立てた。彼は小男であつて、其の瘡だらけの顔と、鷲のやうな鼻と、丸い眼と、突張つた頬とは、非常に人目を惹く形相を形造つてゐた。彼は私を『閣下』と呼んだ、そして白い石であの日を記念に止める積りで居つたと言つた。それから私に席をすゝめた。通された廣間は、臺所と、接待室と、寢室と、畫室と、酒窖とを兼ねたものであつた。其處には、能く目立つ木炭爐とか、ベッドとか、繪畫とか、畫架とか、或は又壘類に、葱の束、色硝子の吊飾の着いた大きな燭臺と云つたやうなものが雜然としてゐた。私は壁に掛つてゐる繪に眼を留めた。

『あゝ美術! 美術!』シグノール・ポリツツイは、又もや腕を高く上げて叫んだ——『美術! あゝ何と言ふ尊といものでせう! 何といふ慰藉でせう! 閣下、私は畫家なのです!』

斯う言つて彼は、未完成の「聖フランシス」を私に見せた。實に其れは、宗教味に於ても藝術味に於ても、少しも缺けた所の無い、非常に旨く未完成のまゝ保存されたものであつた。次に彼は、一層良い畫風の古い繪を、幾枚か私に見せたが、明かに其れは極めて亂暴に補筆されたものであつた。

『私が筆を入れるのです、』彼は言つた、『私が古い繪に筆を加へるのです。あゝ、昔の巨匠達! 何といふ天才でせう! 何といふ精神でせう!』

『ぢや、何故あなたは、』と私は彼に言つた、『畫家と、考古學者と、酒屋とを、全部一人でおやりにならねばならないのです?』

『御意のまゝに、閣下、』彼は答へた、『私は、今直ぐお目にかけますが、此處に *necco* を有つて居りますが——その一滴はほんとに實の酒と云つてもいいのです。それを何卒召上つて頂きたいと思ひますが。』

『私はシシリーの葡萄酒を非常に愛好して居ります、』と私は答へた、『然し貴方にお目にかゝり

に來たのは、貴方の其の酒場を目的にして來たわけではないのです。シグノール・ポリッツィ。』
彼。』では、繪のことでお訪ね下さったのですね。あなたは美術愛好家であらうつしやいます。美術愛好家の方々にお目にかゝるのが、私には何よりも悦ばしいことなのです、ではモンレアルの傑作をお目にかませう。左様、閣下、彼れの *chir-d'ouivre* (傑作) です！ 「牧羊者の禮拜」です！ シシリー畫派の中では寶石とも云ふべきものです！』

私。』後程その傑作を悦んで拜見致しませう。最初に、私が態々御伺した用件をお話致したいのですが。』

彼の小さい、素早い、輝いた眼は、怪訝さうに私を睜めた。私は、彼が私の訪問に就て少しの疑惑をも抱いてゐなかつたとは思へなかつた。

冷汗が私の額に滲み出した。私は不安の苦しさに大要次のやうなことを口呷つた。

『私は「Legende dorée」(聖徒傳集)の稿本を見せて頂きに、態々巴里からやつて來たのです、貴方が御所蔵なことを先日お報せ願ひましたので。』

此の言葉を聞くより、彼は両手を突伸し、口と眼とを出来るだけ廣く開けて、極端に神経質な凡ゆる表情をした。

『おー！「Golden Legend」の稿本ですか！ あれは實際眞珠です、閣下！ ルビイです！ ダイヤモンドです！ 二枚の挿畫は實に完全です、天國の有様も斯くやと思はせます！ 何といふ柔かさでせう！ 種々の花の花弁から取つたあの色は、眼のために蜜々作ります！ シシリア人でさへ、あれ以上のものは逆も作れなかつたのです！』

『では、拜見させて頂きませう、』と私は頼んだ。私は自分の焦慮と自分の願ひとを、二つ乍ら匿くことが出来なかつた。

『お目にかきたいです！』ポリッツィは叫んだ、『然し、何うして出来ませう、閣下？ 既う私の手元には無いのです！ 私のものには無いのです！』

斯う言つて彼は、頭の髪を引拂らうと決心したやうに見えた。實際彼は、私が其れを思ひ止まらせようとしても、その前に頭の髪を全部引拂つたかも知れなかつた。だが彼は自分から其れを思ひ止まつて、悲しい負傷をすることを未然に防いだ。

『えッ！』私は怒つて叫び出した、『何ですつて！ 貴方は、私に稿本を見せてやると約束なすつて、遙々と巴里からギルゼンチへ私を來させたんぢありませんか、それに今となつて、私が來ると、それが既う貴方の手元に無いと言ふんですか！ 何といふ破廉耻な人でせう、あなたは！』

いや、私はあなたの此の行爲を、凡ての正直な人達に判断して貰ふために残して置きます！」
此の瞬間に、誰か私を見て居つた人があるなら、其の人は屹度、怒り狂ふた羊の姿の、絶好の
概念を形作ることか出来たであらう。

『實に破廉耻です！ 破廉耻です！』私は怒りに慄ふ腕を振り廻し乍ら繰返した。

やがてミカエル・アンゼロ・ポリツツイは、宛ら死に類した英雄のやうな風に、椅子の中へ臥れ込
んだ。彼の眼に涙が溢れて居るのを私は見た。又彼の髪の毛——その時まで艶々として頭の上に
立つてゐた髪——は、元氣無く亂れて眉の上に崩れかゝつた。

『私は父親です、閣下！ 私は父親です！』彼は両手を絞り乍ら唸つた。
彼は咽び乍ら續けた。

『私の伴のラフワエル——いえ、私の可哀さうな妻の子供です、妻が死んでから私は十五年間
も嘆き悲しんで居るのですから——そのラフワエルが、閣下、巴里へ出たいと申したのです。で、
ラフイー街へ居を借りまして、骨董品の商賣を初めたのです、私は自分の有つてのた貴重品は全
部伴に與りました——一番美しいマジヨリカ(伊太利マジヨリカ焼)も、一番奇麗なウルビノ焼も
美術の傑作類も、皆伴に與りました。あゝ其の繪は、シグノール——今でさへ、一寸眼を閉つて

想像しても、私の眼を眩ますやうなものばかりだつたのです！ それが皆約束済になつて居るの
です！ それが皆約束済になつて居るのです！ 一番最後に與へたのは「Golden Legend」の稿本
だつたのです！ 私の肉と血とを、伴に與へたやうなものですよ！ 一人息子のシグノール、可
哀さうな、神様のやうな、私の家内の一人息子』

『あゝ、それでは、』と私は言つた、『私がクラーク・アレキサンダーの稿本を見付け出さうとし
て、シシリーの真ん中を旅行して居つた間に——あなたの言葉が本當とすれば——其の同じ稿本
が、ラフイー街で、實際賣物として窓先へ陳列されて居つた譯ですね、私の家から千五百ヤード
も有る無しの所で？』

『さうです、其所にあつたのです！ 動かすことの出来ない眞實です！』シグノール・ポリツ
ツイは叫んで、急に又元のやうに冷靜になつた、『而も其れが今でも其處にあるのです——少くも、
有ればいゝと思ひますよ、閣下。』

斯う言ひ乍ら彼は、棚の上から一枚の端書を取出した、そして其れを私に差出して言つた。

『是れには伴の所が書いてございます。何卒あなたの御友達の方に御吹聴なさつて下さい。陶
磁器に瑛瑯燒、帷に繪畫と云つたやうなものです。伴は、美術品の完全な貯蔵をやつて居ります

が——それが皆最も正当な値段がついて居りまして——どれも是れも眞物ばかりです。私は名譽にかけて保證致します！ 行つて會つてやつて下さい。「Golden Legend」の稿本をお目にかけるでせうから、二枚の挿畫は、不思議なほど色彩が鮮明なんです』

私は彼の差出した端書を取るだけの力が無かつた。

此の男は、専ら私の弱點を利用して、ラフワエル・ポリッツィの名前を學者仲間には吹聴させようとして居るのであつた。

私の手は既に扉の把手を持たうとして居つたが、その時此のシシリー人は私の腕を捉へた。彼は突然何かを感じたかのやうな顔をした。

『あゝ！ 閣下！』彼は叫んだ、『私達の此の市は、實に素敵です！ エムベドクレス（古代希臘の哲學者）を生んだのも此の市です！ エムベドクレス！ あゝ何を偉大な人物でせう！ 何といふ偉大な市民でせう！ 何といふ大膽な思想でせう！ 何といふ道徳でせう！ 何といふ魂でせう！ 向うの港の所にエムベドクレスの銅像がございますがね、私はその前を通る時は必ず脱帽しますよ！ 伴のラフワエルが巴里のラファイー街で古物の店を開かうとして出掛けた時も、私は彼れを港に連れて行きましたね、彼處の、あのエムベドクレスの銅像の足元で、父としての

祝福を與へてやりました！ 「いつもエムベドクレスを記憶して居れ！」と、私は伴に言ひ聽かせました。嗚呼！ シグノール、今日我國が渴望して居るのは、新しいエムベドクレスなんだ！ 閣下、その銅像へ行く道をお教へ致したいと思ひますが、如何でございますか？ 私は此處の古蹟巡りの御案内を致します。カスターとリュボークスの神殿とか、オリムピア・ジュピターの神殿とか、ルシニアン・ジュノーの祠とか、古井戸、シエロンの墓、又は黄金門と云つたやうなものを御案内致しますよ！ 案内を商賣にしてゐる奴等は皆馬鹿です、私は然うぢやありませんからね——又御希望なら發掘もやらうぢやありませんか——色々の寶が見つかりますよ！ 私は、地中に埋没して居る寶庫發掘術を知つて居るのです——どの邊に何があるかといふことが、ちやんと分る秘法です——天稟の才能です』

私は、彼に捉まつてゐたのを巧みに振り放すことが出來た。所か又もや彼は私を追驅けて來て階段の下で私を引留め、耳の所で言ふのであつた。

『ねえ、閣下。私は市中を御案内致しますよ。ギルゼンチン人も二三人御紹介申上げます！ 何といふ人種でせう！ 何といふタイプでせう！ 何といふ格好でせう！ あゝ、シシリーの娘

達——古代の美そのものです！』

『勝手にしろ！』遂々私は腹を立て、叫んだ。そして尙ほも夢中に上ほぜ上つて腕いてる彼を残して、往來へ跳び出した。

彼の見えない所まで来た時、私は石の上にどかりと腰を下ろして、顔を両手の中に埋めて考へ初めた。

『あゝ、こんなことの爲めに、』と私は獨語した、『こんな話を聞くために遙々シシリーまで出掛るなんて！ あのポリツツイの奴、全く悪黨だ。も一人の息子もだ。二人で俺を滅ぼす計略なんだ。』だが、一體何ういふ計略だらう？ 私には其れが解らない、その内には、自分がどんな落膽と屈辱とを感じてゐたか想像がつくかも知れない。

快活な笑ひが突然私を振返へらせた。私はトレボフ夫人が良人の先きになつて駈けて來るのを見た。夫人は手に何か持つてゐるが、それが何であるか、私には明瞭に識別することが出来なかつた。

私の傍へ彼女は腰を下ろした。そして——始終、前よりも悦ばしさうに笑ひ乍ら——汚ならしい小さなボール箱を私に見せた。その表面には赤と青の顔が印刷してあつた。其の畫題はエムベドクレスの顔だと言ふことであつた。

『成る程、奥さん、』私は言つた、『然しですね、あの汚らしいポリツツイ、あの男の處へ決して御主人をお遣りにならないようにと私があなたに忠告しましたね、あのポリツツイの奴が、エムベドクレスのことで今先き私に喧嘩を吹きかけたのですよ。又此の肖像だつて、些とも昔の哲學者らしい所が現はれて居ないぢやありませんか。』

『おゝ！』トレボフ夫人は叫んだ、『是れは見苦しいものですけれど、稀らしいんです！ 此の類の箱は全く輸出はしないのです、只これを作る所でしか手に入れることが出来ないのですものね。ドミトリは是れと同じのを六つもポケットに入れて居りますけれど、それも、外の蒐集と交換する約束で手に入れたのですよ。ね、お解りになつたでせう？ 今朝の九時に私達は工場へ参りました。私達は決して時間を無駄にしてやしませんのよ。』

『いや、能く分りました、奥さん、』私は苦々しく答へた、『でも私は全く無駄な時間を費しましたよ。』

此の時私は、彼女が本質に於て氣立てのいゝ婦人であることを知つた。と、突嗟に彼女の快活な所は全部消失せて了つた。そして、

『お氣の毒なボナール先生！ ほんとにお氣の毒なボナール先生！』彼女は呟いた。

そして私の手を取つて附加へた。

『あなたの御困りのことを話して頂戴。』

私はそれを彼女に話した。私の話は長かつた、けれども彼女は、折々色々の質問を放つた所から見れば、確かに其の話に感動したやうであつた。又私はそれを友情的な興味の證據であると思つた。彼女は其の稿本の眞の表題とか、其の形とか、その體裁とか、年代とか云ふやうなものを知りたがつた、そして、シグノール・ラフワエル・ポリツツイの住所を私に訊いた。

で私は其れを教へた。(あゝ天運なる哉!)あの忌はしきポリツツイが、さうするに私とに告げた所のことを、そのまま私は實行したのであつた。

人は自己を抑制することの困難な場合が屢々ある。私は自分の悲しみと呪ひとを再びせずには居れなかつた。が、今度はトレボフ夫人がワツと笑ひ出した。

『何故お笑ひになるのです?』私は夫人に訊ねた。

『でも私、悪くい女ですもの。』彼女は答へた。

そして、落膽して石の上に腰を下ろしてゐる私を置去りにして、彼女は跳んで行つて了つた。

(千八百五十九年、十二月八日、巴里にて)

解いたばかりの幾つかのトランクが、まだ私の廣間を塞いで居る。私は凡ゆる御馳走に蔽はれたテーブルに就いた、それは皆、佛蘭西の土地が美食家の好みに應ずるために産出したものばかりである。私は *Mate de Chartres* を食つて居つた、是れは人をして自分の國を愛させるに充分なものである。テレーズは兩の手を白いエプロンの上で組み合せて私の前に立ち乍ら、慈愛と、不安と、憐愍とを以て私の顔を覗めて居つた。ハミルカーは、嬉しさに我れを忘れて、私の脚に身體をこすり付けてゐた。

次のやうな、昔の詩人の言葉が、私の記憶に甦つて來た。

『ユリーシスの知く、樂しき旅を了へしものは幸福なるかな』

……『さうだ、』私は自分に考へた、『自分は何の目的も無く旅行した。自分は手を空しうして歸つて來た。だが、ユリーシスのやうに、自分は樂しき旅をしたのだ。』

珈琲の最後の一滴を啜つてから、私はテレーザに命じて帽子と杖とを出させたが、彼女は恐ろしい疑惑なしに其れを私に渡すことは出来なかつた。彼女は、私が又別な旅行に出掛けるかも知

れないと心配したのであつた。然し私は、六時には夕飯を支度をするように彼女に吩咐けることによつて、彼女を安堵させた。

私は此の巴里の街々で空気を呼吸することに對して強い悦びをいゝも感じた。又其の街々の鋪石や石を、私は熱烈に愛してゐた。だが私は、胸の中に一つの目的を有つて居つた、そしてラフイー街へ一直線に道をとつた。シグノール・ラフワエル・ポリツツイの家を見出すのに長い時間かゝらなかつた。古い繪畫を夥しく陳列してあることによつて、直ぐに其れと知れたのであつたが其の繪畫が皆、有名な美術家の署名があるにも拘らず——其れが強ひてシグノール・ポリツツイの商賣的奸計を摸したとは云へないまでも——兎に角天才の仲間就ての何か感動物な思想を摸傲したかも知れないと云つたやうな、近似した家風を有つて居るものであつた。斯うした怪しげな美術品で裝飾されて居る上に、其の店は、懐劍とか、湯呑とか、酒盃とか、陶器類、眞鍮のトップ、西班牙領アラビヤの金屬製の燭臺とか云つたやうな雑多な美しい骨董品で、一層目を惹く様に飾られてあつた。

楯形の紋で彩色された葡萄牙の肘掛椅子の上には、シモン・ヴォストルの「Heures」の一冊が、星の圖のある頁を開けたまゝ載つかつて居り、又古めかしい箱の上に置かれた古いヴィトロビ

ユースの作は、婦人像と男子像との名醫の彫刻を誇示してゐた。只巧妙な排列を示して居るに過ぎない此の亂雑な外觀と、最も都合の良い光線の中へ最も良い品物を列べて居る技巧たつぷりな冒險とは、此の店に對する私の不信を増加すべき筈であつたけれども、ポリツツイといふ名前だけで以て既に私に浸込んでゐた不信そのものは、如何なる事情によつても増加されることは出来なかつた。——既に其れは無限のものであつたからである。

さうした漠然たる不調和な品物の中を、全部統率してゐる天才のやうに、其處に坐つてゐたシグノール・ラフワエルは、何だか英吉利風の性格を有つた遲鈍な青年のやうに私の眼に映じた。彼は其の物真似と言葉付きとの技巧の中に、彼の父の見せびらかしたやうな卓れた技量を少しも見せなかつた。

私は、訪ねて來た理由を彼に話した。彼は一つの筆筒を明けて、其の中から一冊の稿本を曳出した、そして、私が勝手な時にそれを調べることの出来るようにと、テーブルの上へ載せた。

實際私は、青年時代の極く短い二三ヶ月——あゝ其の二三ヶ月の追憶は、たとひ私が百年も生き永らへることがあつても、其れが私に來た最初の日に於けると同じく、私の最後の日に於ても依然として鮮やかに残るであらう——その時を除いては、私は自分の生涯に、かうした感動を經

験したことは、未だ曾て無かつた。

實際其れは、サー・トーマス・ラーレイの圖書係の書いて居る其の稿本であつた。實際其れこそは、私が眼に見、手に觸れた、クラーク・アレキサンダーの稿本であつたのだ！ ヴォラヂン其の人の著述が態と簡略にされて居つた。だが其れは私の眼には、大した區別を與へなかつた。サン・ゼルマーン・デ・ブレの僧侶の、夥だしい追補が其處にあつた。是れは何よりも肝心な點である！ 私は先づ試みに、聖ドロクトヴユースの傳を讀まうとした。だが不可能であつた——頁の上の凡ての行は、私の眼の前で顫え、私の耳には、夜の田舎の風車の響のやうな音が聞えた。然し私は、其の稿本が疑ふ餘地の無い真正なものであるといふ凡ゆる證據を示して居るのを、觀取することが出来た。聖母のエルサレム入京の圖と、プロセルピンの戴冠式との二枚の挿畫は、構圖に於て不完全であり、色彩の強烈によつて野卑なものであつた。サー・トーマスのカタログの中に證明されて居る通り、其は、千八百二十四年に酷く破損して、其の當時新奇な點を附加へられたものであつた。だが、此の奇蹟は少しも私を驚かさなかつた。況んや又、私は此の二枚の裝畫に就て何の注意を拂はう？ アレキサンダーの傳記と詩——是れだけが私の望んで止まない寶であつた。私の眼はそれの有つてゐた魅力の限り、それに惹付けられた。

その寫本の値をシグノール・ボリツツイに訊ねて居る時、私は無感覺になつたのを感じた。そして彼の答へを待つて居る時、私の任意に持合せの金額を超過しなければ良いがと、人知れず祈りを捧げた——何故なら私の金は、贅澤な旅行のために、既に大部分失くなつてゐたから、然し、シグノール・ボリツツイは、其れが自分のもので無い故に、勝手に他人に賣却する譯には行かないといふことや、其れが近い内にオテル・デ・ヴェンテスで、多數の他の稿本や五六冊の初期の印刷書と一緒に競賣される筈になつて居ることを、私に告げた。

是れは私にとつては強い打撃であつた。然し私は冷靜を保たうと試みて、何だか次のやうなことを答へた。

『意外なことを仰有いますね、あなたは！ 最近にギルゼンチであなたのお父さんとお話しましたが、お父さんは、其の稿本が確かにあなたのだと仰有りましたよ。あなたは、お父さんの言葉を疑ふわけには行きませんかよ。』

『成る程此の稿本は私のものだつたのです、シグノール・ラフワエルは全く打解けて答へた、然し今では既う私のものでは無いんです。私は其の稿本を賣つたのです——非常な利益だと云ふことは貴方もお分りでせう——素人の人に賣つたのです。その人の名前を言ふことは差止めら

れて居りますがね、その人が又、勝手に申上げられない色々な事情で、自分の蒐集品を賣却せねばならなくなつたのです。私はそのお客様の信任を博しましてね、賣品目録を作成して競賣の世話を委托されたのです。それが十二月の二十四日にあることになつてゐます。只今、若し貴方様のお所書きが頂けましたら、目録をお届け致したいと存じます、もう印刷屋へ廻してあるんですから。『Legend, Dorée』もちやんと四十二番に載つて居りますよ。』
私は所書きを渡して、店を出た。

息子の、慇懃な沈着が、父親の不謹慎な滑稽と同じき不快を私に與へた。私は心の底で、此の悪い懸引屋を憎んだ。これ程私の欲しがつてゐる稿本の値段を、無理に法外な程度まで糶り上げるために、二人の悪黨の間には暗黙の了解があつて、随つて、それを職業にして居る附値人の力を藉りて此の競賣を企んだといふことは、全然明かなことであつた。私は旨く彼等の思ふ壺に飲まり込んだのだ。凡ての熱烈な望みの中には一つの悪がある——これは最も高貴なものでさへある——そして其れが我々を他人の意志に服せしめたり信頼されたりする。斯うした反省が慘酷に私を苦しめた、けれども其れは、クラーク・アレキサンダーの著述を手に入れようとする私の希望を打砕くことはしなかつた。こんな風に私が黙想して居つた時、馭者の叫ぶ聲が聞えた。私は

馬車の棒が私の肋骨に衝き突つたと感じた時、初めて其れが私に向つて怒鳴つて居つたのだといふことが分つた。私は跳び退いた、そして辛うじて轢かれるのを助かつた。その時私は、馬車の窓を通して、誰を認あたうらう？ 私が今先き離れた其の街の中を、トレポフ夫人は美しい二頭の馬と、ロシヤの侯爵のやうに全身に毛巾を纏つた駁者とに曳かれて行くのであつた。彼女は私の居ることに氣が付かなかつた。彼女は、飾り氣の無い美のマ情を以て獨り笑つて居つたが、その表情こそは、三十歳の彼女のために、幼い頃の凡ゆる魅力を保つて居る所のものであつた。
『さうだ、さうだ！』私は獨語した、『彼女は笑つて居る！ 彼が異つたマツチ箱が見つかつたものらしい。』
そして私は、非常な惨目さを感じ乍ら橋の方へ引返した。

自然は、永久に公平に、十二月二十四日を急がせもしよければせき立てもしなかつた。私はホテル・ブリアオンへ行つて、第四號室に席を取つた。真ぐ下の高い机は、競賣人のブローズと鑑定人のポリツツイの坐る所になつてゐた。廣間が次第く顔馴みの人々によつて満たされて行くのを私は見た。私は年寄つた河岸の本屋の二三人に握手した、然し乍ら、如何なる興味も最も白

信ある人に對してさへ感じられないあの心細さは、私をして、オテル・ブリオンの中の見慣れない光景の理由に就て、只管沈黙を守らしめた。然し之れに反して、私は、其の紳士遂に對して、何故此の競賣に出席したかの理由を、詳しく聞き糺した。そして其等の人には皆、私の要件と全然關係の無いことに興味を有つてゐるのを知つて、私は満足せずには居られなかつた。

刻一刻と會堂は、興味を有つた人或は、單に好奇心だけの見物人で群を成して來た。そして、三十分ばかり手間取つた後で、競賣人は手に象牙の槌を持ち、書記は控帳の包みを提げ、呼手は又、棒の先きに結付けた集金箱を持つて、最も嚴肅な事務的態度で、壇の上の各自の席に着いた部屋のボーイ等は其の机の下の所に並んだ。座長が競賣の開始を宣言すると、所々の沈黙が之に續いた。

挿畫のある、有觸れた澤山の「Prece hioe」が、其れ相當の値で、先づ第一に賣れた。言ふまでも無いことであるが、是等の本の飾字は凡て完全な状態にあつた！

言ひ値の安いといふことが、それに出席してゐる古本屋の群れに勇氣を與へた。彼等はだん／＼私達の間に混ざつて來て、親しくなつて居つた。古い眞鍮や骨董を商ふ人々は、隣りの部屋の扉の開かれるのを待ち乍ら、我れ一と前の方へ押し合つてゐた。そして競賣人の聲は、酔拂ひ

のびやかしの聲で搖き消された。

「Guerra s Tuifs」の立派な寫本は注意を喚起した。それは永い間糺られた。『五千フラン！五千！』と呼手か叫んだ。その時骨董屋等は驚嘆し乍ら黙つてゐた。次に七八冊の交代詩歌集が再び私達を低い値段に引戻した。寛袍を着て、帽子も被らない、一人の肥つた年寄りの女古物商は其の本の大きさと、入札の値段の安いのとに勵ませられたために、其の内の一冊が遂に三十フランで其の女に賣下けられた。

最後に、鑑定家のポリツツイは第四十二番を告知した。「The Golden Legend」。佛蘭西語の寫本未刊行。美しい裝畫。初手の羅値が三千フラン。』

『三千！三千！』と呼手は呼號した。

『三千！』と、皺枯れ聲で競賣人は繰返へした。

私の頭の中には唸聲が起つた。そして、丁度雲の中から見るやうに、私は、一群の奇妙な顔が凡て其の稿本の方に向けられて居るのを見た。一人のボーイは其れを開いたまゝ傍聽人の間を廻つてゐた。

『三千と五十！』私は言つた。

私は自分の高い聲に我れ乍ら驚いた、そして凡ての眼が私の方を向いて居るのを知り、或は考へて狼狽した。

『右側で三千と五十!』呼手は私の言ひ値を取上げて呼上げた。

『三千百!』シグノール・ポリッツィは應じた。

そこで鑑査人と私との間に、英雄的な決闘が開始された。

『三千五百!』

『六百!』

『七百!』

『四千!』

『四千五百!』

此の時、突差の大膽な一撃によつて、シグノール・ポリッツィは、驛値をば、一躍六千に上げた。六千フランは、私の出すことの出来る金高の全部であつた。それは可能の極點を示すものであつた。私は不可能を冒した。

『六千一百!』

悲しい哉! 不可能を賭してさへ足らなかつた。

『六千五百!』と、シグノール・ポリッツィは落着き拂つて酬ひた。

私は頭を垂れ、呆然として其場に腰を下ろした。そして、私に聲をかけた呼手に對してイエスともノーとも答へることは出来ないでゐた。

『六千五百。私の附値です。——あの右側に居つた貴方のぢやありませんよ』——私の附値です——いえ、間違です! 六千五百!』

『解りました、解りました!』競賣人は叫んだ。「六千五百。能く解ります。瞭然^{はつや}してゐます……是れ以上の驛値はありませんかな? 最後の驛は六千五百フラン』

嚴肅な沈黙は漲つた。急に私は、自分の頭が裂けたかのやうに思つた。補佐の役人の槌が壇上を音高く叩いて、四十二番が確實にシグノール・ポリッツィの手に落ちたことを宣言した。即時に書記のペンは、證書の上を走り乍ら、此の大事件を只の一行の中に記録した。

私の全身はぐつたり疲れ切つた。私は休息と靜止との極度の欲求を感じた。しかし私は自分の席を離れなかつた。私の反省刀は徐ろに歸つて來た。希望は粘着する。私には今一つの希望があつた。私の念頭に浮んだのは、「La ende Do.é」の今度の所有者が透明な寛大な愛書家であつて、

其の稿本を私に調べさせて呉れるかも知れない、又恐らく最も重要な部分を印刷に附することでも許してくれるかも知れないと云ふことであつた。で、かうした考へを抱いて、競賣が終るや否や、私は、今正に壇を去らうとして居つた鑑査人に近づいて行つた。

『もしく、』私は其の人を呼止めた、『あなたは、四十二番を、御自分のためにお買ひになつたのですか、それとも又委任を受けて？』

『委任を受けてゝす。どんな値段でゝも其れを逃がさぬ様にと吩咐かつたのです。』

『その買手の方のお名前を教へて頂けませんかねえ？』

『いや、折角ですが、其ればかりは申上げられませんよ、名前を出すことは嚴重に差止められて居るんですから。』

私は絶望して家に歸つた。

(千八百五十九年、十二月三十日)

『テレーズ！ ベルが聞えないかい？ 誰かドアの所で、最後の二十五分のために、ベルを鳴らしてらぢやないか！』

テレーズは返事をしなかつた。彼女は慥かに、階下で門番とお喋りをして居るのだ。ではお前は、年寄つた自分の主人の誕生日を、そんな風に考へて居るのだね？ 聖シルヴェストルの晩にさへ私を置去りにしたのはお前だ！ 嗚呼！ 若し私が今日友愛の挨拶を聞くのだとすれば、それは皆地面の中からでなければならぬ筈だ。私を愛したものは皆、土に埋められてから長いことになるからだ。實際私は、何のために生き永らへて居るのか、自分にも解らない。おや再たベルが！……私は火の傍の席から徐ろに起き上がった、そして自分でドアの方へ行つた。私が闖の所で會ふのは誰だ？ それは、滴るやうな愛人では無い、又私とても老いたるアナクレオン(註、西歴前五百年頃の希臘の享樂詩人)では無い。たが其れは十歳位の非常に可愛らしい少年だ。其の少年は獨りほつちである。少年は顔を上げて私を見る。其の兩の頬は赭い、けれども其のこまじやくれた小さな鼻は、悪戯氣の氣持を人に與へる、彼の帽子には鳥の毛が附いて居り、ジャケットには大きなレースの襷が着いて居る。美しい可愛い奴よ！ 彼は身體ほどさの大の包を小脇に抱へて居る、そして私に、シルヴェストル・ボナール様ですかと訊く。私は然うだと答へる。すると少年は其の

包みを私に渡して、彼の母がそれを私に贈つたのだと言ふ、それから彼は階下へ驅けて行く。

私は二三歩降りて行つた。私は欄干に凭れかゝつて、其の小さい帽子が、風の中の鳥毛のやうに、螺旋狀の階段を降りて行くのを見る。『左様なら、可愛い少年よ！』私は彼に何か訊きたいと非常に思つた。だが結局、何を訊くことが出たか？ 子供に質問を發することは禮儀では無い。而已ならず此の包其のものは、使者が齎らしたよりも一層多くの消息を私に齎らすだらう。

其れは非常に大きな包みであつたが、重さは大したものでは無かつた。私は其れを書齋の中へ持つて行つて、其處で紐を解き、上包みの紙を剥いだ。そして見たものは——何か？ 圓木だ！ 上等の圓木だ！ 眞のクリスマスツリーの圓木だ！ だが其れは、空虚に違ひないと思ふ程軽い。やがて私は、其れが實際二つの分離した部分から成つてゐて、蝶番の所で開き鉤で止めるようになつてゐるのを發見した。私はフックを外づした、と私はヴァイオレットで満たされたのを感じた。ヴァイオレット！ 其れは、テーブルの上にも、膝の上にも、毛氈の上にも發散した。私のチョッキの上へも、袖口へも踊り込んだ。私はそれと俱に全身匂ふた。

『テレーズ！ テレーズ！ 花瓶に水を一ぱい入れて呉れ、そして此處へ持つて来てくれ、早く！ そら、こんなに董を贈つて呉れてあるんだ。何處の國からか、誰の手からか解らない、だ

が何處かの匂の國から、非常に美しい手によつて贈られたものに違ひないのだ……ねえ、解るかい。年寄りの鴉さん？』

私は、董を全部テーブルの上へ置いた——今や私は一群の馥郁たる香氣によつて完全に包圍されて了つた。だが、まだ何か圓木の中にある……本だ、寫本だ。其れは……あゝ自分には信じられない、だが疑ふことも出来ない。其れは「Légende Dorée」ではないか——クラーク・アレキサンダーの稿本では無いか！ あゝ此處に「聖母のエルサレム入京圖」と「プロセルピンの戴冠式」とがある。——あゝ是れが聖ドロクトビユースの傳記だ。私は此の董の香のする記念物を默考する。私は本の一枚々々を開ける——其の間へ黒づんだ豊麗な花瓣が、此處彼處に滑り込んだ。と聖シエシリヤ傳の正反對の側に、私は、次のやうな名のある一枚の名刺を發見する。

「トレポフ公爵夫人」

トレポフ公爵夫人！——あなたはアグリゼンタムの美しい窓の下で、實に愛くるしく笑つたり泣いたりしました！——一人の意地悪い老爺があなたを馬鹿な小さい女と信じ込んだ、そのあなたです！ 今日私は、あなたを、稀れに見る美しい馬鹿と信じました。そして此の老爺、あなた

が今幸福で包んだこの老爺は、あなたのに接吻しに参ります。そして彼と學術とが、正確な立派な刊行をあなたに負ふて居る此の貴重な稿本を、別な形式であなたにお返し致します！

テレーザは此の瞬間に私の書齋へ入つて來た。彼女は非常に昂奮してゐる様に見えた。

『先生様！』彼女は叫んだ。『今先き私が、紋章付きの馬車に乗つて居るお方を見ましたが、それが何誰だか先生様にお分りでせうか？ その馬車が扉の前に停つて居つたのでございます。』

『Purheni 驚きを現はす誓語』——トレポフ夫人だ、私は叫んだ。

『トレポフ夫人と仰つても、一向私には分りません。』と私の家事管理婦は答へた。『今先き私の見ました女の方は、何だか公爵夫人のやうな装束でございました。そして小さい男の子供さんを連れてゐられましたよ。その男の子供の着物の縫目には全部レースの縁飾が附いてゐましたよ。それに何うでせう、女の方といふのは、いつか先生様が圓木をお贈りなされた小柄なココツクのお神さんと同じ人でございましたよ、十一年程以前に此處で赤ん坊を生んだ女があつたでせう。私は直ぐと、あの女といふことが解つたのです。』

『何だつて！』私は叫んだ。『お前、それがココツクの妻君だつたと云ふのかい、曆賣の後家

さんだと云ふのかい？』

『その女ですよ、先生様！ 小さい男の子か何處からか出て來まして、馬車に乗る時に扉が暫く開いて居つたのです。あの女は些とも變つて居りませんでしたよ。それに何故、世間の女は變るんでせう？——何も心配することも無いのに、ココツクのお神さんは只、少し許り以前とは肥つて居るやうに見えましたよ。さう致しますと、純粹な同情心で此の建物に收容された女の理想といふものは、紋章の附いた馬車に乗つて、天鵝絨やダイヤモンドを見せびらかしに來ることになりますね！ 恥曝してはございませんか！』

『テレーズ！』と私は恐ろしい聲で叫んだ。『若しお前がああの人になつて、最も深い敬語を使はないで、二度と俺に話するようなことがあると、お前と俺とは喧嘩になるよ……さあ此の董を挿すんだから、セーブル焼きの花瓶を持つて來ておくれ。それが今此の書物の都に、是迄に無い魅力を與へるだらう。』

テレーザが溜息をつき乍らセーブル焼きの花瓶を取りに行つた間に、始終私は四邊に散らかつた美しい董を黙想し續けた。その句は、何か美しい實在か何か魅力的な句の魂ひのやうに、私の周圍に擴がつて居つた。又私は、トレポフ公爵夫人なる人物の中に少しもココツク夫人の面影を

認めないといふことが、若しも有り得たならば何うだらうと、自分に訊ねた。だが、階段の所で赤ん坊を私に見せたあの若い寡婦の幻影は、實に速忽なものであつたのだ。私は其れとは知らないで、美しい綺麗な魂の傍を通り過ぎたのだ。あゝそのことで自分を責める理由が充分私にある。

『ボナール』と私は自分に話しかけた、『お前は古い書物の読み方は知つて居る。だが「人生の書」の読み方は知らない。あの軽卒なトレボフ夫人——お前が會て、鳥以上の魂も有つてゐないと信じてゐたあのトレボフ夫人は、純粹な感謝の念を以て、お前が會てどんな人のために示したもののよりも遙かに熱心な、もつとく美しい感情を惜氣も無く示したでは無いか。正しく立派に、彼女は自分の報賽日リキニデーの圓木の火に對して、お前に酬ゐたのでは無いか！』

『テレーズ！ 今先きまではお前は鵲だつた。だが今は龜に成らうとして居る（曉舌家だつたが今は然うて無い）。さあ來て此のバルマの董に水をやつて呉れ

（曉舌家だつたが今は然うて

第二部

クレマンティンの娘

I 小 仙 女

私がミラン停車場で汽車を乗り捨てた時、夜は早くも静かな田舎の上に其平和を擴けてゐた。永い日の朝から晩まで、強烈な太陽のために——ワル・ド・ヴィールの草刈男の言ふ「大きな天道様」のために——熱せられた土は尙ほ蒸々して重苦しい匂ひを發散してゐた。繁つた草の水々しい香は野原の上を過ぎて行つた。私は汽車の箱の埃を掃ひ落として、欣然として新鮮な空気を吸ふた。私の旅行革囊——家事管理婦が、亞麻布とか、色々の小さな化粧道具とか、*mirrors*とか云ふ様なものを詰め込んで呉れた旅行革囊が、私の手の中で非常に軽く感ぜられたので、私は、丁度小學生が、學校の放課後に初等教科書の包を振廻すやうに、其れを振廻はした。

あゝ神よ、今一度私は頑是ない小學生になることが出来たら！ だが、私の善良な亡き母が、私にバター麵麩と糖菓とを拵へてくれて、それらを籠に入れて私の腕に掛け、さうして準備が出来ると、ドーロアー先生の開いてゐた學校へ私を連れて行つて呉れたのも、もう九五十年の昔のこ

とになつた。學校は裁判所と庭園との間の、あの雀で有名な商業通りの角の所にあつた。體格の大きなドーロアー先生は、深切さうに莞爾と私の顔を見て、私の頬べたを軽く叩いたが、それは、私の最初の容貌が感ぜさせた慈悲深い興味を現はすために外ならなかつた。所が私の母が雀共を驚かし乍ら裁判所の所を出て行つて了ふと。ドーロアー先生は微笑を止めて——今までのやうな慈しみ深い興味を少しも示さなかつた、何だか其の反對に、彼は私を非常に厄介な頑童と思つてゐるやうな風であつた。其後に至つて私は、彼が生徒全體に對しても、是れと同じ感情を抱いて居つたのを知つた。彼は、そんな肥えた人としては迎も想像もつかぬ様な敏速さを以て、管でピシ／＼叩いた。所が私達の居る前で私達の母親と話をしてゐる時は、いつも最初の時のやうな優しげな感情の態度を再び現はすのであつた。そしてさうした時は屹度、私達の長所を熱心に褒めそやしてゐる一方では、熱烈な愛情の眼を私達の上に投げかけるのが常であつた。だが斯うは云ふものゝ、私がドーロアー先生のベンチの上で、小さい仲間と俱に、朝から晩まで、代る／＼力の限り泣いたり笑つたりして過ぎたあの年月は、幸福なものだつたと思つて居る。

其後丸五十年経つた今日、此の星空の下で、當時の想ひ出は嘗ての如く生々と輝いて私の記憶の面に浮び上つて来る。あゝ此の空の姿はその當時からは少しも變つてゐない。其の靜かな永遠

の光りは、加答兒に惱まされて徐々に頭髮霜を加へるに至つた私のやうな、他の多くの小學生を無論見るであらう。星よ、私の忘却した凡ての祖先の中の、賢き者 愚かなるものを一樣に照らした星、私が今自分の中に、身に泌む一種の悲しさを感じるのも、お前の柔かい光の下でだ！私がおもう二度とお前を見なくなつた時、お前を見ることの出来る一人の息子が私に有つたらと思ふ！ あゝ私は、どんなにか自分の息子を可愛がることか！ 嗚呼！ 恐らくさうした息子は——だが私は何を言つてるのだらう？——さうだ、クレマンティン、只お前が望みさへして居つたなら、彼は今頃は丁度十二歳になつて居る筈なのだ——石竹色被布の下で、いつも兩の頬が蔷薇色をしてゐたお前が！ だがお前は、若い銀行の書記——後に大きな資産を拵へたノーエル・アレキサンダーと結婚した！ クレマンティン、お前の結婚後、私は一度もお前に會つたことが無い、だが今でも私はお前を見る事が出来る、艶々した縮髪をして石竹色の被布を被つたお前を、鏡！ 鏡！ 鏡！ 實際、頭に霜をいたゞいて、星に對してクレマンティンの名を追慕して居る私はどんなものに見えるか、蓋し不思議なものに違ひないのだ！ だが無駄な皮肉を以て、此の感情が信實と愛情の心から起つたと断定して了ふのは決して正しくは無いのだ。否、クレマンティン、此の美しい夜に偶然お前の名が私の唇に出るにしても、お前のその懐かしい名が永久に

祝福され、そしていつもお前は、幸福な母として、又幸福な祖母として、一生の最期に至るまでお前の富裕な良人と最上の幸福を享受することが出来るのだ、而もお前は、さうした幸福が、お前を愛してゐた貧しい青年學徒との結婚では逆も獲ることが出来なかつた信じる権利を有つてゐた其の幸福では無いか！ 若しも——勿論私は今そんなことを、空想することさへ出来ないが、——若しもお前の美しい髪が白くなつたならば、クレマンティン、お前は、ノーエル・アレキサンダーから托された鍵の束を立派に保管するだらうし、お前の孫達に對しては凡ての家庭的な道德の智識を與へるであらう！

美しい夜よ！ 彼女は實にも尊とい平和を以て、人と動物とを一樣に支配し、憐み深くも彼等をば日々の勞苦の轡から解放する。私は又彼女に對して慈愛の靈感をさへ感じる、だが七十年間の私の性癖が、私を著しく變化して了つたために、私は只大抵のものを、其等を現はす表象によつてのみ感ずることが出来るだけである。私の世界は全部が言葉から成り立つて居る——それ程の言語學者に私は成つて了つた！ 凡ての人は、人生の夢を彼自身の行路に於て見る。私は其れを私の書齋の中で夢想した。そして私が此の世界から去らねばならない時が到來したならば、神は悦んで此の私を、私の梯子段から——本棚の前から、私を引取つて下さるであらう……

「さうだ、さうだ！ たしかにあの人だ！ *Pardieu!* (誓ひの言葉) 御機嫌は如何です、シルヴ

エルトル・ボナール様 一體今頃まで何處を旅行してゐられたのです、田舎の土地を！ 私は馬車を曳いて行つて停車場であなたをお待ちしてゐたのですよ。列車が入つて來た時、あなたは私からお逃げになつたものですから 私は又、ルーアンスへ引返させられて、實に失望しましたよ。さあ、靴をこちらへお寄越しなさい、そして此の馬車に乗つて私の傍へ起き上りなさい、成る程あなたは、此處から別荘までは七千メートル充分あるのを御存じぢやないのですね？」

聲を絞つて、馬車の高い所から、こんな風に私に話掛けるのは誰だらう？ ボール・ド・ガブリー君なのだ、一八四二年に佛蘭西の貴族になつて、最近モナコで死んだオノレ・ド・ガブリー氏の甥であり嗣子である所のボール・ド・ガブリー君なのだ。そして私が、私の家事管理婦が非常に注意深く革紐で縛つてくれた靴を携へて、正しくボール・ド・ガブリー君の家を指して行きつゝあつたのである。此の立派な青年は、二人の義理の兄弟と俱に、彼の伯父の財産をつい近頃相續したのであつた。叔父といふのは、十四世から續いてゐる、代々立派な法律家であつた古い家系に屬してゐた人で、ルーアンスの別荘に、寫本類に豊富な文庫を所藏してゐた。ボール・ド・ガブリー君からの熱心な求めに應じて、私がルーアンスへ來たのも、全く其等の稿本の一覽表と目錄とを

作るために外ならなかつたのである。又、ポール君の父は完全な紳士で、秀れた愛書家であつた所から、彼の生前私とは最も喜ばしき交渉を續けて居つた。實を言へば、ポール君は、此の美しい父の嗜好を全然受け嗣いで居るなかつた。ポール君は遊獵が好きで、馬と犬とに就ては立派な大家であつた。で私は、人類の飽くこと無き好奇心を満足せしめたり瞞したりすることの出来る凡ゆる學術の中で、彼が通曉して居るのは只、厩と犬小屋のことだけなのを大いに悲しまずには居られなかつた。

私達が會合所を作つて以來、私が彼に會ふて驚いたといふことは出来ない、けれども私は、ルーアンスの別荘のことも、其處に住んで居る人々のことも凡て忘却してしひ、又眼の前に蜿蜒としてゐる田舎道——所謂「*L'air bon ruban de queue*」(美しい腰紐)——を辿るべく出發した時私に呼掛けた此の紳士の聲が、全く私を驚かした程、それ程自分の感想の檣になつて了つて了つてゐることに気が付いた。

私は自分の顔が、一種の呆然とした表情——これは私の大抵の社交的行爲の中に現れる傾向のあるものであるが——によつて、不調和な狼狽を表はしてゐるに違ひないと思ふ。私の鞆は馬車の中へ曳上げられた、そして私は鞆の後に隨いて這入つて行つた。私の宿主は其の卒直は單純さ

によつて私を悦ばした。

『私は、あなたの羊皮紙の古本のことは少しも存じませんが、』と彼は言つた、『然し、家ではあなたのお話相手になる者が二三人は居りますよ。自分で書物も書く牧師、實に好人物の醫者——これは多少急進派ですがね——其の他にもまだあなたのお相手の出来る者も居りますよ。實は私の家内ですが、餘り學問のある女ではありませんが、到底思ひもつかぬものを有つて居りますよ。それから又私は、あなたがジャーシ嬢とお知己ちよびになる程充分に永く御逗留が願ひたいと考へて居りますよ。ジャーシ嬢は、ほんとに手品師のやうな指と天女の心とを有つて居りましたね。』

『すると、其の快活な天稟の若い婦人は、あなたの御家族の方ですか?』私は訊いた。

『いえ、さうぢや無いのです。』とポール君は答へた。

『では、只あなたの方のお友達の方ですね?』と、私は多少拙劣に追求した。

『彼女は両親共無いのです。』ガブリー君は、ぢつと馬の耳を腫め乍ら答へた。馬の蹄は、月光に青白く光る道の上で高い音を立てゝゐた。『彼女の父親が、私共を、非常に責任のある大役の中へ惹入れたのです、で私達も、恐れを爲して逃げ出すわけにも行かない始末でしてね!』

やがて彼は首を振つて、話題を變へた。彼は、今に私が、別荘や庭園が非常に荒廢した状態に

あることを發見するだらうといふ正當の警告を私に與へた。其等は、此の三十二年間に、殆ど手の付けようも無い程荒れ果てゝ了つたと云ふのであつた。

彼の話に依ると、彼の叔父のオノレ・ド・ガブリー氏は密獵者共に非常な反感を抱いてゐて、いつも彼等に對して、兎を撃つやうに發砲したさうである。その内の、或る執念深い百姓は、叔父を目のあたり撃つといふ委任を皆の者から受けて、或る晩、樹蔭路の樹の蔭に身を潜めて、主人を待伏せてゐた、そして今少しで彼を撃ち殺すところだつた、何しろ彈丸が叔父の耳の先きを掠めた位だつたと云ふ。

『で叔父は』とポール君は續けて、『發砲した奴を見届けようと致しましたが、遂々それらしい姿も見えなかつたため、悠々と家へ引返して參りました。その翌日叔父は早速家の者を呼びましてね、屋敷も庭園も閉めきつて、生きものは一つも入れない様に命じました。そして彼の留守中は、どんな物にも觸つてはいけない、世話してはならない、又決して屋敷に修繕を施してはいけないと、嚴重に言ひ渡しました。そして自分が復活祭かトリニティ・サンデー(基督復活より第一八次目の日曜)には是非歸るからと、齒の間から申しましたよ、丁度讚美歌の中に言つて居りますやうに。所が、丁度その歌の中にあるやうに、トリニティ・サンデーは叔父の姿も見ないで過ぎたのです。叔父は

昨年、モナコで亡くなつたのです。私の義兄弟と私とは、三十二年も手入れされなかつた別荘へ初めて入ることになつたわけですが、入つて見ると、栗の樹が居間の中程まで伸びて居りましたよ。庭園にしても、小徑も無ければ通路も無くなつてゐると言つた始末で、到底も見に行く價値が無くなつてゐましたからね。』

私の道連れは話を中止した。で、只速足で驅ける馬の蹄の規則的な音と、草叢に鳴く蟲の聲とが、沈黙を破つてゐるだけであつた。道の兩側には、齒の中に立つてゐる禾束が、朦朧たゞ月光の中に、さながら丈の高い白衣の女が跪づいてゐるやうな姿をしてゐた。かうして私は、いつも夜の魅力が暗示する所の不可思議な子供らしい空想の中に、稍暫し我れを忘れてゐた。樹蔭路の眞暗な影の下を驅け抜けた後で、私達は右に曲つて立派な並木道へ出た。その遙か先きの方へ、突然別荘が眺望の中に現はれた——高樓の中に澤山な小塔のある眞黒の塊のやうに、それから我々は立派な本館へ通じて居る一種の土堤道を辿つて行つたが、これは、水が滔々と流れて居る壕割の上を通つて居るところから見れば、無論づゝと以前に失くなつた吊橋の代りに築いたものらしかつた。私か思ふのに、此の吊橋の失くなつたといふことは、曾て平和状態に復歸するように強ひられてゐた戦争好きの領主が、無理に屈服させられた種々の征服の最初のものであるに違ひ

ない、そして私がそこへ案内されて行くわけである。星は眞暗な水の中に、驚くべき清らかさを以て其の影を映してゐた。ポール君は、丁度懇懇な宿の主人のやうに、私に陪従して、長い廻廊の端にある、家中の一番高い所にある私の部屋へ案内して呉れた。それから、もう時間が遅いからと云ふ理由で、今直ぐ彼の妻君を私に紹介出来ないのを謝してから、私に『お寝みなさい』を告げた。

私の部屋は、眞白に塗り立てられて、艶更紗が懸つてゐた。さながら十八世紀の光彩華麗なる面影を保つてゐるやうに見えた。まだ赫々と燃えてゐる灰の堆積——これは濕氣を消散するため態々取入れたものであることを證明して居る——が爐を充たし、大理石の爐の枠は、無地の陶器の中にマリー・アントアネットの半身像を支へてゐた。艶も色彩も褪せた鏡の枠には、二本の眞鍮の鉤が打つてあつたが、無論これは當時の流行婦人が寶石の鎖を掛けるのに使つたものに違ひなかつた。而も其れが今、私の時計を懸けるために恰好な方便を提供してゐるやうに見えた。で私は前以て時計を捲くことを忘れなかつた。何故なら私は、テレマイトの意見とは反對に、人間は時の支配者に過ぎない、彼が其れを時間に割り、分に割り、秒に割つた時に——即ち人間生存の瞬時に分割した各部分に區分した時に、人間は生命其のものであるといふ意見を抱いてゐたからである。

からである。

私は又、人生が極めて短かいものに見えるのは、只我々が自己の狂氣しみた希望を尺度にして不合理に其れを測定するからであると自分で考へた。我々は皆、丁度昔嘶の中の老人のやうに、我々の建物に加へる新らしい翅を有つて居る。例へば私の例で言ふと、私は死ぬ前に「サン・ゼルマイン・デ・ブレーの僧院長の傳記」を完成したいと思つて居る。神が我々の一人々々に割當てた時間といふものは、我々が出来る限りの智識を傾けて裝飾する尊とい織物の如きものである。私は以前から凡ゆる種類の言語學の説明で其の織物を裝飾し初めて居る。……随つて私の思想は凡て其の上を徘徊して居つたわけである。そして結局、私が自分の絹布を頸に捲きつけたやうに「時」の觀念は私を過去の時代に引戻した、そして、時計の同じ廻轉の中に、私は二度目にお前のことを考へたのだ、クレマンティン——若しお前に子孫があるなら、その子孫の中に今一度お前を祝福しようと思つたのだ、蠟燭を吹消して、蛙の歌ふ聲に圍まれて私が眠りに陥る前に、ね。

II

朝食中に私は、ガブリ夫人の良い嗜好とか、頓智とか、聰明さとか云ふものを觀察する好機會

を随分澤山に得ることが出来た。別荘には亡霊が澤山居つて、殊に、「背中に皺の三筋ある貴婦人」や、其の貴婦人の在り中の毒殺者の亡霊、又其後になつて「苦しみの亡霊」が時々徘徊するといふ様なことを私に話した。彼女は此の老侍女の物語をするに中つて、如何ばかりの機智と生氣とを與へたかと云ふことは、到底私の述ぶることの出来ない所であつた。私達は高臺で珈琲を飲んだ。その欄干は、蔓るまゝに生長した常春藤に蔽はれて、其の石臺から無理矢理に引離され、さながらアゼンヌの女が狂喜した人馬(半、半馬の希臘神話中の怪物)の腕に抱かれて周章て居るかのやうに、愛憎の深い樹に抱かれてぶら下がつたまゝになつてゐた。

四隅の端に一つ々々小塔があつて、何だか四輪馬車のやうな形をしてゐる此の別荘は、幾度も改築された、めに元の特徴は凡て失くなつて了つてゐた。單に美しい宏大な建築であるといふだけで、決して其れ以上のものでは無かつた。三十二年の間放任してつた、ために非常な損害を被つたといふが私の眼には一向そんな風には見えなかつた。けれども、ガブリー夫人が私を、土間になつてゐる大きな客室へ案内して行つた時、板張りが脹れあがつて凸凹をなし、柱礎が朽ち、羽目板がばらばらに剝け落ち、壁の畫は眞黒になつて而も半分以上が漆灰から離れてぶら下がつて居るのを私は見た。一本の栗の樹は、床板を無理に突き上げて、天井まで伸びてゐた。そして

大きな葉のついた枝を伸ばして、硝子の無い窓の所へ届きさうになつてゐた。

此の光景は決して魅力を失つてはゐなかつた、けれども其の隣りの室の、オノレ・ド・ガブリー氏の豊富な書庫が永い年月に伴なて同じく腐蝕力の憂目を見て居るに相違ないといふことを想ふて、私は不安無しに其の光景を眺めることが出来なかつた。然り、私は、此の客室の中の若い栗の樹を眺めた時、大自然の驚くべき力を讃嘆し、凡ての芽を甦らせる所の不可抗の威力を稱讃せずにはゐられなかつた。だが之れに反して、學究たる我々が、如何なる努力を傾けて、諸々の死者のものゝ去り逝くのを防がうとした所で、それは悲しくも無駄な努力をしてゐるに過ぎないと考へた時、私は急に悲しみに襲はれたのを感じた。生きとし生けるもの、凡てそれは新らしき存在の必須な食物となつて了ふのだ。して見ると、バルミラ寺院の大理石の破片で自分の小舎を建てるアラビヤ人は、倫敦とか、ミュニツチとか、巴里とかの博物館の、凡ての保護者よりも、哲學者よりも、遙かに秀でゝ居ると云はなければならぬ。

終日私は稿本類を分類して居つた。……太陽はカーテンを外づいた高い窓から入つて来た。私が屢々非常に面白く感じ乍ら讀んでゐる間、元氣の無い花蜂が重々しい音を立て、窓に突當つたり、光りと熱に酔つた蠅共が、ブン／＼云ひ乍ら私の頭の周圍に輪を描いて飛廻つたりするのが聞えてゐた。三時頃になつて、彼等のブン／＼云ふ羽音が非常に高くなつて来たので、私は讀んで居つた文獻——これは十三世紀に於けるメランの歴史に關する非常に貴とい資料を含んで居る文獻だつたが——から眼を上げて、其等の微細な生物の集團運動を注視した。ラフォンテーヌは彼等を「Petious」と呼んで居るが、彼は斯の言葉の形式を昔の有名な演説の中から見付け出したのであつて、従つて「Tapisserie-a-bestions」なる言葉は花模様の掛毛氈に適用されて居るのである。私は、太陽の熱が蠅の翅に及ぼすのと、古文書の記録者の頭腦に及ぼす影響と、全ち異なるものであると告白しないわけには行かなかつた。何故なら私は、物を考へるのが非常に面倒になつてゐるのを感じてゐるからである。又、多少愉快な倦怠が私の上に重きを増して来て、私が非常に斷乎たる努力を以て、辛うじて其の倦怠から自分自身を引立たせて居つた位だからである。やがて飯の呼鈴が、私を仕事最中に驚かした。私はガブリー夫人の前で敬意を失しない装束をしようと思つて、取るものも取りりへず、やつとのことで新らしい燕尾服を着けた。

豊富に備められた食事は、私のために態々長引かされたやうに見えた。私は葡萄酒を見分けることに於ては公平以上であつた。で、此の點に就ての私の智識を見抜いた女主人公は、私に敬意を表してシャトウ・マルゴーの一壘を抜いて、充分に友情を示した。最深の敬意を拂つて、私は、此の有名な武士的な古葡萄酒を飲んだ。其の風味と云ひ、氣を浮立たす力と云ひ、俱に凡ての讚美を超越してゐた。その温かみが靜かに私の血管の中に行渡つて、殆ど年少者のやうな生氣を私の中に充たした。今や夕空は、公園に對して魅力的な憂愁を與へ、又凡ての對象に對しては一種の神祕的な風趣を與へて居つた。その下で私は、此の高臺の上でガブリー夫人の隣りに座つて、此の光景の印象を女主人に傳へ乍ら云ひ知れぬ歡びを味つた。私は、自分のやうな空想力の缺けた男としては全く珍らしい程の快活さで談話した。愛撫的な夕方の憂愁、麵麩と葡萄酒だけでは無く、思想と情懐と信念とを以て我々を養育する此の大地の美、さうしたものを私は、少しも古文書から引用しないで、自分の心に浮び出るまゝに彼女に話した。遂にそれは私達凡てを、丁度永い日の暮方の、疲れ果てた多くの子供達のやうに、再び彼女の母の懷へ連れて歸つた。

『先生、深切な夫人は言つた、『そら、あの通り、古い塔や樹や、大空が見えるでせう。通俗な物語とか、民謡とかの中の人物が皆斯うして景色から生まれたといふことは、ほんとに自然なこ

とでずわねえ。實はね、あの向ふに、「小さな赤頭巾の通つた道かつて居るのですよ、その道を傳ふて彼女が胡挑を摘みに行つたのです。此の變化の多い、始終水蒸氣の立つて居る空を横切つて、あの小さな花車が廻つて行つたものでございませよ。又あの北側の塔は、その尖つた屋根の下へ、あの糸車の竿で「森に眠る美女」を刺し殺した糸紡ぎのお婆さんを隠したに違ひないのです。

私が彼女の美しい空想の上に想像の翅を伸ばして居つた時、ポール君は非常に強い煙草の煙をブツと吹いて、彼が水の権利争ひのことで郡役所を相手取つて起した訴訟の顛末を私に話し出した。ガブリー夫人は、冷えくする夜氣を感じたために、良人が彼女に被せてやつたシヨールの下で慄え初めた、そして私達を置き去りにして自分の部屋へ行つて了つた。その時私は、自分の部屋へ歸つて行く代りに圖書室へ行つて、稿本類の調査を続けようと決心した。ポール君の反對を物ともせず、私は、私の所謂古風な呼び方をしてゐる「書室」へ入つて、ランプの明りで仕事を始めた。

十五頁ばかり讀んだが、殆ど意味不可解とも云ふべきもので、明かに無智な輕卒な筆者の書いたものに違ひなかつた。で私は、喫煙草の箱を取出さうとして、上衣のポケットへ手を突込んだ

所が、何うしたのか、平生は奥に自然で衝動的である此の動作が、此の時に限つて私には幾分の努力と疲勞をさへ覚えしめた。だが、私は銀の箱を取り出して、そして一抓みの香高い粉を掴み出して、それをどうか、か、か、私の摩痺した鼻の下、シャツの胸の邊一ぱいに振り撒いた。私は、私の鼻が確かに失望の表情を現はしたと思ふ、何故なら其れは非常に表情の富んだ鼻だつたから。其れは私の祕密の思想を密告したことは一度や二度では無かつた、殊に、何時の場合であつたか、私が丁度自分の同僚のブリオーの前で、『ノートル・ダム・ドラグネスの記録』と、コートンズの公共圖書館で見付け出した時も、さうだつたのだ。

何たる悦ばしさぞ！ 私の小さい眼は、眼鏡の後で、實に倦怠し、實に表情無くぢつとしてゐた。所がブリオーは、悦びと誇りとに慄へてゐた私の分厚い獅子鼻を、チラと見たゞけで以て、私が何かを發見したことを感付いて了つた。そして、私の見てゐた一卷に注目し、私がそれを何處へ返したかを見て置いて、私が背を向けると早速それに跳び付いて密ツと寫し取つてから、私に悪戯をし掛けるために大急ぎでそれを世に公けにしたのであつた。所が彼の刊行が誤謬だらけであつたので、後日私は、彼の敢てした多くの間違の幾つかを批判することによつて我が意を満たした。

所で、私が途中で止した問題に歸らう。私は實の所、非常に睡氣を催して來たやうな氣かしてゐた。私は一つの早見表を見て居つたが、それは千三百十二年に僧侶のイエハン・デストーンがイーユに賣つた小舎の記述が載つて居るといふ點から見ても、興味の程が覗はれるものであつただが其の場合、その書類の如何に重要であるかといふことを理解することが出來たにも拘らず、それによつて非常に強く喚び起された注意を、其れに向けることが出來なかつた。私の兩眼は、私の意思に逆つて、絶えずテーブルの一隅に注がれて居つた。其處には學者の胸に興味を與へるやうなものは一つも無かつた。只一冊の大きな獨逸書があるだけであつた。それは豚革の表装で、縁には眞鍮の鉸が打つてあり、背には非常に分厚い紐があつた。是れは、それに挿まれてゐる木彫以外に殆ど珍重するものゝ無い編纂物の美しい一冊であつて、『マンステルの世界誌』として普ねく知られて居るものであつた。其れが今、表紙が細く明いたまゝ、背を上にして、テーブルの縁に置かれてあつたのである。

私は、どれ位の間、無意識に此の十六世紀の大冊子を瞪めてゐたかと云ふことは、自分にも分らなかつた。その時私の眼は、私のやうな想像力を缺いた者でも其れを見て非常に驚かない譯には行かないやうな、實に珍らしいものを見て、すっかり魅了されて了つた。

突嗟に私は、いつ彼女が此の部屋に入つて來たかも知らないのに、一人の小さな人間が、片方の膝を折り、片方の脚を垂れて、その本の背に腰かけて居るのを見て取つた——その姿勢は、ハイド・パークのアマゾン（女丈夫）か若しくはボア・ド・ブローニユの乗馬姿のやうであつた。彼女は如何に小さいかと云ふことは、彼女の振動かして居る足がテーブルにも届かず、彼女の着物の裾がテーブルの上に蛇のやうな線を擴げて居ることによつても明かであつた。然し其の顔と體格とは大人と少しも變つた所が無かつた。胸の脹らみと腰のあたりの丸味とは、私のやうな老學者の眼から見ても、大人であるといふことの疑ひを少しも残さなかつた。彼女は誇らしげな態度の非常に美しい人であつたと云ふことを、私は敢て附言して置かう。何故と云ふに私の圖解式の研究が、私にタイプの完成と骨相學上の特徴とを、早速理解せしむるやうに、以前からなつてゐたからである。生憎く「マンステルの世界誌」の背に腰掛けてゐた彼女の容子は、傲慢と惡戯氣とが混合したやうな表情であつた。彼女は女王のやうな風であつたが、それにしても氣まぐれな女王の風であつた。そこで私は、只彼女の眼の表情だけで、彼女はいつも非常に氣まぐれな態度で以て、何處かで大權力を握つて居つた人に違ひないと判断した。その口は傲慢で、嘲笑を含んでゐた。青い眼は、何だか不安さうな風に、彼女の美しい曲線の黒い眉の下で嘲笑して來るやう

に見えた。私は、黒い眉といふものが漸次金髪ゴールドヘアになつて行くといふことを、いつも人から聞いてゐたが、此の夫人も亦非常に金髪であつた。大體から言つて、彼女が私に與へた印象は、實に偉大なものであつた。

實際 酒瓶よりも丈の低い、——又、ポケットなどへ入れることが非常に不敬であつたかも知れないが——兎に角私の上衣のポケットに隠れてゐた筈の人間が、私に對して非常に偉大といふ觀念を與へたなど云ふと、或は奇異の感起す人があるかも知れない。だが、其の「マンステルの世界誌」に腰掛けて貴婦人の美しい姿勢の中には、實に傲然たる美しさと、調和した威嚴さがあつたのである。そして彼女は直ぐ、非常に暢々ウツクとした非常に上品な恰好を示したために、私の眼には、それが非常に偉大な人間として映つたのであつた。彼女が、私のペンの尖を憚おそうてインクの中から出て来る凡ての言葉を、前から知つて居つたことを示さうとするやうな嘲笑的な表情で、私のインク壺を調べた。その私のインク壺が彼女にとつては、その金色の模様のある紅い沓下を沓下留の所まで黒く染めることの出来る深い池であつたけれども、矢張り彼女は偉大であつて、それが彼女の快活さの中にさへ現はれて居つたといふことを、私は諸君に對つて斷言することが出来る。

彼女の衣裳は、その顔に適はしいもので、極めて華やかであつた。即ち、金と銀の錦綉の外套それから、栗鼠の毛革で縁取つた黄橙色の天鵝絨の外套、と云つたやうな身づくろひであつた。頭飾は昔の *hennin* (十五世紀に行はれて婦人 圓錐帽) やうなもので、二本の高い尖端が附いてゐて、光彩陸離たる寶石が、さながら其れを弦月のやうにキラ／＼と光らせてゐた。彼女の小さい手は一本の棒を握つてゐた。此の棒が非常に強く私の注意を惹いた、何故と云ふに私は、色々の考古學的研究から凡ての暗示——それによつて傳説や歴史の人物が有名になつて居る——を理解することを學んでゐたからである。此の智識は、私が色々の非常に疑はしい臆説に努力して居つた間にも非常に役立つものであつた。私は其の棒を仔細に見た、そして其れが、榛の木ハシの枝から切つて來たものらしいのを知つた。

『して見ると是れは妖精フェアリーの棒なのだ。』私は獨語した、『従つて、其れを持つて居る女は妖精なんだ。』

斯ういふ風に、自分の前に居つたのが何ういふ種類の人物かといふことを見抜いた私は、何となく幸福であつた。そこで私は彼女に對して町重な挨拶をしようと思つて、充分に心を集中しようとして試みた。私は白狀するが、若し私が、彼女の一族が、西歐ラテンの其れに於けるよりも、サ

クソン人やゲルマン人の生活の中でどんな役割を演じたかと云ふことに就し、もつと多く彼女と談ることが出来たなら、私に非常な満足を得たであらう。實際彼女の種族は、無邪氣な子供とか無智な田舎人とかいふもの以外には決して姿を現はさないことを永久の慣習にしてゐるにも拘らず、今其の反對に一人の老學者の前へ現はれたといふことに對して、その貴夫人に感謝の意を表しようと思ふのは、さうした談話が最も時宜に適したものに違ひないと私は思つたのである。

たとひ偶然に妖精と成るからと云つて、其れは依然として一人の女である、斯う私は獨語したして見ると、レカミエール夫人が、小さい煙突掃除夫等が彼女の姿を見ようと思つて出来るだけ大きく眼を腫つた時に、顔を眞赤にして悦んださうであるが（これはジャン・ジャック・アムピエール（十九世紀の佛國の文學批評家）の言つたのを人から聞いた話であるが）、それから推して見ると、此の「世界誌」に腰かけて居る超自然の貴婦人は、一人の老學者が如何にも物識りらしく、まるで賞牌とか印章とか、腓骨とか、或は記號のことでも話すように、彼女のことを論じてゐるのを聞いて、恐らく慥つたい媚びを感じたかも知れなかつた。所が、随分私の内氣を値する所のさうした計畫が此の時、全然問題外のものになつて了つたのである。と云ふのは、丁度此の時、「世界誌」の貴婦人が、帯にぶら下けてゐる慈善袋の中から、いつか私が見たことのあるあの一番小さな胡桃の實

を幾つか取り出し、齒の間で其の殻を噛み破つて、その殻を私の鼻柱へ擲げつけ、自分は宛ら乳を呑んでゐる赤ん坊のやうに落着き拂つて、中の實を咬ぢつてゐるのを、私は見たからである。

此の瞬間に私は、科學の尊嚴が私に命ずる所のことを成した——即ち私は沈黙を守つて居つた所が胡桃の殻が、非常に痛い擦つたさを感じしめたので、私は手を鼻の所へ當てて見た、すると驚いたことには、私の眼鏡が鼻の突端にはだかつてゐるでは無いか——それ故私は、眼鏡を通してはなく、眼鏡の上から貴婦人を見てゐたのである。是れは、何と言つても不可解なことであつた。何故と云ふに、古書を讀むのに消耗して了つた私の眼は、到底眼鏡無しでは何物をも正しく識別することが出来なかつたからである——ノロンと徳利とが直ぐ鼻先にあつても、その二つのものゝ見分けがつかなかつたのである。

私の此の鼻は、殊に其の大きさと、形ちと、色彩の點で、正しく此の妖精の注意を惹いたのである。その證據には、彼女は、私のインク壺へ飾り毛のやうに突挿してあつた驚ペンを取つて、羽の先きを私の鼻の眞上に振廻し初めたのを見ても能く分るのである。私はこれまでも、人中で、無理に若い婦人達の遊戯の仲に入れられて、椅子の背中を通して接吻するやうにと頼べたを差出されたり、不意に私の呼吸す 方向へ蠟燭を差上げて、其れを吹消すやうにと仰せつかつたりし

て、色々と無邪氣な悪戯のために嬉々として閉口させられた場合は、決して一度や二度では無かつた。だが、私自身の羽ペンで私の鼻を探ると云つたやうな、さうした氣まぐれな無遠慮な目に私を遣はした女性には、此の時まで未だ會て一人も無かつた。しかし幸ひにも私は、亡くなつた祖父の箴言を想ひ出した。婦人のやつたことであればどんなことでも赦さるべきである、又彼女等が我々に對して如何なることをしても、凡て其れを愛と看、美と見るべきであると、祖父はいつも言つてゐたのであつた。そこで私は、胡桃の殻と、ペンで探られることゝを、美及び愛として受容れ、そして私は微笑しようと思つた。否それ所ぢや無い！——私は談話をさへ思ひついた。

『マダム、』私は威厳ある町重さで言つた、『あなたが、無智な子供や田舎者の所を訪問なさらずに、あなたとお昵懇ちひさになることを非常に幸福に思つてゐる愛書家を訪問なさつたといふことは、實にお立派なことでございます。此の愛書家は又、すつと以前にあなたが、いつも、小屋に居る牝馬共の鬘の中で小鬼の團體を作つて、脂肪を掬ひ上げる桶の中からミルクを飲んだり、掻き集めた種子を大祖母達の背中からぶつ掛けたり、年寄り家族の眼の前でストーヴを撒き散らしたりすつたり、家中を亂雑と愉快とで満たしてゐたといふことは、能く知つて居ります。あなたは又、森へ出て行つて餘り夜遅くまで其處に居る戀人達に對しては、世界中の最も美しい恐怖を與へて

得意にしてゐます。けれども、少くとも三世紀前に、あなたが既に存在を晦ましてゐたことゝ私は思つてゐたのです。マダム、此の、鐵道や電信の出來た時代に、まだあなたの姿が見えるといふやうなことは、實際あり得るでせうか？ 私の門番の女は、若い時分には保母をしてゐたのですが、あなたの來歴と云ふものは少しも知りませんし、又近所の小さい子供——今でも保母に鼻を拭いて貰つてゐる——その子供も、あなたの存在を些とも認めて居りませんよ。』

『あなた自身は、それを何う思つてゐらつてゐらつしやるんです？』彼女は銀のやうな聲で叫んだ、そして氣高い小さな身體を、非常に傲然たる風に上に伸ばし乍ら、何だか其れがヒボグフ（頭裏驚にして馬）（胸を有する怪物）で、でもあるやうに、「マンステル」の世界誌の背を鞭打つてゐた。

『實は、私には解らないのです。』眼を擦り乍ら私は答へた。

著しく科學的の懷疑主義を示してゐる此の返答は、問者の上に最も悼ましき結果を及ぼした。

『シルヴェストル・ボナール先生、』と彼女は私に話しかけた、『貴方は只、年寄りの術學者に過ぎないのです。いつも私は、随分怪しいと思つてゐたのです。それよりも、股引の穴からシャツの尻尾を突出し乍ら道をぶらついでゐる一番小さい無頼漢カウチヤウの方が、貴方がたの學士會やアカデミーの、眼鏡をかけた老人達に比べれば、すつと私のことを能く知つて居りますよ。知るといふこ

とは全く何でも無いのです。想像することが萬事なのです。想像されるもの以外には何物も存在しないのです。私は架空のもので。それが詰り存在することなのです。私は斯う確信して居ります！ 私は空想されます、それで姿を現はすのです。凡てのものは、只、空想されるだけです。又、誰一人として貴方のことを空想しないところから見れば、存在しないのは貴方自身です、シルヴェストル・ボナル。私は此の世界を魅了します。私は到る處に居るのです——月光の中にも居れば、見えない泉の振動の中にも居りますし、ざわめく葉の戦ぎの中にも、朝なく、谷の草原から立ち上る白い水蒸氣の中にも、赤い茨の茂みの中にも——何處にでも居るのです！……私は見られます、私は可愛がられます、たとひ溜息を洩らすことがあつても、私の足の軽い歩調に隨いて來る者は、丁度私が枯れた葉を私語せるのと同じやうに、言ひ様の無い悦びに身を慄はせます。私は小さな幼な兒を微笑ませます。私は又、最も氣の利かない子守女に頓智を與へます。搖籃の上に恚れて、私は、遊んだり、慰めたり、寝つかせたり致します——それでも貴方は、私の存在を疑つてゐらつしやるのですね！ シルヴェストル・ボナル、貴方の暖かい上衣は驢馬の膚を被ふて居るのです！』

彼女は話を止めた。彼女のデリケートな鼻の穴は、憤怒のために脹らんだ、そして、腹立たし

さを味へて私が此の小さい人間の雄々しい憤怒を讚美してゐる間に、彼女は私のペンを、インキ壺の中へ、まるで船の櫂のやうに、あちこちと挿し廻つてゐるが、やがて突然それを私の鼻へ投げつけた。

私は顔を撫でた、そして顔中がインキだらけになつてゐるのを感じた。彼女は姿を隠した。ランプは消えて了つた。一條の月光は窓から忍び込んで、「マンステルの世界誌」の上へ上ほつて行つた。私の知らない内に非常に突然起つてゐた強い冷たい風が、私の紙やペンや、封緘紙を吹き散らして居つた。私のテーブルは、其處らぢうインキで汚れてゐた。風雨の間、私は窓を明け放つて置いたのだつた。何たる不注意だらう！

III

約束した通り私は、家事管理婦に手紙を書いて、私が無事で壯健なことを言つてやつた。けれども私は、夜中に窓を明け放つたまま、書齋の中で寝ようとしたために、風邪を引いたといふことを、彼女に知らさない様に、充分に注意を拂つた。何故なら此の善良な女は、丁度皇帝に対する議會のやうに、私に對する抗議に於て一步も假借する所が無かつたに違ひないのだ。『先生様、あ

あなたのやうなお年になると、』と彼女は確かに言ふであらう、『人間といふものは、もつと分別が無ければいけませんよ。』さうだ、彼女は、分別と云ふものが年齢と共に生じるものと信じる程單純なのだ。彼女から見れば、私だけが此の法則の例外なのだ。

私は自分の経験をガブリー夫人に秘すと云ふやうな、そんな意志は少しも無かつたので、私の見た幻影のことを見て彼女に話した。それが非常に彼女を悦ばすように思つたからであつた。

『まあ、あなたの夢は何て美しい夢ですこと、』と彼女は言つた。『そんな夢を見るのには、本當の天才が無ければありませんわねえ、』

『では、眠つて居る時 私か眞の天才なんですわね、』と、私は酬るた。

『夢見てゐらつしやる時ですわ』と彼女は答へた。『貴方は始終夢見てゐらつしやるんですもの。』

私は、ガブリー夫人が、單に私を悦ばさうと思つて、こんなことを言つたといふことは知つてゐた、だが其の言葉は、只管私の最上の感謝に値したのである、又従つて私が夫の言つた言葉を書き留いたと云ふのも、全く感謝と、最も深厚なる記憶との精神に外ならなかつた。私は其れを、死の日の来るまで繰返し／＼讀むであらう、だが私自身の外には誰も讀むことがなからう。

其後の二三日を、私はリュウアンスの書齋で稿本類の目録を完成するのに費した。所が偶とポール・ド・ガブリー君が口を迂らした一種の秘密話何かしら苦しい程の驚きを私に與へたので、私が既に始めてゐたのと全然異なつた方法、此の仕事を進めようと決心するに到つた。其の二三の言葉から見ると、多年の間酷い扱ひを受けて、其後或る銀行家——其の名前は知らないのだが——の失敗のために非常な程度まで散佚した、オノレ・ド・ガブリー氏の財産といふものは、只眞の抵當地所の形式で、勝手に何うすることも出来ない資産として、此の佛蘭西の老貴族の嗣子へ引繼がれたものであつた。

ポール君は彼の連帶相續人の同意を得て、此の文庫を賣却する決心をした、そして私は、有利な條件で其の競賣を遂行するための排列の仕事を委任されたわれであつた。所が私は、凡ての商略とか商業上の慣習とかに對しては全然無智だつたために、自分の個人的友人である、ある出版業者の助言を籍るのが第一だと考へた。で私は早速其の男に手紙を書いて、ルーアンスへ加勢に來てくれるやうに頼んでやつた。そして其の男の到着を待つて居る間に、私は帽子と杖とを取つて、此の監督教區内の方々の教會を歴訪することにした。其の中の二三の教會には、まだ正確に模寫されてゐない墓碑銘が幾分あるといふことを、私は知つてゐたのである。

そこで私は自分の宿主と別れて、巡禮に出掛けた。毎日々々、教會や墓地を探つたり、教區の坊さん達や村の公證人等を訪ねたり、旅籠屋で行商人や伯樂と一緒に飯を食つたり、拉芬他草の匂ひのする敷布の間で夜の眠りをとつたりし乍ら、私は、丸一週間の日を過ぎ、私が死者のことを考へて居る間でさへ色々の日々の仕事に従事してゐる生きた人間を観察し乍ら、靜かな然し大き喜びを味つた。だが私の研究目的の方は何うかと云ふと、私は只二三の平凡な發見をしただけで、その方の喜びも平凡な代りに、従つて衛生的で且つ少しも疲勞が無かつた。私は二三の興味ある墓誌を寫した、そして此の僅少な蒐集に對して、或る善良な坊さんから教はつた田舎料理の製法の秘決を少しばかり附加へた。

斯うした收獲を携へて私はルーアンスへ歸つた。そして私はブルジョアが自分の家へ入る時に感ずるやうな秘密の満足を抱き乍ら名譽裁判所を横切つた。是れは私の宿主の深切の賜物だつた。又私が彼等の鬪を跨いだ時に受けた印象といふものは、彼等の厚意の如何に秀美であるかと云ふことを證明して居るものであつて、到底他の如何なる論證も能く爲し得る所では無い。

私は誰にも會はずに大きな客間へ入つて行つた。巾広い葉を其處に伸ばしてゐた胡桃、若木は私の眼には舊友の如く映つた。所が其の次に私の眼に映つたもの——窓際のテーブルの上の——

は、私に非常な驚きの衝動を與へた、私は早速兩方の手で、眼鏡を鼻の上に掛け直ほさずにはゐられなかつた。それから私は、少くとも何か自分の存在の外面的な證據を掴まうと思つて氣を落ちつけた。一秒と經たない内に、私の胸の中へ、二十通りの想念が押寄せて來た——その中の最も合理的なのは、私は突然狂人になつたといふことだつた。今先き見つめてゐたものは、絶対に存在し得ないものゝやうに私は思つた、尙も又、其物を、現實に存在するものとして見ないといふことも、等しく私にとつては不可能だつた。私の驚きを誘發したものは窓際のテーブルの上にあつて、その上には大きな、どんよりした、汚點のある姿見が立つてゐた。

私は自分の姿を此の鏡に映して見た。私は敢て言ふが、私は生れて初めて完全な忘我の姿を見たのであつた。然し私は自分自身に對して適宜の斟酌をした、私は眞に恍惚たらしめる物によつて斯くまで恍惚としたといふことに對して、自分を是認した。

私の凡ての推理力が、こんな風に、驚駭する程度に於て考査しても尙且つ減らすことの出來なかつた對象物は、全く靜止の状態に於てはあがあるが、私の注意の中に飛込んで來たのだ、此の幻像の執拗と固着とは、凡ゆる幻覺をも拒否して了つた。私は、視覺に影響を及ぼすことの出來る凡ゆる精神錯亂から全く遁れた。私は思ふのに、さうした視覺の顛倒の原因と云ふものは、概ね

胃の故障に原因して居るのだ、而も、神よ感謝す！ 私は卓絶した胃を有つて居る。のみならず、視覚幻像といふものは、幻像の犠牲者そのものに影響する所の、特別な變調を伴ふのが常であつて、彼等に一種の恐怖を感ぜしめるものである。所で私は此種のものをも少しも感じなかつた。私の見た対象は、表面上こそ其れ自身不可能ではあつたが、凡て現實の自然の状態に於て私の前に現はれたのであつた。私は、其れが、長さと幅と厚さとを有ち、色彩を有つて居ること、且つ其れが陰影を投げて居ることを認識した。嗚呼！ 私は何ういふ風に其れを瞳めたか！ 涙は私の眼に溢れて來たので、私は眼鏡の硝子を拭はねばならなかつた。

最後に私は、證據をつきとめて、實際自分の眼の前にあの妖精——二三日前の晩に書齋の中で夢想して居つた、あの同じ妖精の居るのを確認せずにはゐられないのを知つた。其れは彼女だつた、彼女そのものだつた、私は其れを確言する！ 彼女はあの時と同じ子供の女王のやうな様子と、同じ誇らしげな柔かい均衡とを備へてゐた、彼女は手の中に同じ榛の木の手握り棒を握つてゐた。彼女はまた、二重に尖端のある頭巾を被つてゐた。又その長い錦爛の外袍が、彼女の小さい足のあたりに波打つてゐた。同じ顔、同じ姿だ。正しく彼女なのだ、のみならず其れに就ての有りと凡ゆる疑ひを取除くかのやうに、彼女は、甚しく「マンステルの世界誌」に似た大きな古風な書

物の背に腰掛けて居るではないか。だが彼女の不動の姿勢が、再び私を半信半疑に陥らしめた。何故といふに私は、彼女がその慈善袋から胡桃の實を取り出して、殻を私に投げ付けやしないかと心配したからである。

私は其場に立つて、手を舉げて欠伸をしてゐた時、不意にガブリー夫人の音楽的な笑ひ聲が、私の耳に響いた。

『まあ、こんなに御自分の妖精を吟味してゐらしやるのね、ボナール先生！』夫人は言つた、『では、その似像を良いとお考へなの？』

それは非常な早口で言はれた。けれども其れを聞いてゐる間にでも、私は、此の小妖精が、誰か未熟な人の手で、多大の趣味と精神とを打込んで捏ね上げられた、色付の蠟の小塑像であるといふことを識別する餘裕があつた。然し、斯う言ふ具合に論理的な説明によつて歸結點を見出すことは見出したが、尙ほも此の幻像が私の驚きを刺激することを止さ、かつた。一體何ういふ風に、又誰の手で、此の「世界誌の夫人」が、塑像としての存在を明かにするに至つたか？ 此れが私にとつて、尙ほも残されてゐる問題であつた。

ガブリー夫人の方へ振願へると、夫人が只一人で居るのでは無かつた。黒装束の若い娘が夫人

の傍に立つてゐた。彼女は大きな削口さうな、丁度フランス島の空のやうに美しい灰色をした、それと同時に無邪氣で特徴のある表情の眼を有つてゐた。幾分か細い兩腕の端には、しなやかな娘の手になるのであつた。キチンと身體に合つた羊毛の上着に包まれて居るので、彼女は細ッそりした若木の美しさを有つてゐた。彼女の大きな口は快活に語つた。一見して此の幼児が如何に私を悦ばしたかといふことは、迎も言ふことが出来なかつた！ 彼女は美しくは無かつた。だが兩の頬ぺたと頰にある三つの齧は、さながら微笑してゐるやうに見えてゐた。又飾り氣の無い無邪氣さを顯はしてゐる全體の姿は、其中に一種言ふべからざる善良さと實直さとを藏してゐた。私の凝視は、小さい塑像を若い少女に變じた。私は彼女が顔を赤らめたのを見た——一面に實にフランクに！——眞赤な色が、さながら波に送られるやうに、彼女の顔を過ぎた。

『ねえ、』と夫人は口を切つた。彼女は私の茫然とのた氣持に充分に慣れて來たので。同じ質問を二度も私に掛けようとした。『あれは、あなたの明け放しておいた窓ッ潜つてあなたに會ひに來たのと同じ婦人でせうか？ あの婦人は大變無駄でございましたが、其時あなたは本當に粗忽でした。！ 兎も角も、あなたは、あの婦人を見覚えがありました？』

『え、彼女そつくりです、』私は答へた、『書齋のテーブルの上で見たのと同じに、確かにあの窓際のテーブルの上に居るのが私に見えますよ、』

『では、若し然うだつたら、』とガブリー夫人は答へた、『あなたは其の事で咎めねばなりませんわ。第一、たとひ空想といふものを全然有つてゐないにしても、自分の言葉を使ふ人であつて見れば、御自身で何うしてそんな生き／＼とした色彩を以て御自分の夢を描くかといふことは御承知の筈です。第二には、あなたの夢を全部記憶して、それを繰返すことの出来る私です。そして最後に、私が只今あなたに御紹介しますジャーン嬢をです、此の人が私の指圖に従つて正確にあの蠟人形を拵へたのですもの。』

ガブリー夫人は、話して居つた時、若い少女の手を握つてゐた。所が突然後者は夫人を振り放して、小鳥のやうな速度で公園の中を駆け抜けようとして居つた。

『小ちやな氣狂ひさん！』ガブリー夫人は後から呼びかけた。『どうしてそんなに羞づかしがるの？ さあ歸つてらつしやい、叱つて接吻してあげるから！』

然し其れは何等の効が無かつた。怖れを成した幼女は灌木の中へ姿を消して了つた。ガブリー夫人は此の亂雑な客間の中に只一つ残つてゐた椅子に腰を下ろした。

『良人がまたジャンさんのことを貴方にお話申上げて無ければ、』と彼女は言つた、『私ほんとに驚いて了ひますわ。あの子は本當に可愛い、子でございましたね、私達は二人共、それは、愛して居りますの。さあ、お隠しにならないで正直の所を仰有つて頂戴、あの子の塑像を貴方は何うお考へになつて？』

私は、その作品が良い趣味と精神とに充ちてゐるけれども、製作者の側から見れば多少研究と實習との不足を示してゐると答へた。然し一方で私は、あの若々しい塑像が、こんな風に老人の空想の亂暴な略畫を修飾し、且つ私のやうな老ひほれの夢想をこれほど立派に塑像にしたといふことを考へて、此上なく感動させられた。

『あなたの御意見を伺ふ理由は、』とガブリー夫人は眞面目になつて答へた、『あのジャンヌといふ娘は可哀さうな孤兒だからでございますよ。あなたはあの娘が、此處にあるやうなこんな小さい塑像を作つて生計が立てゝ行けるとお考へでせうか？』

『や、そのことなら、迎も々々！』私は答へた、『又さうした事實を悲しむ理由は少しも無いと私は思ひますね。その娘が愛、心しくて惻口だとあなたは仰有いましたが、私はあなたの仰ることを能く信ずることが出来ますよ。あの娘の顔を見たゞけでもさう信ずることが出来たのです』

からね。一體、藝術家の生活といふものは、凡ての規則とか尺度を越えて働らく寛大な心を樹立したものですから、其の中には色々の感激があります。此のお子さんは感ずるやうに作られて居るのです、だから家庭の圍爐裏と思つて其の子を保護してあげなさい。眞の幸福は其處にだけ居るのでありますから。』

『でもあの娘は、持參金が些とも無いのですもの！』とガブリー夫人は答へた。それから、手を私の方へ差伸し乍ら彼女は續けた。

『あなたは私達のお友達ですわ、だからあなたには何も彼も打明けられますわねえ。實は此の子の父親といふのは銀行家でしたして、私達のお友達だったのでございます。それが途方も無い投機に手を出しましてね、そのために身を亡ぼして了つたのでございますよ。失敗しましてから其の人は、只つた二三ヶ月しか生き永らへませんでした、その失敗の爲めに、ボールからお話した筈と存じますが、私の叔父の財産が四分の三も消えて了ひました。私達のものも半分以上は失くなつて了つたのでございますよ。』

『私達は、モナコの叔父の家で冬を過ごしたことがございましたが、その間にその人と昵懇になつたのでございました。その人は冒險的な性質がございました。それが又素敵に愛嬌のある癖』

でしため！ 他人を瞞着する前に自分自身を瞞着すると云つた風でしてね。まあ畢竟、最も偉大な才能の現はれるのは、自分を惑はす能力の中でですわね、さうぢやありませんか？ こんた譯で、私達——良人と叔父と私とは、すっかり虜こぼにされて了ひました。そして非常に冒險的な目論見に對して理屈以上のお金を賭けたのでございます。でも、ボールの申します通り、チエツ！ 私達には子供がございませぬから、そんなことを心配する必要が無いのです。又私達は、自分等の信用した人が大變正直な人だといふことを知つて居りますから、何も不足は無いのでございませぬ。……貴方はその人の名前を知る必要がございませぬ。時々新聞や廣告に出た名前でございますからね——ノーエル・アレキサンダーと申すのです。その人の奥さんが大變に奇麗な方でしてね。私は只、その方の花の時代が過ぎた時分しか知らないのですけれど、それでも、以前は非常に奇麗だつたといふ、佛が残つて居りましたよ。又その方が當世風なスタイルや見えに對する趣味を有つてゐらつしやいまして、それが能く御似合ひでございました。その方が又生れつき社交上の感激が、好きでゐらつしやいましたけれど、御主人の亡くなられてからは、大變な勇氣と威嚴とをお示しになつて居りました。御主人の亡くなつてから一年して、その方が、ジャーソン一人を此世に残して遂に亡くなられました。』

『あゝ、クレマンティン！』と私は叫んだ。

こんな風に、曾て一度も想像したことのない——一寸考へただけでも魂の凡ての力を掻き亂したであらうやうな——ことを知り、最早あのクレマンティンが此世に無いといふことを聞いて、何だか偉大な沈黙に似たものが私の中へ忍び込んだ。然し乍ら、私の全身に溢れた此の感情は、決して鋭どい強い苦痛では無くて、靜かな、嚴肅な哀愁だつた。とは云へ私は一種言ふべからざる慰安の氣持を意識してゐた、そして私の思想は、突然、曾て見たことの無い高さに昂つた。

『クレマンティン、今お前は何處に居るか俺は知らない。』私は斯う獨語した。『だが、前の居る所から、今は早や歲月のために冷却した此の心臓を嗽下ろせ——だが此の血は、一度はお前のために沸き立つたことがあるのだ——そして、此の地上にあるお前の形見を凡て愛することが出来ると考へただけで、其れが今一度沸き立たないか何うか、言つて呉れ。あゝ、お前が行つて了つてから、凡てのものも行つて了つた。だが生命は不滅だ。我々が、永久に新らしくされる其の形に於て、此の生命をこそ愛しなければならぬ。其他のことは皆子供の遊びなのだ。俺自身は、凡ゆる書物を有つてゐる、だが其れは只石玉を持つて遊んでゐる赤ん坊と同じなのだ。人生の目的——あゝ其れはお前なのだ、クレマンティン、其れを俺に見せて呉れたお前なのだ。』……

ガブリー夫人は、咳き聲になつて、私を黙想から喚び醒した、

『赤ん坊は可哀さうですわ。』

『クレマンティンの娘は可哀さうです！』私は聲を張上げて言つた『斯うなるといふのは、何といふ不運でせう！ 私以外の人が其の娘に物を呉れたり持参金を遣つたりするといふことは、私の望まないことです！ いや！ クレマンティンの娘は、私以外の人から持参金を貰つてはならないのです。』

斯う言つて、私は、椅子から立ち上つたガブリー夫人に近づいて、其の右手を取つた。私は其の手を接吻した、そして其れを私の腕に置いて、言つた。

『濟みませんが、ノーエル・ファンキサングアの未亡人の墓へ、私を案内して下さいませんか。』

『何故あなたは泣いてらつしやるの？』

私はガブリー夫人が私に斯う訊いたのを耳にした。

小さいサン・チオルジー

IV

(四月十六日)

聖ドロツクトヴユースと、サン・ゼルマーン・デ・ブレーの初期の僧院長等は、過去の四十年間私を虜にしてゐた。だが私が、さうした人達の仲間入りをしに行く前に、其等の人達の傳記を書くことが出来るか何うか、それは私には分らないのだ。私が老人になつて了つてから、既う随分永い年月が経つ。去年、或日のこと、アルス橋の上で、學士會の會員である同僚は、だん々老境に入つた倦怠を私の前で嘆いて居つたことがある。

『でも、』と、サン・ビユーヴは其の男に答へた、『其れが、永い間の生活を見出して來た唯一の道だよ。』

私は此の方法でやつて來た。だからそれがどれだけの價值があるかと言ふことは能く知つて居る。その厄介なのは、人間が餘り永く生き過ぎることでは無くて、彼の周圍を過ぎて行く凡ゆ

るもの——母親とか、妻とか、友達とか、子供とか——を見ることなんだ。自然は暗い無關心を以て、是等の神聖な寶を凡て作つたり毀したりして居る、そして遂には我々は、少しも愛さなかつたことを知り、單に影を抱擁して居つたことを知るようになるのだ。然し乍ら或種の影の如何に美しい事よ！若しも人の一生を通して一つの影の如く過ぎて行つた者かありとすれば、それは確かに、私が一個の青年だつた時戀に陥つたあの若い少女——今となれば其れは詐のやうに見えるけれども——であつたのである。

羅馬の塚窖から出た或る基督教の墓碑には、呪ひの信條が刻まれてある。その全體の恐ろしい意味を、私は只時と俱に知つた。『曰く如何なる不信の者も此の墓碑を讀さば、彼は祖先の最後の者として死滅せん！』と、考古學者の權能に於て、私は多くの墓を發掘したり、屍灰を攪亂したりして、着物の切片や、金屬の裝飾品や、或は又其の灰に混ざつてゐる寶石類を蒐集した。だが私は只、敬虔とか敬神とかの感情を少しも含まない、單なる科學的好奇心で其れをしたのだ。殉教者の墓碑の上に、使徒達の最初の弟子の一人によつて刻まれたあの呪詛よ、願はくは私の上に降らざらんことを！私は、此の世界に人類の存在する限り、永く——祖先の後へ生き残ることを惧れてはならない。何故なら此世には、愛することの出来る人間が常に存在するから。

だが然し、愛の力そのものは、歳と俱に弱くなり、又漸次失はれて行く。それは丁度人間に於ける凡ての他の精力と同じことだ。實例はそれを證明する。又私を恐れしめるのは是れなのだ。而も私は、此の大なる損失を既に痛感してゐないだらうか？私は確かに其れを感じた。だが其れは、私を若返らせた處の幸福な邂逅であつた。詩人は「青春の泉」のことを言ふ。其れは存在する。我々が一步步毎に、地中から迸り上がつて居る。而も人は其れを飲まずに通り返して居る！

私の愛した娘、競争者の所へ自ら選んで結婚した娘、それも永遠の眠りの中へ、灰色の髪をして入つて了つた。私は彼女の娘を發見した——そのために、今までは全く無用のものに見えてゐた私の生活は、今再び其の目的を見出し、存在の理由を見出すに至つた。

今日私は、プロヴウンスで人々が言つて居る通り「日を浴び」た。私はルクセンブルグの高臺の上で、マルゲレット・ド・ナダールの銅像の麓で日向ほこをした。新酒のやうに人を酔はしめる春の日光であつた。私は腰を下ろして夢想した。私の思想は、ビール瓶から泡が飛ぶやうに、私の頭から逃げて行くのだ。其等は軽い、そして其のシュー〜云ふ音は私を面白がらせる。私は夢見る。此種の樂しみは、三十卷の著書を公けにし且つ二十五年の歲月の間「古文書」に貢献

して来た一老翁には確かに許さるべきものである。私は、自分にとつて其れを爲す能力のあつた
だけ、それだけ満足に自分の仕事を完成したと思ひ、且つ自然が私に賦與した凡庸な才能をば
遺憾無き程度にまで利用したことを思ふて、満足する。私の努力は凡て無駄では無かつた。又私
は自分の中庸な方法に於て、此の動搖せる世紀の尊敬を保有するであらう所の、歴史的仕事の復
興に貢献して来た。確かに私は、佛蘭西に對して其の文學上の古代を示したあの十人乃至十二人
の人達の中へ算へられるであらう。私が出版したゴーチュー・ド・コインシーの詩集は思慮ある系
統を採用したもので、且つ一時代を作つた。私が此の當然受くべき債務を、自分自身に命ずるの
は、一年の嚴肅な平靜に於てある、又私の胸を能く知り給ふ神は、自惚と虚榮とが此の正しい
自己審判を何うするかといふことを知り給ふ。

だか私は疲れて居る。眼は朦朧とし、眼は慄える。そして私はホーマーの老人達の中に自分の
影像を見る——彼等の弱さは彼等を戦ひから除いた、そして彼等は城塞の上に坐り乍ら、草叢の
中の蟋蟀のやうに聲を張り上げてゐる。

こんな風に私の思想が彷徨して居つた時、三人の青年が私の近くに腰をおろした。私は此の三
人の青年が、ラフォンテーヌの猿のやうに、各々三通りの境遇に於てやつて来たか何うかを知ら

ない、然し此の三人が、確かに十二の椅子のある場所に身を顯はしたのだ。私は彼等に注目する
ことを愉快に思つた、これは彼等が非常に目ほしい外觀をして居つたといふためでは無い、青年
に特有なあの勇氣ある快活な態度を彼等の中に認めためである。彼等は學校の歸りだつた。私
はそのことを、彼等が書物を持つて居つたといふことよりも、彼等の顔貌の特徴から見て確信し
た。精神的な事柄に多忙な者は皆、彼等の凡てに共通な漠然たる或物によつて、早速認識される
ことが出来る。私は若い人々を非常に好きである、私をして自分の大學時代を驚くべくまざぐ
と想出させるやうな一種の忌はしい粗暴な態度があるにも拘らず、彼等は私を悦ばすのである。
だが彼等は、私達が當時やつたやうな、髪を長くしたり天鷲絨の胸衣カサレットを着たりせず、又私達が常
にしたやうに、鬍髯を持つて歩るき廻つたりもせず、或は又いつも私達のしたやうに、『地獄と呪
詛！』などは怒鳴らなかつた。彼等は全然普通の服裝をしてゐた。服裝と云ひ、言葉と云ひ、
何等中世紀を想はすものは一つも無かつた。私は又、彼等が、此の高臺を通つて行く婦人に對し
て著しき注意を拂つたといふこと、及び或る婦人達に對しては非常に興奮した言葉を以て賞讃を
現はしたといふことを附加へなければならぬ。然し彼等の感想は、此の問題に就ても、決して
私を席に居堪らなくさせる性質のものでは無かつた。のみならず、青春が研究の時期である以上

は、其の悦樂に對する權利を、其れが有つて居ると私は思ふ。

その中の一人、三人の中で一番丈の低い、一番色の黒いのが、私は忘れたか何とか素敵な冗談を言ひ乍ら、多少自慢話のやうな調子で次の如く叫んだ。

『僕をして言はしむればだね！ 僕等のやうな生物學者だけが、生きて居る物に就て我身を捧げる資格があるのだ。君なんかは、ねえゲリス、只過去に生きて居るに過ぎないのだよ——君の仲間の記録者や古文學の連中は皆同じさ——寧ろ君なんかは、向うにある石の女に嚙ぢりつく方がましと云ふものだ、あれは君の同時代人だからね。』

斯う言つて彼は「古代佛蘭西の貴女達」の彫像を指差した。それは凡て眞白で、此の高臺の樹々の下に半圓形を作つて聳えてゐた。此の冗談は、それだけとしては詰らないものであるが、あのゲリスと呼ばれた青年が「古典學校」の生徒であるといふことを、私に知らしめたのである。其後の會話から私は、その隣りに居る金髪で、透き通るほど蒼白い、無口に、諷刺的なのが、ブールミエールと云つて、同じく學友であることを知ることが出来た。ゲリスと未來の醫學博士（やがて其れに成ることを私は望むが）とは非常な空想と活氣とを以て俱に語つてゐた。そして空想の高潮に達した時は、彼等はお互に諧謔を交へて、眞に頓智に富んだ人々特有の態度——即ち

恐ろしく荒唐無稽な口調で、冗談を言ひ合つた。彼等は只管、最も奇怪な性質の逆説（インヴェルシオン）を支持することを許しだといふことは、強ち私が茲に言ふ必要が無いと思ふ。彼等は、出来るだけ面白可笑しくするために、凡ゆる空想の力を使い、又常識に反對なことを主張するために凡ゆる論理の力を用ゐてゐた。彼等のために、凡てが好都合であれ！ 私は、餘りに常識的な青年を見ることを好まない。

醫學生は、ブールミエールが手に持つてゐた書物の表題をチラツと見てから、叫んだ。

『何だ！——君はミシュレー（註、歴史家に）を讀むのかい——君は？』

『うん、』とブールミエールは非帶に嚴肅に答へた、『僕は小説が好きなんだ。』

その美しい體格と、おごそかな身振りと、機敏な智慧とを以て二人を見下ろしたゲリスは、書物を取上げて慌しく二三頁翻してから言つた。

『ミシュレーは憐れみの感情に對しては常に大きな愛を抱いて居つた。彼は九月の虐殺の中へ（註、一七九二年九月二日）三日の巴里の虐殺を云ふ』 *l'insenserie* を披歴したあのやさしいメイラードに對して實に美しい涙

を注いでゐるでは無いか。だが感情の優しさといふものは狂暴を導くものだから、彼は早速、犠牲者に對して狂暴になつて居る。それは奈何とも防ぐ方法は無いのだ。それは時代のセンチメン

タリチイだからな。刺客は同情されるが、犠牲者は却つた許し難いものと考へられるやうになるのだ。ミシュレーは、其晩年の態度に於ては、嘗てよりも遙かにミシュレーだよ。その中には常識なんか一つも無い、只驚嘆すべきのみだ！ 藝術でも無ければ科学でも無い、又批評でも無ければ物語でも無い。たゞ彼が一度も解明しようと思つたことさへ無い色々な事柄の上の、狂暴であり、力無き呪咀であり、癲癇の發作であるのだ。子供らしい叫びだ——*envies de femme Grosse*だ！（女の嫉妬だ）——一つの型だよ、ねえ諸君！——纏つた言葉なんか一つも無いのさ！ 全く驚嘆に値する！』

斯う言つて彼は、その本を同僚に返した。『これは面白い狂氣だ、』と私は胸の中で考へた。『又、見掛け程は常識が全然無いわけでも無さうだ。此の青年は、只遊んでゐるだけだが、胴甲の缺點には鋭く觸れたことを言つたつけ。』

けれどもプロヴァンスの學生は、歴史と言ふものが全く美辭學に對する蔑しむべき運動であつたといふことを絶叫した。彼の言に依れば、唯一の眞の歴史といふものは人間の博物學であつたとして、ミシエレーは、ルイ十四世の瘦管と接觸して居つた時分は正しい道に居つたが、その後殆ど直ぐに元の轍へ落ち込んだといふのであつた。

斯うした正しい意見を吐いてから、此の若い生理學者は、今しも通りかゝつた一隊の同僚に加はるために立去つた。二人の記録者は、*Enu Paradis-aux-Maraix*（註、巴里郊外の市區の名）から随分遠い公園の近邊には餘り通曉してゐないと見えて、後に残つた、そして彼等の研究に就て喋り初めた。既に三年級を卒へて居るゲリスは、青年の熱情を以て委細に論述した問題に就ての一論文を書く準備中であつた。實際其の主題は實に恰好の主題であると私は考へた、殊に私は最近、自分で其の主題の著しい部分を論じようと考へて居つた位だから、それは「*Monasticum Galicanum*」（註、僧院といふのであつた。此の若き學者（私は豫言として此の名を彼に與へる）は其の論文として千六百九十年頃に作られた凡ゆる彫版を論述しようと思つて居つたのである。これは、若しもあの許すべからざる妨害——殆ど豫見しがたく而も避けることの出来ない——さへ無かつたなら、夙にドム・ミケル・ゼルマーンが印行して居つた筈のものであつた。けれども、ドム・ミケル・ゼルマーンは自分の寫本を完全のまま、而も良好な状態に残して死んだのだ。私は自分の物を以てそれだけのことが出来るだらうか？——だか是れは目下の問題では無い。私の察することの出来る範圍では、ゲリス君は只、ドム・ミケル・ゼルマーンの卑しい彫版職工の描いた各僧院に對して簡單な考古學的注意を捧げようと思つて居るのである。

彼の友達は彼に向つて、彼が此の主題に關係ある凡ゆる稿本や印刷された文獻に通曉したか何うかを訊ねた。私が思はず耳を聳てたのは此の時であつた。最初の内彼等は根本の出據に就て語つた。私は白狀するが、彼等は無數の忌はしい駄洒落を連發したにも拘らず、實に申分の無い態度で其れを語つた。次に彼等は、此の問題に就ての現代の諸研究のことを話し初めた。

『君は、クーラジオドの批評を讀んだことがあるかい？』とブールミエールは訊ねた。

『素敵だ！』私は胸の中で考へた。

『あ、』ゲリスは答へて、『實に正確だね。』

『ぢや、』とブールミエールは言つた、『タミセー・ド・ラーロークの論文を讀んだかい、『Revue des Questions Historiques』に載つた、？』

『素敵だ！』私は胸の内考へた。これで二度目である。

『あ、』ゲリスは答へた、『あれは種々の事實に充ちて居る。』……

『シルヴェストル・ボナールの書いた「Tableau des Abayes Benedictines en 1600」といふのを讀んだかい。』とブールミエールは言つた。

『素敵だ！』私は獨語した。三度目である。

『Ma foi! (註、誓つて言ふ感嘆詞) 讀むものか!』ゲリスは答へた、『ボナールは大馬鹿だよ!』首を廻はした時、私は、日影が既に私の座つて居る場所まで曳いて居るのを見てとつた。だんく寒くなつて來た。そして私は、只あの二人の青二才の生意氣口を聽かうとして、儂麻質斯ワヨイマスなる危険を冒してまで、いつまでも其處に腰掛けてゐたことが、如何に馬鹿けてゐたかといふことを胸の中で考へた!

『よし! よし!』私は起ち上り乍ら獨語した、『此の饒舌な雜子に彼の論文を書かせるがいに、そして其れを主張させるがいののだ! 今に彼奴は俺の同僚のクイシエラツトか或は又學校で誰か他の教授を見出して、どれ程自分が無智であつたかを知る時が來るだらう! 自分は彼奴を一個の賤民に過ぎないものと思ふ。又實際、さう考へるからには、今先き彼奴がミシユレーに就て言つたことは全然許し難いことだ、不埒なことだ、老師のことを、あんな風に話すといふのは天才に飽いて居るのだ! たゞ言語同斷といふより外は無い!』

『テレーズ、俺の新らしい帽と、一番良いフロック・コートとを呉れ、それから銀の頭のついた杖と。』

だが、テレーズは、木炭の袋のやうに耳が遠く、裁判官のやうに悠長である。歳月が彼女をこんなにしたのだ。一番悪いことには、彼女は自分で、能く聞くことも能く歩き廻ることが出来ると思つて居るのである。又、六十年間の正しい家庭生活を誇りにしてゐるために、最も周到な専制主義を以て老主人に仕へるのである。

『俺はお前に何と言つたかね!』……斯う言つても彼女は私の銀の頭のついた杖を渡さうとはしないのである。私がそれを失くすかも知れないといふ懸念のためなのだ! 成る程私は屢々、蝙蝠傘やステッキを、乗合馬車の中へ忘れたり、本屋へ置忘れたりしたのは事實である。だが今日に限つて私が、此の古い杖を特出さうと思つたのには特別な理由があるのだ。その銀の頭には、ドン・キホーテが槍を構へて風車に突貫しようとする所に、サンチヨ・パンザが兩腕を高く上げて、無益にも其れを思ひ止まらせようと嘆願して居る所が彫りつけられてあるのである。此の杖は、全く私の叔父ヴィクトル大尉の遺産として私に傳つたものに外ならないのであるが、叔父は、其の存命中、サンチヨ・パンザに似て居るよりも餘ッ程ドン・キホーテに似た所があつたの

だ。叔父は又、大抵の人が其れを恐れるのと同じ程度に、擲るといふことが好きだつた。

三十年の間私は、記念すべき訪問か或は儀式ばつた訪問をする場合にはいつも、此の杖を携へる習慣になつてゐた。そして此の二人の騎士と従者との姿は、私に靈感と企畫とを與へた。私は空想の中で、此の二人の物言つて居るのを聞くことが出来るのだ。ドン・キホーテは言ふ、

『大事に就ては能く考へろ。そして此の思想が此の世の中の唯一の本體であることを知れ。汝の體軀の上へ「自然」を捧げよ、そして全宇宙をして、汝自身のヒロイックな精神の反映以上のものと爲す勿れ。名譽のための戦ひ、只是れのみは人間にとつて價値あるものだ! 若し傷を受けようとなることがあつたら、慈愛の露の如く汝の血を流し、そして微笑せよ。』

すると、サンチヨ・パンザは私に向つて答へて言ふ、

『友よ、天が汝を作つて其のまゝに居れ! 王侯の厨房で烙られる凡ゆる鹿^{カモ}よりも、寧ろ汝の袋の中で堅く乾いて了つた麵麩の屑を取れ。汝の主人に眼従せよ、たとひ其れが賢者であらうと愚者であらうと。そして汝の頭を餘り多くの無用な事柄のために煩はす勿れ。打擲を怖れよ、危険を探すことは、眞に神を試みることだ!』と。

たとひ此の無敵の騎士と比類無き従者とが、只私の此の杖の上に刻まれて居るに過ぎないけれ

ども、彼等は私の胸の良心にとつては實在の人物である。私達の誰しもの中に、ドン・キホーテとサンチヨ・バンザとが住んでゐて、我々は交る／＼此の二人の言葉を聴くのだ。又、サンチヨは最も我々を説教するけれども、我々が尊敬せずに居られなくなるのはドン・キホーテなのだ。……だが、此の老耄おきなに一休みを與へよ！——そしてガブリー夫人に會ひに行つて、日々の些細な生活よりも遙かに重要な事柄を聞かうでは無いか……

(同じ口)

行つて見ると、ガブリー夫人は黒裝束を着けて、手袋のボタンを箝めてゐる所だつた。

『わたし、支度が出来て居りますよ、』彼女は言つた。

支度！——私はいつても、どんな場合でも彼女が斯うして厚意を示すのを知つてゐた。

その時散歩に出て居つた彼女の良人の、良き健康に就て二三の挨拶を済ませてから、私達は階段を下りて馬車に乗り込んだ。

沈黙を破ることによつて如何なる祕密の影響が消散するかを私は氣遣ふてゐたか、それは私に

も分らない。兎に角私達は一語も交へないで、十字碑とか、記念塔とか、悲しい買手を待顔なる埋葬の花環などを眺め乍ら、遁走するやうな驅走をつゞけた。

馬車は遂に世界の果てまで来て、上に希望の言葉を彫りつけてある門の前で止まつた。

『隨いてゐらつしやいよ、』とガブリー夫人が言つた。私は彼女の丈の高いことを、此の時初めて氣付いた。彼女は最初扁柏樹サイプレスの並木道の下を通つて、それから墓標の間を縫うた非常に狭い小道を取つた。最後に、平たい扁板岩の前まで来て立ち止つて、私に、

『さあ此處です』と、彼女は言つた。

彼女は跪ひざまづいた。私は此のクリスチャンの婦人が、上衣の襷を自分の周圍に擴がり放題にしたまゝ跪ひざまいて居る、その美しい輕妙な態度に對して眼を時てずには居られなかつた。随分以前に私は、或る晩、巴里の荒れ果てた教會で二人の美しい波蘭の追放人を見たことがあるが、それを除けば、未だ曾て、こんなに露あき出しに、こんなに平氣に跪ひざまづいて居る婦人を見たことは一度もなかつた。

此の肖像すがたは閃光のやうに消え去つた。と同時に私ほ只、その上にクレマンティンの名の刻まれた斜めの石だけを見たのであつた。其の時私の感じたものは、只豊富な音樂の響きのみが其の思

想を傳達することが出来るといふやうな、實に深刻な、而も漠然たるものであつた。私は只、神の妙音が、私の古びた胸の中で美音を奏して居るのを聞いてゐるやうな気がした。埋葬歌の嚴やかな諧調が、其處で、戀の歌の和らがいメロディと交錯して居るやうに見えた。何故なら私の魂は、現在の重々しい悲しみと過去の親しい美とを、一つの感情に混合したから。

私達が、ガブリー夫人が起ち上るまでに随分長い間クレマンチンの墓の所に居つたか何うか、それは私には分らない。私達はお互に一つも口を利かないで、再び墓地を横切つて行つた。只私達が、再び生者の中に来たことを知つた時、初めて口が利けるのを感じた。

『あすこで、あなたの後へ随いて行きました時、』と、私はガブリー夫人に言つた、私は、不可思議な生と死の界で私達が會ふと言はれてゐるあの天使達のことを考へずには居られませんでしたよ、あなたが案内して下さつたあの墓碑ですが、實は私はあの墓碑のことは何も知らないのです——その下に眠つて居る女のことは些とも、いや殆んど知らないと同じやうに——ですが、あの墓碑が、私の生涯に嘗て無い情緒を齎らしましたよ、而も其れが、丁度暗い道の上を照らしてゐる何かの光りのやうに、あの物憂い生活の中に見えたのです。その光りが、宛ら延長した旅のやうに、遠くくと遠ざかつて行きます、言はゞ私は今、最後の阪道の底へ着いたやうなものな

んです。然し、それにも拘らず、私が後ろを顧る度毎に、その光りが前のやうに赫々と輝いて居るのを見るのです。

『ねえ奥きん、あなたの知つてゐらつしやるクレマンチンは、既に髪が灰色になつてからの妻として又母親としてのクレマンチンです。私がいつも見るやうな彼女を、到底あなたは想像することも出来ませんよ、全体がピンク色と白との若い美しい娘を。親愛なるマダム、あなたは御深切にも私の案内役をつとめて下さいました、だから私は、あなたが伴れて行つて下さつたあの墓碑を見た時、どんな感情が私の胸に浮んだかを、あなたに是非申上げねばなりません。色々の追憶が私の上へ押寄せて來ます。私は、自分といふ人間が、丁度杖を揺ぶることによつて小鳥の巢の世界を醒ますあの古い、苔蒸した、瘤だらけの櫛の氣のやうな氣がしますよ。只悲しいことには、私の小鳥の歌ふ歌は、世界のやうに古いもので、私自身以外の人を些とも樂しますことが出来ないのです。』

『あなたの思ひ出をお話して頂戴、』とガブリー夫人は言つた、『あなたの著書は、迎も私には讀めませんの、只學者の人達のためにお書きなされたものでもわたし、貴方のお相手してお話を承るのが大變好きでございますのよ、貴方は日常生活の極く普通のことに対して、何う

して興味を興へるかといふことを御存じでゐらつしやいますものね。それに貴方は、丁度年寄りの女に話すやうな具合に私にお話なさいますわねえ。實は今朝もね、私、自分の髪の中に白髪を三筋見つけましたの。』

『御心配なさらずに打捨つてお置きなさればいゝのです。』と私は答へた。『時といふものは、たゞ其れを靜かに受容れる者にのみ、靜かに振舞ふのです。で、今から幾年か経つて、あなたがその黒い髪紐の下に銀のやうな總をお有ちになる時分になると、あなたは又新しい美で被はれるのです。その美は、生々しさでは劣つてゐても、以前と較べて遙かに感動的なものです。又あなたの御主人にしても、あなたが結婚前にお贈りになつて御主人が其れを神聖なものとして鏡のついた小箱に保存さたてゐられるあの黒髪を讚美されたと同じやうに、今度はあなたの灰色の束髪を讚美なさるに違ひありませんよ。……しかし、此の並木街は廣くて大變靜かです。ね。歩るき乍ら氣樂に話が出来ると云ふものです。で、先づ第一に、何ういふ風にして最初私が、クレマンチンの父親と知り合ひになつたかといふことを御話いたしませう。然し、何か目立つやうなことや、珍らしいことなんかを期待なさつては不可ませんよ。あなたは大に欺されることになりますから。』

『ムシユード・ド・レッセーは、いつもアベヌ・ド・オプサーヴエトアールにある古ぼけた家の二階に住んで居りました。前面が漆喰で固めて、そこへ昔の半身像を飾つた家でした、それへ大きな、圓ひの無い庭が附屬して居りました。此の家の正面と庭とが、私の少年の眼に映つた最初のものでしたのです。又無論それが、最後のものとなるでせう——「避け難い日」の來た時に、矢張り私は閉ぢた眼瞼の中からそれを見ることとせう。何しろ私の呱呱の聲を擧げたのがその家ですから。又私が遊んで居る時、此の古い宇宙の微分子を感じたり知つたりすることを初めて覺へたのは、あの庭の中でゝしたからね。不可思議な時！——神聖な時！——拵へたばかりの全然新しい魂が初めて此の世界を發見し、そして其れが自己のために斯うした慈愛に充ちた光明と、さうした神秘的な魅力とを假定したやうに見えるではありませんか！ 而も、奥さん、實際これは、宇宙そのものが只我々の魂の反映に過ぎないからなのです。』

『私の母は、自體の構造が、非常に都合よく出來た人でした。朝は小鳥のやうに太陽と共に起きました。而已ならず、家庭内の勞働から見ても、母性本能から言つても、間斷なく歌はうとする欲望から言つても、又一種の不寐な美から見ても、母自身は小鳥に能く似て居つたのです。子供乍らも私は、さうしたものの、魅力を非常に能く感ずることが出來ました。母は家の魂でした。』

そして家の中を、彼女の秩序的な愉快な活動で一ぱいにしました。父は、母が活潑なものと同じ程度に悠長でした。父の温和な顔、時々其の上に漂ふた皮肉な微笑、さうしたものを私はあり、と思ひ出すことが出来ますよ。父は活動的な生活に、すっかり疲れましたが、自分では其の疲れを愛してゐました。そして火の傍で、大きな肘掛椅子に坐つて、朝から晩まで讀書するのを常としてゐました。私が愛書癖を受嗣いだのは全く父からなんです。父の書齋に *Maria* (註、十八世紀西の公法學者) が一冊と *Jayna* (註、十八世紀の佛蘭西の歴史家) とかございますが、それなどは初めから終りまで父の手で註が入つて居ります。しかし實際的なものだと、たとひ其れがどんなものであつても、其れに對して父に興味を有たさうとするのは、全然無駄でした。若し母が、凡ゆる種類の寛大な瑣々たる計略を以て、父を其の退隱からおびき出さうとする様なことがあると、屹度父は、弱い性格の武器である所の、あの頑とした温順さを以て、只、首を振るだけでした。こんな風に、彼はいつも此の哀れな女には、ほとく惱まされて居りました。母は、父の冥想的な睿智の限界内へは、些とも立入ることが出来ないし、日々の生活の本務とか毎時間の愉快な労働とかの以外は、生活の何物をも理解することが出来なかつたのです。母は父を病人と思つてゐたのです、そして其の病氣が一層重くなつて行きつゝあるのを心配してゐました。けれども父の冷淡には、別な原因があつ

たのです。

『父が海軍省へ入つて、ドクレー氏の下で勤めることになつた時、早くも高い管理の才能を示しました。その當時の海軍省には、幾らでも活動の餘地があつたのです。そして千八百〇五年に、父は第二管區の長官に任命されました。その同じ年に、皇帝陛下は彼に命じて、英國海軍の編制に就ての報告を作らせることになりました。大臣を経て、多分以前から彼に眼を注いでゐられたのです。所が此の仕事は、筆者自身でも氣が付かないような、實に廣汎な哲學的精神を反映して居るものでしたが、その完成したのは、やつと千八百〇七年になつてからでした。——トラフワルガルでヴァイレニユーヴ提督が敗北してから十八ヶ月許り経つてからだつたのです。ナポレオンは、あの不運な日から以後、自分の面前で船といふ言葉、發せられるを聞くことが何よりも嫌ひだつたものですから、此の報告書を二三頁眼を通したと思ふと、憤然として其れを火の中へ投げ付け、「言葉！——言葉！ 余はいつも、冥想法を憎むと言つて居るでは無いか」と叫びました。何でも其時、皇帝はその書類を靴の踵で踏みつけて火に投じた程、烈しく怒つたといふことを、私父は後日になつてから聞いたさうです。兎に角どんな場合でも、非常に苛々した時に靴の踵が焦げるまで足で火を踏みつけるのか、ナポレオンの癖だつたのです。父は此の恥辱を

全然挽回するには到りませんでした。そんな風で、改正に對する凡ゆる彼の努力が水泡に歸したといふことが、後年に至つて彼の上に来た「無情」の原因となつたのは確かです。所が其のナポレオンが、エルバから歸つてから彼を呼び寄せまして、艦隊に對する自由な愛國的な告示と宣言書とを、幾つか作製するやうにと命じました。ワーテルローの戦といふものは、私の父を驚かしたといふよりも寧ろ憂鬱にさせた事件で、其れが濟んでから父は退職して、私生活に入つたのです、そして——彼のことを、ジャコビン黨(註、當時の佛蘭西の極端な民主主義者)であるとか *Invain-Berand* であるとか一般に斷言してゐるやうな事實を除けば——誰しも親密な言葉で接觸することの出来ぬやうな種類の人達とは、決して干係を結びませんでした。私の母の長兄である、陸軍大尉のヴィクトル・ヌルデンといふのは——千八百十四年に半給下附となつて退職し、其の翌年解隊になつた人ですが——態度が悪るかつたために境遇を一層悪くしましてね、そこへ帝國の没落がやつて来て、私の父を其の中へ惹込んだわけだったので、ヴィクトル大尉はいつも、カフェーや、ブルボン家(註、佛蘭西の王族)が佛蘭西の國をコサツク人に賣つたと謂はれて居るあの公共舞踏會などへ出掛けたり、柄の所が非常に彎曲してゐるために其れの投げた影が皇帝の影繪を作るやうな散歩用のス

チツキを、實に氣取つた風に持ち廻つたりするのを常として居つたのです。

『あなたが、シャーレーの手に成る何かの石版畫を御覽になつたことの無い以上、ねえ奥さん、私のヴィクトル叔父の姿を到底想像に描くことが出来ませんよ。何しろ當時の叔父と來たら飾紐のある上衣に身を裝ひ、胸には名譽十字章を下け、ボタンの穴には、薔薇の花束を挿し込んで、彼れ獨特の恐ろしく優美な態度で以て、テュイレリーの公園を闊歩して廻つたのですからね。

『こんな風ですから、怠惰と放恣とが、彼の政治的情熱の野卑な無分別を著しく強めて了ひました。彼は、*Quotidien* (註、毎新聞の意)とか *Drapeau Blanc* (註、白旗の意)とかを讀んで居る人に偶然出喰はすようなことがあると、いつも其の人達を罵つて、決闘を挑むのを常として居りました。そんなことで彼は、決闘で十六歳の少年を傷付けると云つたやうな苦痛と耻辱とを味はつたこともありました。詰る所、叔父は、良い教育のある人には非常に反對だつたのですね。で、彼が一年中の祝福日毎に私達の家へ朝食を食べに來るにつれて、彼の惡い評判が私達の一家族に結付くやうになつて了ひました。氣の毒な私の父は、此のお客のおめかしには酷く困まつて居りました。然し父は非常に善人だつたものですから、一度も其れを口に出して言つたことも無く、永久に自分の

家の自由を大尉に與へて居りました。然し大尉は、そのことのために父を輕蔑してゐるだけだったのです。

「今お話したことは皆、後日私が話して聞かされたことなのです。然し今言つたやうな時分、叔父の大尉は、その熱烈な尊敬心で私を満たしました、そして私は、將來何とかして叔父みたいになつて見ようと自分に誓つたものでした。斯ういふ風なわけで、或る晴れた朝私は、其の眞似を初めようと思つて、兩臂を張つて、騎兵のやうに號令したこともございました。すると、私の秀れた母は早速私の耳を平手でピシヤリと打ちましてね、その爲めに半分ほど氣絶したまゝになつて、暫くは泣き出すことさへ出来ませんでした。私は今でも、あの黄いユトレヒトの天鵝絨で蔽れた古い肘掛椅子を見ることが出来ますが、此の椅子の後ろで、あの日は、止めど無く涙を流して泣いてゐたものです。

『當時の私は非常に小さい少年だったので、或る朝父は、いつもの習慣で、私を膝の上に抱上げ乍ら、少し許り皮肉な微笑を以て私に微笑しました。それは父の永久に溫順な態度に對して一種の峻烈さを附與する微笑だつたのです。私が父の長い白髪を弄び乍ら其の膝の上に坐つた時、何だか私に意味の能く解らない、その實非常に私を面白がらせたことを話してくれました——尤

もそれが私にとつては神秘的なものだつたといふ單なる理由しか無かつたのです。どうも確かとは云へませんが、其の朝父は、歌によつて、小さいキーヴェト王の話をして呉れたらしいのですね。その最中に、突然大きな爆聲が聞えたと思ふと、窓がガタ／＼鳴りました。父は私を靜かに彼の足元の床へ下ろして、顔へる兩腰を變な恰好に伸ばしました。父の顔は、見る／＼内に、元氣無く、眞蒼になつて來て、眼は殊更大きくなつたやうに見えました。そして物を言はうとしましたが、齒がカチ／＼言つてゐただけでした。遂に父は、「彼は撃られた！」と、咳くやうに申しました。父が何のことを言つたのか、私には分りませんでした。只漠然たる恐怖だけを覺えました。所が、後が聞いて見ると、父は其時ネー將軍のことを言つたのでした。ネー將軍は、私達の家傍の空地を取圍んでゐる壁の下で、千八百十五年の十二月七日に斃れたのですからね。

『丁度其の時分のことですが、時々私は、階段の所で、一人の老人（いや、恐らく老人と云ふ程ではありませんでしたが）に出喰はすことがございました。恐ろしく快活に光つてゐる小さな黒い眼をして、表情に乏しい淺黒い色の顔をした人でした。其の人が、何だか私の眼には、生きた人のやうに見えないのです——いや、少くとも外の人々が生きてゐるやうな風には生きてゐるとは思へないのでした。私はその以前に一度父に連れられてデノン氏を訪問した時、其の邸宅で、

埃及から持つて来た木乃伊を見たことがございました。だものですから、實際私は、其のデノン氏の木乃伊が、誰も見てゐない時起き上がりつてソツと其の鍍金した箱を抜け出して、褐色の上着を着、髪粉をつけた假髪を被つて、すっかりムシュー・ド・レッサーに成り済ましたものと信じ込みました。で、今日でも私は、無論此の見解を何等の根據の無いものとして否定しますが、一面に於て私は、ムシュー・ド・レッサーが、あのデノン氏の木乃伊に實に能く酷似して居つたといふことを告白せずには居られないのです。

『實際、ムシュー・ド・レッサーは小柄なセントルマンで、又偉大な哲學者だつたのです。マーブルやルツソーの弟子として彼は、何等の偏見の無い人間であるといふことを誇つて居りましたが、此の自尊心そのものが既に、非常に大きな偏見なんですよ。』

『彼は熱狂といふことを憎悪すると公言してゐましたが、その實自分自身は、寛容の點では實に熱狂的な人だつたのです。私は、過ぎ去つた時代の性格ばかりをお話して居りますが、ねえ奥さん、到底私は、あなたに理解して頂けないかと思ひますし、又迎もあなたの興味を惹くことも出来ないと思ひますよ。ほんとに昔の話です！ しかし茲で私は、能きだけ簡略にお話致します。尙又私は何一つ興味あることをあなたにお約束しませんでしたし、又あなたにしましても、』

シルヴェストル・ボナールの生涯に於ての目立つた冒險談を聴かうとは豫期し得なかつたのですから。』

ガブリー夫人は、話をつゞけるように私を勵ました、で私は再び初めた。

『ムシュー・ド・レッサーは男に對しては無愛想で、婦人方には慇懃でした。彼はいつも私の母の手に接吻しました。母には、共和政體と帝政との慣習が、さうした慇懃さに慣れてゐなかつたのです。彼の中に私は、ルイ十六世の時代を感じました。ムシュー・ド・レッサーは地理學者でした實際此の地球の表面に専ら傾倒する點で、彼れ以上の自負を示した人は一人も無いと私は信じて居ります。舊制度の下に彼は哲學的耕作を企てましたが、そのために自分の所有地を最後の一坪になるまで蕩盡して了ひました。彼が一尺四方の自分の地面を我が物にするのを止めた時が、つまり全地球を所有した時だつたのです。そして、多くの旅行者の談話を基礎として恐ろしく澤山な地圖を作り上げました。しかし『百科全書』の眞髓のために精神的に育てられて来た時、彼は單に人類を、それ程多くの度、分、秒の經緯度の中に區劃することを以て満足しませんでした。嗚呼！ 彼は又人類の幸福の問題に一身を捧げたのです。奥さん、一體人類の幸福といふことに就て最、我身を捧げた人々は、實はその隣人を最も悲惨なものにした人々だといふことは注目に

値することです。ダランペールよりも幾何學者であり、ジャン・ジャックよりも哲學者だつた彼は、又、ルイ十八世よりも王黨主義者だつたのです。けれども國王に對する彼の愛は、皇帝に對する憎惡に比べれば言ふに足らないものでした。彼は最初の執政官(註、ナポレオンを指す)に反抗して立つたジョージの陰謀に加はりました。けれども彼は告發狀の構文の中では、連累者として加へられてゐませんでした。不問に付せられたのか、輕視されたのか、何方かだつたのですね、そして此の不法行爲のために、彼は決してボナパルトを赦さうとはせず、依然として彼をコルシカの食人鬼と呼んで居りました、そして何時も、彼に對して、彼が一度も聯隊の命令にさへ信用したことは無いと言つたり、彼は哀れ、べき一兵卒だと斷定したりして居りました。

『千八百二十年に、随分何年も前から鰥夫になつてゐたムシュー・ド・レッセーは、四十歳で再婚しました。相手は非常に若い婦人でしたが、可哀さうに、いつも休まずに彼のために地圖を作らせられて居りました。その女が、結婚後幾年か経つたから、女の子を彼に與へまして、産褥で亡くなりました。私の母は其の短かい病氣の間その女の看病をしたり、亦ん坊の世話をしたりしたのです。その赤ん坊の名前はクレマンティンだつたのです。』

「ですから、私達の家族とレッセー氏との關係は、此の誕生と死の時に初まつたことになるの

です。その内に、私が段々眞の幼年時代と別れかけてゐましたので、何となく憂鬱になつて來てゐました。見たり感じたりすることと能ざる悦びの力といふものが無くなつて了つて、凡ての事物が、あの一層感傷的な時代の魔力を形造る所の楽しい好奇心を少しも私に喚起さなくなつてゐました。クレマンティンの生れた以後の特別な記憶が、少しも私に無いといふのも、恐らく此の理由のためでせうね。只私は、その二三ヶ月後に一つの不幸に遇つたのを知つて居りますが、一寸其のことを考へると、今でも心臓が張り裂けるやうに思ひます。私の母が亡くなつたのでした大きな沈黙と、偉大な無情と、恐ろしい暗黒とが、忽ちにして家の中に漲つたやうな氣がしました。

『私は一種の知覺喪失に陥りました。父は私を Lycee(註、官立中學校)へ出しました、けれども私は、最も大きな努力を以て、やつと其の昏睡状態から醒めることが出來た位でした。』

『斯う申しましても、私は全然馬鹿ではありませんでした、で、私の教授達は、其の好む所のものを殆んど凡て、詰り、僅かばかりの希臘語と澤山な羅典語などを、私に教へ込むことが出來ました。私の智識は古代文明國に限られてゐました、私はミルティアデスを學んだりテミストークレスを敬つたりすることを習ひました。(註、共に紀元前四五百年のアゼンズの政事家)私は、少くとも偉大な執政官に通

曉あきすることの出来なかつた代りに、クインタス・フワビュース(註、前二百年代)には随分通曉するようになりました。是等の高尚な智識を誇つては居りましたが、一方で、小さいクレマンティンと其の老いた父親とが、何かの事情で、或る晴れた朝、多分再び歸つてくるだらうといふ瞬間の考へをも私に與へようとししないで、ノルマンディーへ出立したといふことを知つて、私は殆んど承服することか出来ませんでした。

『然し彼等は歸つて來ました、奥さん、彼等が歸つて來たのです！ 天の靈感よ、自然の力よ、あなた方は皆、愛する能力を人間に與へる神祕な力なのです。私がどんな風にして再びクレマンティンを見たか、あなたは御存じです！ 彼等は再び私達の、憂鬱な家庭へ入つたのです。赤い顚こぶみ顚のあたりに灰色の髪を二三本残して、すつかり禿かぶけ上つた彼は全く健康な老年の徴候を示して居りました。然し、彼の腕に凭れかゝる時、私が凡ゆる光りを見たあの神のやうな存在——その存在が、古い、色褪せた空間を照らした彼女——その彼女は決して幻像ではなかつたのです！ それはクレマンティン自身だつたのです！ 私は只、本當のことをお話しして居るのですが、その瞬間彼女のヴァイオレット色の眼は、私には超自然のものに見えました。今日でさへ私は、あの二つの生きた寶石が、何うして生の疲れを忍ぶことが出來たのか、又、死の腐蝕を蒙るやうにな

つたかといふことを考へることが出來ないのです。

『彼女は、私の父に挨拶する時に、少し羞かしみを示しました。彼女は私の父を記憶しなかつたのです。彼女の顔色は薄い石竹色で、半分開いた唇は永遠を思はせるやうな微笑を湛へて居りました——恐らく其れは何等特別な思想を現はしてゐないで、只生の悦びと、美しくあることの祝福とを表はしてゐたからでせうね。又、赤い頭巾の下には、彼女の顔は丁度、開いた手箱の中の寶石のやうに輝いて居りました。そして、腰のあたりに襷を取つた白いモスリンの外衣の上にかシミヤのスカーフを纏まとふて居りましたが、その裾からは、モロッコ革の小さい靴の先が見えてゐました。……おゝ！ 奥さん、あなたは私を嘲笑あざわらつてはいけませんよ、これは當時の流行だつたのですからね。又、今日の新しい流行が果して其の頃の流行ほどの單純たんじゆんと、華やかさと、上品な美とを有つて居るか何うか、私には分りません。

『ムシユー・ド・レッツセーは、私達の所へ、丁度彼の新しい歴史地圖の發行に着手して居るために巴里に住むつもりで歸つて來たといふことよ、若し彼の以前の部屋が空いて居れば、それを借りたく思つて居るといふことを、通知して寄越しました。私の父はクレマンチンに、巴里を訪ねることを悦んで居つたか何うかを訊きましたが、返答の代りに微笑の花を咲かして、さうであ

つたことを示しました。そして、青々と輝いてゐる庭園を見晴らす窓の方へその微笑を向けたり、黄色い天鵝絨で蔽ふた肘掛椅子や、或は、眼を上げて彼女の顔を見るのを恐れてゐた哀れな學生の方へ、その微笑を投げたりしました。あゝ、その日から——如何に私が彼女を愛したことでせう！

『然し、知らぬ間にセーブル街へ来ましたね、間もなくあなたの、窓の見える所へ来るでせうね。私は大變話の下手な人間ですから——若し何かの機會があつて——それを頭の中へ取入れて小説を組立てるようなことがあつても、到底成功しないでせう。大体が簡単に切り上げねばならぬ話を退屈な長さに引延ばして居つたのです。何故と申しますのに、其處には、老人が、何等かの悦ばしい冗漫さを以て、就中最も純な愛の情操を傷つけずには居られなかつた所の、一種のデリカシイと、何等かの魂の美とがあるのですから。さあ、此の、僧院の立竝んで居るブールヴァールをひと歩きしようぢやありませんか、そしたら私のお話も、あそこに見えるあの小さな塔の所へ行く間に造作無く終へるでせう……』

『ムシユー・ド・レッセーは、私が *École des Chartes* を卒業したのを知つた時、私が彼の歴史地理作製の手傳をする力があると決めて了ひました。詰り、昔の思想家がノアの時代からシャール

マンの時代までを、帝國の興亡と稱してゐた其のことを、地圖の順序で圖解しようといふ計畫だつたのです。ムシユー・ド・レッセーは、古代に就ての十八世紀の凡ゆる謬見を、全部自分頭に貯へて居りました。私は、歴史研究が關係してゐた以上、新奇な學校へ通つて居りましたが、丁度その時分私は、何うして見えを張るかといふことを知らない時代でした。老人がああ未開人の時代を理解した態度、といふよりも寧ろ曲解した態度——つまり朦朧とした古代の中に、只野心満々たる君主とか、偽善貧婪な僧正とか、善良な市民とか、或は詩人的哲學者とか、マーモンテールの小説以外には決して存在しないやうな人間とかをばかり見出さうとする執拗な決心——が、非常に私を不幸にしました、そして最初の内は、いつも私を興奮させて議論の中に惹入れました。——充分合理的ではあるが、全く無用なことでもあり、時には危険なものだつたのです。何しろムシユー・ド・レッセーは随分怒つほい質だし、クレマンティンは非常に美しかつたのですからね彼女と私とは、他人には内所で、多くの苦しみと悦びの時間を過ごしました。私は戀をしてゐたのです。元來私は臆病の質でしたから、世界が、アブラハムの時代や、メネスとか、デューカリオンの時代に現はしてゐた政治的方面とか歴史的方面とかに就て、彼から訊ねられた時は、どんなことでも私は承諾しました——これが、其後になつてクレマンティンを生んだ世界だつたので

す。

『大急ぎで私達二人が地図を書いて了ふと、クレマンチンは其れを水彩で着色しました。彼女はテーブルの上に伸掛つて、刷毛を軽く二本の指の間に持つてゐました。すると彼女の睫毛の影が兩の頬の上に落ちて、半ば開いた眼を美しい明暗の中に浸しました。偶と顔を上げるようなことがあると、いつも私は彼女が唇を尖らして居るのを見るのでした。彼女の美の中には、溜息らしいもの無しに呼吸することの出来なかつ程、豊富な表情がありました。又その最も普通な姿勢でさへ、いつも私を最も深い嘆賞の恍惚の中に惹入れるほどでした。私が彼女を瞳める時はいつも、ジユビターの神が嘗ては一個の暴君としてテッサリーの山岳地方を統治して居つたことがあるといふこと、又、オルフユース註、靈物なる古代希臘の樂人が無謀にも、僧侶に哲學を教へることを見捨てたといふことに就て、レッセー氏と全然意見が一致するのでした。私が此のやうなことであの頑固な老人と一致した時に、自分が果して臆病者であつたか、それとも英雄であつたかと云ふことは、今斷言することは出来ません。

『ムシユー・ド・レッセーは殆ど私に注意を拂はなかつたといふことを、私は告白しなければなりません。然し此の無關心は實に正當であり、又自然であるやうに見えましたから、私は其のこと

が不平を言ふ資格があるなど、夢にも思つたことはいりません。それが私を不幸にしましたが、當時は、自分が不幸だつたことを知らなかつたのです。私は希望に燃えて居りました。——その時分私達の仕事は、只、第一アツシヤリ帝國までしか進んでるませんでした。

『レッセー氏は毎晩來て、私の父と珈琲を飲みました。何ういふことから其れ程親しくなつたのか私には分りませんでした。何しろあれ程反對に出來て居る二つの性格は外に無いといふ位でしたからね。私の父は、殆ど何事にも感服しない代りに、大抵のことを許すことが出來ると云つたやうな人でした。而已ならず、年を取るに伴れて、凡て大袈裟な形式のものは何も彼も一層嫌ひになつてゐました。彼は無數のデリケートな陰影の表現を以て自分の思想を包み、又凡ゆる種類の接目無しでは一つの意見をも發表したことはございません。斯様な談話の癖といふものは、立派に修養した精神の者には自然ですが、いつも此の無意味恬淡な貴族を非常に苛々させて居りました。又其人は、相手の穩和のために些とも和らけられたことも無く——とにかく全然反對だつたのです！ 私はいつも一つの危険を豫見して居りました。その危険といふのはボナバルトだつたのです。私の父は、彼の記憶に對して何等特別な感情を抱いたことはございませんでした。けれども、其の指揮の下に働らくやうになつてから、彼が他人を罵つたり、殊にブルボン王家を